昭和４９年３月
秋田県文化財調査報告書第28集

鐙田遺跡発掘調査報告書

秋田県教育委員会
湯沢市教育委員会

序

秋田県湯沢市山田地区は以前から縄文時代中期から後期の遺物が発見される地域として知られていたが，昭和48年度県営圃場整備事業実施中，縄文晩期の住居址らしい遺構が発見された。直ちに湯沢市教育委員会と協議の上，緊急予備調査をしたところ，貴重な遺跡であることが判明し，文化庁記念物課に連絡の上，国庫補助を得て，６月14日から６月29日までの16日間緊急発掘調査を実施したのである。その結果縄文晩期終末期の土偶，土版，首飾，耳栓，櫛や多くの完形土器，石器が発見され，この遺跡と出土品は今後の県内におけるこの種の低湿地と縄文時代の終末期を研究する上に貴重な資料を提供するものと思われる。

今回は，幸いにも事前に発掘調査ができ，記録保存もできたわけであるが，今後とも遺跡の保存については慎重を期して参りたいし，本報告書がそういう意味で活用されることを期待したいものである。

おわりに文化庁記念物課をはじめ，調査を担当された各調査員，高校生の皆さん，湯沢市教育委員会，作業を中止して調査にご協力いただいた雄勝平野土地改良事務所，発掘機械を提供された斎藤土建の方々に深甚の謝意を表する次第である。

昭和４９年３月２０日

秋田県教育委員会

教育長　山　本　　一

目　　次

第1章　本調査に至るまでの経過……1
第2章　発掘調査と日誌……3
　①　調査の構成……3
　②　調査日誌……4
第3章　遺跡の位置と現状……7
第4章　調　　査……8
　A　グリットの設定……8
　B　層　　序……8
　C　遺　　構……10
　D　出土遺物……11
　(イ)　自然遺物……11
　鐙田遺跡A地点の自然遺物……11
　(ロ)　人口遺物……12
　鐙田遺跡A地点の遺物の総出土量……12
　鐙田遺跡A地点土器の器形と文様……12
　鐙田遺跡B地点の遺物の総出土量……18
　鐙田遺跡A地点の土製品……20
　鐙田遺跡A地点の木製品……22
　鐙田遺跡B地点の木製品……22
　鐙田遺跡B地点の土製品……22
　鐙田遺跡A地点の石器……23
　鐙田遺跡A地点の石製品……24
　鐙田遺跡B地点の石器……25
　(ハ)　周辺遺跡の遺物
　塞の神遺跡の遺物……26
　塞の神遺跡の土器・器形と文様……27
　鐙田遺跡をめぐる周辺遺跡と遺物……29
第5章　ま　と　め……29

図　版　目　次

図面1　鐙田遺跡位置図……35
図面2　大規模圃場整備事業現況平面図……36
図面3　A地点グリット設定図……37

図面4　新排水溝南壁層序……37
図面5　鐙田遺跡A地区平面，断面図および土層図……38
遺物実測図1……39
遺物実測図2……40
遺物実測図3……41
遺物実測図4……42
遺物実測図5……43
遺物実測図6……44
遺物実測図7……45

写　真　目　次

第1図　遺　跡　写　真……46
写真1　鐙田遺跡A地点……46
2　鐙田遺跡A地点臨時排水溝……46
3　鐙田遺跡A地点排水溝側壁に現われた層序……46
4　鐙田遺跡A地点で誤認された柱列断面……46
5　A地点発掘風景……47
6　上層部遺物包含層……47
7　上層部遺物包含層……47
8　遺跡東縁の柱穴と土坑……47
9　上層部土器出土状況……48
10　上層部土偶出土状況……48
11　上層部土器出土状況……48
12　上層部土偶出土状況……48
13　上層部土器出土状況……48
14　下層部の泥炭化植物質堆積層―第7層……49
15　泥炭化植物質堆積層上面の木材……49
16　植物質堆積層中の樹根……49
17　植物質堆積層上面の木材とクルミ類……49
18　植物質堆積層上面の木材と土器……50
19　塞の神遺跡断面……50
20　鐙田遺跡B地点の土器出土状況……50
21　鐙田遺跡B地点の石器出土状況……50
第2図　鐙田遺跡A地点出土遺物1～3……51
第3図　〃　4～7……51

第４図　鐙田遺跡Ａ地点出土遺物１～23……52
第５図　〃　１～18……53
第６図　〃　１～17……54
第７図　〃　１～17……55
第８図　〃　１～19……56
第９図　〃　１～17……57
第10図　〃　１～24……58
第11図　〃　１～９……59
第12図　〃　１～14……60
第13図　〃　１～６……61
第14図　〃　１～７……62
第15図　〃　１～14……63
第16図　〃　１～67……64
第17図　〃　１～15……65
第18図　〃　１～６、塞の神石器７～12……66
第19図　鐙田遺跡Ｂ地点出土遺物１～27……67
第20図　〃　１～24……68
第21図　〃　１～12……69
第22図　〃　13～19……70
第23図　塞の神遺跡出土遺物　１～20……71
第24図　〃　１～18……72
第25図　〃　１～17……73

第1章　本調査に至るまでの経過

遺跡の特殊性と発見の契機――遺跡地点およびその周辺は古老の言によると，地下水の豊富に湧出する泉などを含むひどい湿地帯で，畑にもならない沼状況の不毛地として長く放置されていたそうで，それが現在のように水田化されたのは極く最近のことだそうである。

水田化される前の周辺の地形図を見ると（測図２），遺跡をめぐって蛇行する細流が遺跡の北端部で著しく太くなり，２本に分岐した後更に北流している。恐らくそのためであろう遺跡北端部の水田は現在も沼沢状の湿地となっていて，地下水の湧出で水浸しになっている。

近傍の低台地部にある塞の神遺跡が30～40年も前から土地の人々に知られ，好事家の盗掘にあって相当荒らされているにもかかわらず，本遺跡のみが誰にも知られることなく，全くの処女遺跡として今日まで残されていたことの理由は，この鎧田遺跡が文字通りの低湿地遺跡であったことによるものであろう。

それが遂に発見されるに至った契機は，昭和48年度県営圃場整備工事で新排水溝予定路設定のため，ブルドーザーで部分的な地ならし作業を行った際，全く遇然に遺物包含層が露出したことで，工事請負業者柴田与市郎氏が筆者山下を現地へ案内してくれたことによって初めて，貴重な縄文晩期最末期の遺跡であることが判明するに至った。

予備調査――昭和48年４月下旬から５月上旬に至る飛石連休を利用して，山下は通計６日間予備調査を行った。新排水溝予定地の南側の比高の高い地点を選んで長さ東西６ｍ，南北４ｍの矩形トレンチを設定（測図３），Ｂトレンチと命名し，内部を２ｍ平方の６区分に区分して発掘を始めたが，包含遺物の量が意外に多く，調査が遅々として渉らないので，このトレンチの直ぐ北側に層序検出のみを目的とした狭長なＣトレンチを設定（東西の長さ６ｍ，幅 0.5ｍ）し，遺物の採集を無視して掘り下げを実施した。その結果のＣトレンチ南壁の層序は，第１層は淡褐色の水田耕土層で厚さは約25cm，遺物は全く包含されていなかった。第２層は赤褐色の礫層で僅か６～10cmの薄層であった。これは耕土層中の礫石が水田耕作の攪拌によって沈澱したもので，水田耕土層の下底部に見られる一般的な地層である。従ってこの地層中には第１層（耕土層）中に含まれていた須恵器や土師器などの歴史時代遺物が，炭化米などと共に極く少量ではあるが含まれていた。第３層は黒褐色の上層部遺物包含層で，その厚さは30～50cm。遺物の包含量は夥しかった。第４層は多量の水分を含む青灰色細砂層で，厚さは10～40cmと厚薄の差が著しく，西半部が特に薄かった。そしてこの薄い青灰色細砂層の下には茶褐色の植物性腐蝕土層があった。吾々はこれを地山と考えてＣトレンチの掘り下げを中止したが，後にこれは地山ではないことが判明した。Ｂトレンチは予想通り上層部遺物包含層（第３層）すら完全に掘り尽すことができないで調査を終ってしまった。

遇然の大発見――予備調査の最中に予期しなかったハプニングが起った。もともとこの予備調査は圃場整備工事中の緊急調査であったから，当然その地点の工事は一時中止させた訳だが，工事の現場責任者としては周辺工事がどんどん進捗している中で，そこだけを取り残しておくことは技術的にも無理があったようで，工事担当者は吾々が飛石連休で調査を中止している間に，吾々には無断で排水溝を掘り進めてしまった。但しそれは臨時の排水溝で，調査中のトレンチを大きく迂回してコの字形

に掘られた(第1図2，測図4)。調査地点を避けたという意味で工事関係者の誠意は充分に伺えるのであるが，それでも遺跡が予想以上に大きかったので，遺跡は完全に分断されてしまうことになったのである。

ところが幸か不幸かその排水溝側壁には，驚ろくべき大遺跡の全体の断面が，鮮かに露出することとなったのである。その情況（第1図3，4，測図4）は遺物包含層を含む遺跡全体の層序が半弓状に窪んで，如何にも縄文晩期の巨大住居址らしい様相を露呈していたのである。その竪穴の幅は12m中央最深部の深さは1.10m。その地層構成は第1層（耕土層）と第2層（薄礫層）は既にブルドーザーによって剝ぎ取られていたが，これらは恐らく前記Cトレンチ側壁のそれと同じであったことと思う。第3層は黒褐色土層で，両端が薄く中央の厚い半弓状（竪穴状）を呈し，中央部の最も厚い所で60cm。これが上層部遺物包含層である。第4層は青灰色細砂層で最も厚い所（側壁東半分）で40cm，薄い所（側壁西半分）は僅か5cmの薄層であった。ところがこの第4層の下部には樹葉・樹枝・樹幹を多量に含む茶褐色の腐蝕土層があって，その厚さは中央より西半部がやや厚くて25cm，東半部は20cm前後で薄く，かつ比高も西半部より約15cm低かった。こうした新排水溝側壁の層序と，予備調査時のCトレンチ側壁のそれとは全く同一であった。そしてこの第4層，下層部の植物性腐蝕土層の上面からもCトレンチの同層上面と同様に少なからず土器片が出土し，遺物包含層であることがほぼ判明した。のみならず新排水溝側壁の同層中からは柱木かと思える径10～15cmの木材の断面が8個露顕した。その各々の木材の間隔は測図3に見る如く，A～B間が1m，B～C間が0.55m，C～D間が0.6m，D～E間が1m，E～F間が0.9m，F～G間が0.55m，G～H間が1.2mであった。その埋没状態は一見直立し，かつ並列しているかに思われたが，中には倒れているものもあり，また明らかに樹枝状を呈するものもあって，柱列や棚列と断定するには聊か躊躇を感じさせるものもあった。この植物質腐蝕土層中に包含される木材以外の植物性自然遺物には，多量のクルミ・トチなどの堅果類があったが，それらはみな腐蝕したものではなく，水分の多い地底で泥炭化した植物質堆積層であることは明らかであった。

以上第3層および第4層下層部の泥炭化植物質堆積層はすべて，大規模竪穴を思わせる地山（粗砂礫層）の半弓状の窪みの中にのみ存在していて，その範囲からは全然はみ出している形跡がなかったそこで吾々は最上層の遺物包含層（第3層）の切れ目を，遺跡の全周辺において確認することができれば，少くとも上層部竪穴のアウトラインだけは把握できるのではないかと考え，それを小ピットを掘る方法で追求して見たところ，その結果は測図5に見る如き南北にのびる長楕円形で，一見舟形遺構に類似していることが，大体推察された。

以上が予備調査時に判明した鐙田遺跡A地点の概況であるが，圃場整備の排水溝掘削工事の進行につれて，A地点周辺の同期遺物包含地点も次々と判明して行った。A地点の東方約30mの同一排水溝側壁に，幅25m厚さ約50cmの黒褐色土層が現われ，その側壁や排土中から完型土器を含む多量の土器片・石器類と共に，泥炭化木材なども出土した。これが鐙田B地点である。またそこから更に東方約30mの同一排水溝側壁にも，埋没木材やクルミ等を夥しく出土する黒褐色土層が現われたが，どういうものかそこからは人工遺物が全く出土しなかった。然しその排水溝から少し離れた北方の水田中からは，ブルドーザーに掘り起こされた黒褐色土層中から，同様の自然遺物と共に僅少ながら同期

土器片が出土している。ここが鎧田C地点である。思うに同じような木材や堅果類を多量に含む黒褐色土層のある所でも，人工遺物の出る所と出ない所，言い換えればそこに人が住んだ所と住まなかった所が，あったようである。その他にも調査結果に余り期待のかけられそうにない小規模の遺物包含地が，同一排水溝の側壁に2個所程現われていた。

本調査計画の決定――筆者山下は鎧田遺跡が意外に大きな縄文晩期末低湿地遺跡群であることに驚ろき，これを直ちに市教委および県教委に通報，爾後の対策を協議したが幸に国の補助金も得ることができたので，暑中休暇を利用し長期大規模の調査を行うこととした。ところが地元の水田所有者団体は，8月の暑中休暇の終るまで3カ月間も圃場整備工事をストップすることになれば，今年中に工事が完了することが覚束無く，来年度の春耕準備に支障を来す恐れもあるので，発掘調査は是非とも6月中に終了するようにしてもらいたい，との代表者の申入れがあり，陳情運動すら起しかねない情勢となった。そこで県および調査員の吾々も事情止むを得ざるを知り，期間を16日間の最少限に切りつめ，調査も地元の要望通り6月中に終了することに最終決定を行った次第である。　（山下孫継）

第2章　発掘調査と日誌

(1) 調査の構成

A 調査主体

[redacted]，秋田県教育委員会，湯沢市教育委員会

B 調査期間

昭和48年6月14日～29日（16日間）

C 調査地域

秋田県湯沢市松岡字鎧田 127番地，および寒の神

D 調査員

- 総括責任者　日本考古学協会員　山下孫継
- 発掘調査員　県文化財専門委員　鍋倉勝夫
- 〃　横手高等学校教諭　杉渕馨
- 〃　増田高等学校教諭　遠藤博通

発掘助手として

◇湯沢高校　社会クラブ顧問橋本俊信，3年―由利敏育，宮崎三千男，新山富弥雄，森岡貞夫，阿部俊一，今野弥一，本多利行，2年―高橋誠，高橋吉春，小番睦子，清川昌子，1年―根本賢一，小野寺博之，高橋芳彦，斎藤正寿，石沢則子，奥山貴美子，高橋千鶴子（以上18名）

◇湯沢北高　社会クラブ顧問池田憲和，3年―伊藤キヨ子，佐藤えい子，小野寺初代，黒沢英子，斎藤雅子，佐藤栄子，2年―小西睦子，佐藤久美子，小川厚子，後藤和子，佐々木弘子，伊藤美奈子，小畑稲子，小西葉子，1年―今博子，矢野美幸，高橋明実，佐藤博美，黒政美紀子，井川幸子，菊地優子，古関翠，斎藤久美子（以上23名）

◇増田高校　3年―佐藤敏朗，山中幸彦，後藤昌太郎，木村盛治，遠藤玲子，高橋洋子，2年―

菅原好雄，山田毅明，佐藤正博，岩村千寿子，後藤洋子，山田純子，阿部峰子，大石悦子，高橋とも子，高橋るみ子，１年＝高橋秀行，石田進，高橋実，山下照雄，鈴木浩二郎，高橋洋子，山本裕子，佐藤糸子，佐藤洋子，柴田ひろ子，土谷恵子，鈴木マリ子（以上28名）

◇横手高校　３年＝大坂茂，梅川享，大倉菜保子，佐々木隆，２年＝荒川肇，佐藤悦子，東海林章，高橋正人，照井義宣，藤沢昌，１年＝荒川真理子，井上利光，大隅政一，鈴木光勇，鈴木勇幸，佐々木満，小西勝（以上17名）

○発掘工事協力者

斎藤組　斎藤兵太郎，斎藤省剛

○地元協力者

藤原隆三，雄勝平野土地改良事務所長大井健，山田小学校長古関勝蔵，山田公民館長大沼秀雄，同主事大沼富蔵

○湯沢市教育委員会

教育長柴田四郎，教育課長伊藤英一，社会教育係長長沢養一，社会教育係主事古川三千男，同菅日出男

○発掘事務担当

秋田県教育庁文化課門間光夫，中谷雅昭，森本武治

なお地元の教育委員会関係者を始め，山田公民館長大沼秀雄氏，山田小学校長古関勝蔵氏ならびに土地改良事務所長や斎藤組より機材一般，遺物保管の場所提供とその作業場の確保について多大な援助，御協力をいただいたことは，外堀在住の元小学校長藤原隆三氏に対してとともに，ここに記して厚く謝意をのべる次第である。

(2) 調　査　日　誌

6月14日(木)　曇　初日

ＡＭ10時，鍋倉，杉渕および文化課の中谷，森本両氏の４名が湯沢市役所に到着。市教育長および土地改良事務所長に挨拶。同10時30分現場着。山下氏と合流し，テント張り及び調査に協力する人夫一同と共に打ち合せを完了。

ＰＭ１時に作業開始。グリットの設定と（４×４の８㎡。東西Ａ～Ｎ，南北１～15の 3,360㎡），その一部ブルドーザーによる排土作業を実施する。鍋倉，杉渕による$S=\frac{1}{200}$のグリット設定の平板測量を平行して行なう。ＰＭ６時45分宿泊地に帰る。

なお，Ｃおよび５グリット内に幅50cmのベルトを残しセクション作成の便を考慮する。

6月15日(金)　曇のち晴　２日目

６－Ｄ，Ｅと８－Ｄ，Ｆの４グリットを地表下40cmまで掘り下げると同時に６－Ｇも同レベルまで下げる。前者グリット内に西南を中心に半円状のプランが顕著。後者は黒色粘土層〔第３層〕に大洞Ａ式の台付浅鉢形の破片が続出する。

８－Ｄグリットは礫層の下が緑色の砂層となり遺物は皆無で湧水が激しかった。（４調査のB_1層序で具体的に述べている）同Ｆグリットの第３層からは前述の６－Ｇと同様にＡ式の破片が出土している。

6月16日(土)　曇のち晴　３日目

「コ」の字状水路北側の2—D，Eの2グリットと4—D，E，5—Eの計5グリットを調査する。前者は，現地表下25cmで青色粘土上面が表われ，それを暗褐色土が楕円状に穿っており，深部まで漸次掘り進め，丸玉，打製石斧が検出される。

同グリットの中央部（水路隅）の土層中に灰白色の堆積土あり，その下部が炭化物および土器破片混入土となっている。更にその下は木材，植物性の豊富な褐色土となる(20cmの厚さ)。

4—Dは予備調査時の地域であり，若干の攪乱があったが，3～4層からは土器破片が続出。

同Eグリットの4層からは石剣，土偶，5—Eからは大洞A式の台付浅鉢が発見される。5—Eは，3層までの排土で終了する。4—Eは北東部に青色粘土層と暗褐色土層との境界が表われる。

2—D，Eの延長とも思われるこの状態は明日に精査する予定。魁新報社湯沢支局長来跡。

6月17日(日) 曇のち晴　4日目

県南高校生（湯沢北，湯沢，増田高）30余名の援助を得て，昨日の作業継続に終始する。新たに5Fグリットの拡張と，予備調査時の範囲を含めた地域を中心に7グリットの排土を実施する。粗製深鉢，土偶脚部(2)，石鏃，台付浅鉢を始め植物種子などが各グリットから発見される。北の4—E，Dは6層上面までの掘り下げが終了。材質性の遺物はそのままにし，その位置確認と細部の実測を始める。見学者多数。

6月18日(月) 晴のち雨　5日目

本日，新たに6—Fグリット第3層まで掘り進めた外，前日よりの試掘範囲内の精査に重点をおいて実施した。本日まで13グリット(208m²)を調査。前者より小型壺，復元可能土器片，5—D北東隅より木製朱塗の櫛，5—F 3層上～下部より数多くの土器が出土したが，特に5—Fグリットより出土した土器の数点が，昨夜，盗難にあった事実は，調査体制および遺跡保存対策に欠点があったことはまぬがれない。

直ちに市教育委員会に連絡〔柴田，伊藤，板倉教育関係者〕し，今後の対策を考慮する。

調査範囲の周わりに有刺鉄線をはる作業が豪雨の中に進められ，PM5時に作業は終了。

6月19日(火) 雨のち晴　6日目

昨夜らいの集中的降雨により現場は一部を除いて，冠水したが午前中，その排水に全力をあげると共に，午後より新たに7－8Gグリットの2区画の排土作業をする。ベルトコンベアーの利用により合理的な作業体制をとる。

7～8Gグリットの東部は第2層の赤褐色土が漸次高まりをみせ，西部になるにしたがい黒色粘土層が深まり，多くの土器（11個）が発見され，東隣にある7—Hグリットの相互関係を追うため拡張する作業に切り換える。なお，黒色土と赤褐色土の境界は，その土層平面で明瞭であり，北部の6—G，5—Fの東部にその延長が把握できる状態となる。細部にわたる写真撮影。

午後より高さ25mの櫓が完成したため，現場の俯瞰写真をとり終え，調査範囲内の深部精査に平行して写真をとることを計画。

6月20日(水) 雨　7日目

4～5Cの2グリットを調査する。冠水のため作業は一進一退。同グリット第2層上面より41cmで青色粘土層があらわれ，遺物はあまりないが，その東部からは黒色粘土層となり，かなりの土器が均

一性に欠く状況で出土する。

東部に向って鍋底状となり遺物包含層は厚くなる。4～5層より土版，土偶脚部，赤色塗りの小玉が数点発見される。バケツにて材質遺物の保存のため排水作業の徹底を実施。

6月21日(木) 雨　8日目

約 350㎡の範囲内で同レベルまでの調査を実施する(グリット数は本日まで21)。比較的，冠水されていない3—D，E，2—D，Eの4グリットと4—Fグリットを調査。3—D内には材質遺物がかなり密集して検出されたが，いわゆる木材として人工的な加工部の有無は不明であった。

4—Fの大部分は，第2層の赤褐色土であり遺物は皆無。6—G，7—G，Fの第3～4層の精査によって，黒色粘土中より，青色粘土を基盤として土器が設置されているが如く見い出され，ある種の遺構？と確認されるに至った。

同時に4層の青色粘土上面には，土版，土偶顔部が発見される。5—E中央部より刻線石が出土するなど，かなり多くの遺物を収納。

6月22日(金) 雨のち曇　9日目

昨日の作業を続行。晴れ間をみて細部にわたる実測を鍋倉，杉渕両氏により，セクション，木材箇所を1/20，1/40でとり終える。特に3—D，E（水路に近接）内の材質遺物は，予備調査時に水路断面に出土したものより，10～15cm程上部に位置していることは確実であった。

午後より湯沢市文化財保護委員6名来跡。

6月23日(土) 雨のち晴　10日目

昨日と同様，集中的雨により作業は中断がちである。3—Fの排土を強行し，第2層を排土。

しかし冠水が顕著であるため，午前中で作業は中止し，午後より遺物の整理ならびに洗浄作業に切り換え，その2/3ほどを終了する。

PM3時，現場で測量を開始し，(基準材の設定と全体地形の測量）その精査に終始する。

B.M(ベンチ・マーク）は真北より東に52°02′の方位に設定。

6月24日(日) 曇　11日目

高校生（横手高，湯沢北，湯沢，増田高）および顧問の先生らの援助があり，付近の排土や周辺遺跡の分布調査，その精査が一斉におこなわれると同時に，南東部の遺構確認に力が注入された。その結果，浅い鍋底状のセクションを成す。長楕円形のプランを成す区域内の底部に，頭と脚部が分離している大型土偶が発見された(深さ40cm，7—F東隅)。見学者多数来跡し終始にぎわいを呈する。午後より遺構の中央部を走るベルトの南壁のセクション（土層）図をとり終え，そのプランのための実測地点を設定し，明日にそなえPM5時に終了。

6月25日(月) 晴　12日目

遺構の実測と，6—D，E，F，Gの写真，セクション図を完成する。北部の材質（この中には土版，丸玉，土器，櫛などの遺物が流木の間に続々と検出される）の輪郭を明確にする作業。

6月26日(火) 晴　13日目

層序確認と，その実測図作成のため，中央部の東西に残していた幅50cmのベルト帯を整理。写真撮影後ただちに土層図を1/40でとり終える。6—7G両グリット東側より発見された 110×65cm，深さ35

cmの土坑内から土版２点の他，土器底部，礫が砂，粘土と炭化物包含土などの充填土中に発見されたが，その作成目的が墓坑もしくは祭祀遺構かは不明であった。

付近の白山神社頂上より８ミリ撮影と調査グリットの部分撮影。土器洗いとフルイ作業により，細かな丸玉類，木片の検出を実施。

６月27日(水)　晴　14日目

現場より東方へ50m付近にあるＢ地区の８グリットを精査する一方，(５Ｐ，Ｑ，Ｒの３グリット，約 130m²）水路断面にみる土層図の実測を終了する。新たに９―Ｇグリットを調査。第３層上部より完全な土版出土。まだ南東部一帯に第３層の黒色粘土の範囲が延長している点は，この遺跡の性格を知る手がかりになるものと思われたが，残り少ない調査期間のため，一応打ち切る現状となる。

午後より材質遺物一群の位置と形状を平板測量で鍋倉，杉渕両氏がとり終える。

６月28日(木)　晴　15日目

本日まで約 480m²を完掘する。水路付近の流木，木根などの一連の材質遺物の写真撮影とその細部実測図（1/20）の完成が午前中の仕事。

Ｃ―Ｄ間にある南北中央ベルト帯の排土作業をベルトコンベアーにて進め，遺物収集を完全にする。午後３時にて本日の作業を終了。

同４時より付近の公民館にて調査した成果の発表と，協力してくれた人々の慰労がなされる。終了後，図面の点検と整理についやす。

６月29日(金)　晴　16日目（最終日）

本日で調査全日程は終了する。午前中，総合的な見地から最終的な細部検討をする。

残された５～６グリット中央部のベルトを排土する。ＡＭ10時，発掘現場にて記者会見を行い山下氏が本遺跡の総合見解を発表。

櫓の撤去と機材の整備，テント，人夫小屋や有刺鉄線の除去などを，パネル板と機械類を全て持主にかえし全日程を終了する。

午後４時，記念撮影をし全員が発掘現場を去る。なお６月30日に遺跡南方の高所より土砂を運搬し，現場に覆土し圃場整備事業が開始され，鎧田遺跡が土中に埋没されたことを付記する。

また，調査に協力してくれた高校生60名により８月２日より５日間，湯沢市山田小学校を中心に出土した土器などの遺物洗浄復元作業が実施されたことにより，整理と報告書作成にとって多大な貢献をしてくれた点もつけ加える。(S48年12月４日「秋田さきがけ」夕刊に高校生の奉仕により復元した土器およそ 100点が湯沢中央公民館で一般公開され，連日見学者でにぎわいをみせているニュースが報道された)。（鍋倉勝夫）

第３章　遺跡の位置と現状

遺跡は，秋田県湯沢市松岡字鎧田（アブミデン）127番地に存する(測図１，第１図１)。秋田県南部，横手盆地の南端に位置する奥羽本線湯沢駅の西方には笹森丘陵が広がっており，更に奥には丁岳山地が続いている。この連山の中にあって鳥海山がひときわ高くそびえているが，鳥海山の方向，盆地に

接して標高 289mの白山が見える。遺跡は，その白山のふもとの水田中に営まれたものである。即ち，湯沢駅の西方約 4.2km，白山の東方約1kmの地点，標高約92mの沖積地である。

遺跡の西側及び南側は院内凝灰岩層から成る低丘陵地帯（笹森丘陵）になっていて，そこから流出する大戸川（旧称作内川）が遺跡の南方 600mの地点を北流している。また，東側と北側は水田地帯となっていて，横手盆地を北に貫流する雄物川本流に向ってなだらかな傾斜をなしている。遺跡の地点は長く不毛の湿地として放置されていた土地で，現在のように埋めたてられて水田化されたのはごく最近のことであったらしい(測図２)。従って，遺跡は今まで知られておらず，県営大規模圃場整備計画によって初めてその存在が明らかになったわけである。遺跡付近には縦横に小水路がめぐっており，良好な低湿地遺跡となっている。

周辺の標高 100m前後の沖積地には，笹森丘陵に沿って縄文晩期の遺跡が点在している。遺跡の東方約 130mのところには塞の神遺跡が，東方約 2.2kmの地点には山田中学校グラウンド遺跡が，南東約3kmのところには土沢遺跡などが発見されている。また，笹森丘陵の横手盆地側先端部を見てみると，北西約5kmの地点には小松遺跡，松ケ台遺跡，世ノ沢遺跡などの縄文前期及び中期の遺跡が見られる。更に西方の白山中腹にある白山神社への途中の丘陵には，寿永三年銘金銅唐草文経筒及び，建久七年に追納された経筒をもつ松岡経塚があり，北西約 600mのところには旧松岡金山がある。

第4章　調　　査

A　グリットの設定

新排水溝南側および予備調査の層序を見てみると，第３層黒褐色粘土層から第４層下層部の茶褐色植物腐蝕土層にかけてが遺物包含層である(測図４)。特に第３層の分布する範囲（測図５）が遺跡の範囲と考えて，４ｍ×４ｍのグリッドを磁北にあわせて設定した。グリッドの南北軸には北から南にかけて算用数字を，東西軸には西から東にかけてアルファベットを附し，グリッド名はその座標で呼ぶことにした（測図３)。

黒褐色粘土層は４Ｅグリッドを中心として，東西に約16m，南北に約20mの範囲に分布している(第１図６，７）が，更に東の方４Ｍグリッドを中心として東西約10m，南北約10mの範囲にも分布している。新排水溝の断面を見てみると，二地点の黒褐色粘土層の間には関連が見られず，西側の地点をＡ地点，東側の地点をＢ地点と呼ぶことにした。今回の調査は，Ａ地点が対象となるが，余力があればＢ地点も調査することにした。しかし，Ｂ地点は調査するまでに至らず，Ａ地点の黒色粘土層範囲を完掘するにとどまった。

予備調査のＢトレンチは５Ｄグリッドと５Ｅグリッドに，Ｃトレンチは４Ｄグリッドと４Ｅグリッドにおさまっている。また，木材の露出している新排水溝は西から東にかけて設置されているが，その位置はグリッドの３の列と４の列に大体おさまっている（測図５)。（杉渕　馨）

B　層　　序

調査範囲地域に十字状にベルト帯（幅50cm）を残した南北壁（第１図６，７）や，水路測溝の北壁（測図４）および８―Ｄ東壁にあらわれた土層を資料として，その層序をみると，地域によって多少

の違いはあれ，全体的には７層に大別される（測図５）。以下，具体的に記述するが，遺跡発見の発端となった新排水溝付近は，細分化した土層記述としているため，必らずしも一致していない。

第１層――耕作土層。厚さ10～28cm。水田。

第２層――礫層。厚さ６～15cm。耕土層中にあった礫（５～10cm前後）が，今日までの水田耕作によって沈澱したために完成された土層で，本遺跡周辺一帯にみられる。しかし圃場整備事業によるブルドーザー排土によって，地域ではこの２層がすでに表面に現われているところもある。

第３層――３つに細分される。上から赤褐色土層（若干小礫含む），褐色土層，黒色土層である。後２つは粘土性分が多く遺物包含の中心的土層になっている。遺跡の東西では，赤褐色土層がそのまま第７層の礫層と続き，４～６層までの土層は，その中間に存在しない。

厚さは20～40cmで地域によっては褐色土層より下部に位置している場合もある。褐色と黒色土層の厚さは30～60cm前後で人工遺物が多量に発見される層である。若干，木炭も混入。

第４層――これも２つに細分化される。ひとつは青灰色の砂土層であり，他のひとつは腐植した木質性遺物[註１]を含むいわゆる腐植土層である。レベルはほぼ同じであるが，前者の厚さが５～35cmと厚薄の差が著しく見分けにくいが，２～３cmほどのバンド状で腐植土層の上部を走っているため，この２層を分離すべきであろうが，その一般的層序よりここでは第４層に組み入れた。なお，この青灰色砂土層は，多量の水分を含み，厚い部分には２～４cmの木炭層が２～３本縦走している箇所よある。

遺物は皆無。山下氏によれば中屋敷遺跡（昭和47年調査，湯沢市山田に所在，安行Ⅰ～Ⅱ式に平行する縄文後期遺跡）の遺物包含層下にもこの種の土層が厚く堆積しているとの報告がある。

後者の厚さは10～30cm前後。樹枝状の木[註２]や葉の腐植した土層であり，小玉，櫛，土版などが土器片とともに検出されている。

第５層――砂礫層。厚さ６cmと薄く，10cm以内のこの層中には遺物はないが，時に植物性の実や殻と流木が数点，発見されるのみである。

第６層――青色砂土層。厚さ６～７cmで第５層とほぼ同じ厚さをもち，南北に平行に伸びているが，外側になるにつれ漸次上にあがり，第３，４層とともに前述の赤褐色土層によってたち切られている。また，第４層の粘土性に富む青灰色砂土層とは異なり，きめは粗く，若干の小礫を含んでいる。遺物なし。

第７層――礫層。純然たる礫が含まれており，略々７～８cmの大きさの礫であって，この遺跡のいわゆる地山である。前述した如く，この７層は，南北に広がる一方しだいに上部にせり上り，３～４層は完全に姿を消す。

以上が本遺跡の土層内容であるがこれより東方30m地点の調査区域でもほぼ同様なる層序が確認されたが，西方 130mの塞の神遺跡は，本遺跡に比べ２m弱高所にあり（休耕田[註３]と畑）その土層も若干の異なりをみせている。即ち比高を異にする段落部における層序でみた限りでは，１層（耕土層），２層（黒褐色土層，遺物包含層），３層（褐色砂礫層），４層（礫層）となり，その厚さは10～15cm→18～20cm→５cmで第４層に入り，３層は凹凸の激しいバンド状をなす。

塞ノ神の位置する北辺一帯は，狭い範囲であるが明らかに湿地帯の景観をなすもので，その継続は本遺跡にまで伸延している。

（註１）　これと類似するのは大戸川源流で多量に産出する化石（貝）を含む砂岩であろうと山下氏は考えている。(軟質で細かな砂岩。水で分解しやすい。)

（註２）　山下孫継「鐙田遺跡Ａ地点第１次発掘調査報告書」Ｓ48．10．

（註３）　古来より「矢の根石」が出る場所として部落人らに衆知の遺跡である。秋田の遺跡地名表では通番号 180とあり，縄文晩期の大洞Ｂ式を出土する遺物包含地となっている。

Ｃ　遺　　構

本遺跡で調査した 480m²中，その⅔以上をしめるＡ地区における遺構については，結論的に言うならば縄文晩期終末期の低湿地遺構と判断され，本県ではその稀少価値が大きい遺跡であるということに他ならない。

その内容は大体３つに大別されるので以下具体的に記述する。

１は，この遺跡が発見される発端をなした圃場整備事業において,「コ」の字状に掘られた排水路を中心に現われた樹木，葉の腐植土層に伴なう遺構である(はたして「遺構」という名で呼べるかは問題である)。即ち，南北最大幅で8.60m，東西約21m（北部付近はまだ伸延する）の楕円状内に多くの腐植根，流木，樹葉などの材質遺物が発見された地域である。

前述した層序内での文章で明らかなようにこれらは現地表から約80～90cm下の第４層下部に検出されるものであるが，平坦に横たわっているもの，図の矢印の如く更に５～６層に突ききさり，しかも一方よりのささり方を成さない出土状況であった。しかし，５—Ｃ，Ｄグリット内の腐植した木根の位置は，動いた形跡は見られない。確実に断言できることは，これらの樹木群中，人間によって加工されたいわゆる材（ざい）はまったく見られなかった点であり，当初推定した柱木もしくはその他の家屋に関する用材という考えを否定するものであったことと，腐植土を詳細に見分すれば樹葉の量がかなり多く，その結果厚く堆積していた部分があったこと。そして第３に樹木群と同レベルで大洞Ａ式の台付浅鉢や同種の破片，土版，櫛，丸玉などの遺物が散在（丸玉は一カ所に密集して出土）して発見されるという事実である。板材として，手斧などの道具による加工材にほど遠い樹木群は，その８割以上が流木と判断してさしつかえないものである。

２は，真北と直交する東西に長く浅い掘り込みを呈する遺構である。南北4.50m，東西 15.40mの数値をもち，東西で浅く交わる平面をなすこの形状を我々は「舟形遺構」と便宜上呼んだが，その位置する深さは前述の樹木群より浅い部分にあることは明白である。つまり，第４層（青灰色砂土層——粘土質がかなり強い——）を基盤とし，上部の第３層の断面が浅い鍋底状を呈していて，特に北側の中央付近は，明らかに第２層が２段となり南方へ漸次深まりをみせているのである。また，東西の交点付近は判然としなかったが，基盤となっている土層が序々に深まりをみる点で判断せざるをえなかった。黒褐色粘土層の特に下部（４層との接触部）からは大洞Ａ式の浅鉢，小型壺，土偶一体，土版が発見され，ある程度，人工的な掘り込みをなし，そこになんらかの意図が動いた結果，こうした生活用品を設置もしくは投捨したものと考えられるが，あくまでも推論にすぎない。ただ，前述した土偶は，頭部と胴～脚部（右足首は欠損）とが離れ，この遺構の東部壁ぎわよりに並んだ恰好で出土した点は興味ある事実である(日誌６月24日参照)。

深さは中央で30cm。３と４層との間は，なんなく分離（カパカパはげる）され,南北壁の第３層(赤

褐色土層）上に薄く堆積し，漸次的に消滅して壁部を構成しているのである。

3は，6－Gグリット北隅に検出された小さな土坑と言えるべき遺構である。長径1.40m，短径70cmのプランを成し，深さ40cmで中央底に向って傾斜する土坑である。3層を掘り込んで作成されたこの遺構の充填土は，暗茶褐色土であり，土器破片（底部）3点と小礫1個が浮いた状態で出土したが，北側の底部壁に接して土版（同種のもの）2点が発見（第1図8）された。

充填土中には砂および粘土，炭化物などが混入しており，明らかに何らかの目的で作られた土坑であることこほぼ間違いはない。

以上，3つに大別して調査の事実を述べたが，これらの内容から総合して，はたしてどういう性格の遺構であるか速断することはできかねるが，ここで問題を解決するためのひとつのヒントとなるのは，この遺跡付近の詳細な地図（測図2参照）である。それを参考にすれば標高92m地点に位置する本遺跡は，雄物川の支流である大戸川の細流の氾濫によって生じた数多くの小支流が「く」の字状に湾曲して流れる部分に位置していることがわかる。

従って，これらの環境内容から推測ではあるが，第5章で後述されるが次の3点が考えられるのである。

㈠　河川を利用する必要から，浅い部分にいわゆる「杭上住居」を営なんだ当時の痕跡。

㈡　河川を中心に，その周辺で竪穴住居址を設置する一方，この地域が彼らの祭祀的地域（土偶，土版，玉類，土坑の発見から）として利用したための痕跡。

㈢　㈠㈡のように人間生活の色彩が濃いものではなく，上流から河川の氾濫によって生活圏が崩壊し，流されてきたための痕跡。

の3点が推定される。この中で最も妥当と思えるのは，遺物，特に土器の豊富なこと，祭祀的遺物の多様性，土坑の存在から㈡ではないだろうかという考えが成りたつ。

しかし，これはあくまでも推察から導びきだされたものであるし，流木と判断される樹木群，土層の堆積状態などを今後さらに検討しなければ結論はくだされない。

ただ，ここで確かに言えることは，縄文晩期末の生活圏に著るしく関連の深い低湿地帯を選ばざるをえない生活環境があったため，こうした遺物発見状態となったのではないかということである。関東，関西では弥生時代に突入し，すでに農耕社会という一大変革があった時代である。いずれにせよ，本遺跡の遺構，遺物から判断できることは，低湿地を生活の場とし，そこに生活の一端をセットして活動した遺跡――低湿地遺跡――，それも非常に祭儀的要素をもつ遺跡であるというのが，鎧田遺跡における最大の性格および位置づけであると考える。（鍋倉勝夫）

D　出　土　遺　物

（イ）自　然　遺　物

鎧田遺跡A地点の自然遺物

植物性のものとして木材・樹幹・樹枝・樹葉・果実類・草類・草実類などがあり，動物性のものには昆虫類・骨片，鉱物質のものとしては高師小僧などがあるが，これらは殆どみな第4層下層部の泥炭化植物質堆積層中から出土していて，その他の地層中からは，極く僅か出土したに過ぎない。

第4層下層部の泥炭化植物質堆積層の上面には，馬糞状に圧縮された樹葉（第2図1）が，その下

部には細い樹枝と太い樹幹（第１図14，15）が，すべて横に寝かされた状態で敷き詰められていたが，その太い樹幹の内には枝を払い根を切り放した，径20～30cm程の太い木材が２本程縦割りしたものではないかと思われるような平らな面を上にして横たえられていた（第１図15）。この植物質堆積層の東半部は比高が少し低いので，層中の情況が良く分らなかったが，最初新排水溝を掘り込んだ際その側壁に出現して柱列と誤認された太い樹幹の断面の多くは，この地点の植物質堆積層中に露出していたので，この他にも太い樹幹もしくは木材がまだ何本か埋もれているものと思われる。その他に大木の樹根が自然状態のまま残っているものもある（第１図16）。

以上の樹木の種類はミズナラ・サワグルミ・トチなどの，水辺に自生繁茂する樹種ばかりであった。果実の類はクルミ・トチ・ハシバミ・クリ・ドングリなど（第２図２，３）で，特にクルミが多く，その出土状態で注目を引いた点は，平面を上にして横たえられていた縦割りしたらしい木材の周囲に特に多かったことである（第１図17）。

草実類は殆ど雑草の種子（第３図５，６）で，その大部分は第４層下層部の泥炭化植物質堆積層中から出土している。唯一の草類である禾本科植物の茎と数粒の籾（第３図４）は，第４層上層部の青灰色細砂層上面から同時に出土したものであるが，その出土地点は遺跡の北方のはずれで，第４層中のものである点は確認したが果して遺跡と関係するものであるか否かは不明である。然し青森県亀ケ岡遺跡からも籾の出た噂があるので，蛇足ながら付記しておくことにする。

動物質のものとしては昆虫の硬翅が第４層から数枚（第３図７），蛹が１個（第３図７）出土している。鉱物質の高師小僧（第15図10）は言うまでもなく，水草の茎や根に鉄分が付着凝固して管虫状を呈するもので，装身具の管玉に代用されることもあり得るものである。骨片は哺乳動物の臼歯が１本と管骨の破片が１個出土したが，いずれも排土中から採集したもので，出土地点・層位が共に不明である。

（ロ）人　工　遺　物

鐙田遺跡Ａ地点の遺物の総出土量

Ａ地点各グリット毎の土器片・石器類出土量

東西座標 / 南北座標	B	C	D	E	F	G	H	計
1								
2			304 (12)	324 (6)				628 (18)
3		1 (—)	559 (19)	409 (21)				969 (40)
4		339 (10)	2,806 (195)	2,404 (128)	424 (8)	164 (5)		6,137 (346)
5		756 (85)	3,337 (188)	4,355 (263)	1,728 (56)			10,176 (592)
6			2,542 (80)	746 (53)	2,589 (88)	502 (22)		6,379 (243)
7					3,954 (335)	2,629 (336)	21 (—)	6,604 (671)
8			95 (18)		2,457 (107)	5,342 (305)	229 (27)	8,123 (457)
9					28 (—)	1,057 (49)		1,085 (49)
合　計		1,096 (95)	9,643 (512)	8,238 (471)	11,180 (594)	9,694 (717)	250 (27)	40,101 (2,416)

（　）内は石器類。

復原完型土器数

深鉢形土器	鉢形土器	壺形土器	浅鉢形土器	台付浅鉢	盤形土器	四脚付土器	手捏小形土器	合計
23	5	12	10	13	29	3	9	105

鐙田遺跡A地点土器の器形と文様

〔第1群土器〕本群はA地点土器中で，古い方の時期に属する土器群である。

（第1類土器）本類は沈線の平行工字文系文様（平行工字文と平行x状文）を主文とする土器である。

第1種土器――2本の平行沈線を縦位の短沈線で切った基本的な平行工字文（第4図1，2）であるが，この種の文様をもつ土器片は本遺跡では非常に少なかった。3本以上の複線の平行沈線を縦位短沈線で切ったものが普通で，その内最も多いのが3本の平行沈線を1本の縦位沈線で切った王字文の土器（第4図4，5，6，7）である。4本以上の複線沈線の平行工字文もかなりある（第4図8，9）。そして平行沈線が何本の場合でも，縦位短沈線は刺突文（第4図1，2，3，4）や三角形沈文（第4図6，7）によって代位される場合が多く，中には縦位沈線の幅が極端に広く，その為一見2本の隆起線文を縦位に付したかの如く見えるもの（第4図5）も少なくない。またこれらの平行工字文の文様構成は1段のみのものと，同じ平行工字文または他種の平行工字文（平行x状文）を併用して，上下2～3段構成とするもの（第4図10，11，12）とがある。2～3段構成のものにはまた，一部沈線を溝底に刻目を付したもの（第4図11），縦位沈線を2～3本の複数にしたもの（第4図11）なども見られる。

第2種土器――沈線の平行x状文（2本の平行沈線を途中で接触させ，その接触部をx状にしたもの）を主文とするものであるが，これには平行沈線が2本だけの基本的な平行x状文（第4図13，14）と，3本以上の複線の平行沈線を用いるx状のもの（第4図15，16，17，18，19）とがあり，その内で最も多いのは3本の平行沈線を用いるもの（第4図15，16）である。文様構成にも一段のみのものと，同じ文様もしくは他種の平行工字文系文様（平行工字文）を併用して上下に2～3段結合するもの（第4図17，18，19）などがある。

（第2類土器）本類は平行工字文系文様の隆線化されたものである。隆線化とは沈線を太く深く彫り込み，その沈線に挟まれた素面をさながら隆起線の如く浮彫にするものである。

第1種土器――2本の平行沈線の基本的な工字文は，これを浮彫にしても隆起線的平行工字文とはならない。従って隆起線化され得る平行工字文は，平行沈線が3本以上のものでなければならなず，普通最も多いのは平行沈線が3本の王字文（第4図20，21）で，勿論4本以上のものも隆線化されたもの（第5図3）がある。これら隆線化された平行工字文にも，縦位短沈線の代りに刺突文を用いるもの（第4図21，22），縦位沈線の幅が極端に広く，そのため一見縦位の隆起線を2本加えたかの如く見えるもの（第4図2，23）などがあること，そしてまた文様構成が1段のみのものと2～3段構成のもの（第4図22，23，第5図1，2，3）などがあることは，沈線の平行工字文の場合と同じである。

第2種土器――平行x字文もまた隆線化されるが，平行沈線が2本のx状文だけは隆線化が不可能

である。平行沈線が3本の平行x状文で隆線化されたものは最も多く（第5図4，5，6，8，9），4本以上の平行沈線のもの（第5図7，10）は非常に優美である。文様構成には1段構成のものと，2～3段構成（第5図4，5，6，7，8，9，10）のものがあること勿論である。

（第3類土器）本類は平行工字文以外の文様をもつ土器である。

第1種土器――真正の隆起線をもつ土器（第6図4，5）であるが，これを主文とする土器は非常に稀で，胴部に平行工字文系文様をもつ細頸壺形土器の口唇部装飾文としてのみ用いられるもの（第6図6，7，8，9）が普通のようである。

第2種土器――羽状の沈線文を持つ土器（第6図1，2，3）であるが，この文様のみをもつ土器があるか否かは不明で，平行工字文と併用（第6図1，2）するのが普通である。

第3種土器――平行沈線を1本ないし数本口縁部にめぐらせる土器（第5図13，14，15，16，17）であるが，この種土器の口縁部地文は無文で研磨されたものが多く，口唇上面には刻目が付され，頸部以下は斜行縄文とする深鉢形土器が多い。

第4種土器――口唇線上に高く突出する親指状の突起を1個だけ付した深鉢形土器（第13図2）で，口縁部は無文外反，胴部は斜行縄文のみの粗製土器である。

第5種土器――胴部は斜行縄文のみの粗製深鉢形土器で，口縁部は平縁だが，口唇上面に連続的に指頭圧痕を押印して，小波状縁としたもの（第5図11），口唇上面の外角上に刻目を付したもの（第5図12）などがある。

第6種土器――口唇上には太目の刻目が付され，無文の口縁部は外反，頸部以下胴部全面に櫛目状の細条痕文を斜行させた粗製深鉢形土器（第5図18）である。

復原完型土器の文様分類

第10図20	第1群第1類土器	第12図2，8	第2群第3類土器
第11図1，2，4，5，9	〃	第12図1，11	第2群第4類土器
第10図18，19	第1群第2類土器	第10図21，22，23，24	第2群第5類土器
第10図17	第1群第3類土器	第11図7	〃
第12図1，2，3，5	〃	第12図12，13，14	〃
第11図8	第2群第2類土器	第13図4，6	〃
第12図1，3，4，5，6，7，8，9，10，12	第2群第2類土器		

以上第1群土器の器形は，総体的に言って非常に変化に富んでいるのみならず，その各々の器形は皆，非常に洗練された均整美を現わしている点で特色がある。例えば最も一般的な器形である深鉢でも，口縁部がくの字形に外反し肩が張って，下胴部が適度に細く引締る非常にスマートな形になっている。鉢形土器・皿形土器・浅鉢などもすべて口唇部がつぼみ加減で肩が張り，やや小さ目の底部まで器壁は快く内曲して実に軽妙である。細頸壺形土器は胴部が大きな球形で，頸部は直立して上端がやや肥厚外反し，ここに結び目ある2本平行の隆起線をめぐらせて口唇部装飾文としている。この種大形壺の肩部には精巧を極めた複線平行沈線の工字文が描かれていて，得がたい逸品が多い。台付土器では台付浅鉢が多く，浅鉢部は普通の浅鉢と同じだが，台部は大きな浅鉢に比してかなり小さく，

かつ上部が強く締り裾の開いた三角形を呈していて，その台部器面には全面に平行工字文系文様が密施されている（第６図14，15，16)。また急須形の注口土器かと思われるが，注口部のみの破片が２個出土している（第６図10，11）し，尖底土器を思わせるような極端に細い台付の土器（第６図７),下底部に４個の乳頭状小突起を付したもの（第11図９）など，特殊器形の土器が多い。

文様についていうと，第１類および第２類土器の文様は工字文系文様の基本形であるところの平行工字文で，第１群土器が所属する時代の代表的文様である。従ってこの種文様は特定の器形の土器にのみ付される文様ではなく，すべての器形に用いられる一般的文様でその施文位置はいずれも肩部以上に集中しているところに特色がある。

以上の器形や文様の性格から見て第１群土器が，宮城県の大洞Ａ式土器に比定さるべきものであることは自明である。

第３類土器（工字文系以外の文様をもつ土器）中の第１種土器（隆起線をもつもの）および第２種土器（沈線の羽状文をもつもの）は，大洞C_2式土器に用いられた文様の遺風を残す土器であるが，この種土器はみな平行工字文系文様を，同一個体中に併有する土器であるから大洞Ａ式土器であることは疑えない。然し羽状沈線文・隆起線文は大洞Ａ式以後には余り見られない文様である。

第３種土器（口縁部に平行沈線のみを持つもの）と第４種土器（口唇上に１個だけ親指状突起を付するもの）および第５種土器（口唇上に指頭圧痕を加えて小波状口縁とするもの）と第６種土器（細条痕文のみの土器）などもみな，大洞C_2式土器の意匠文様を継承するものであるが，これらの文様は大洞Ａ式以後の土器中にも引き続き残存する文様である。

〔第２群土器〕本群はＡ地点土器中で，新らしい時期に属する土器群である。

（第１類土器）本類は文様要素は第１群土器と同様の平行工字文系文様であるが，文様構成の上で，次期土器の性格に近ずく過渡期的器形である。

第１種土器――１段構成の平行ｘ状文を口縁部にめぐらせる盤形土器だが，底部が第１群の盤形土器よりも大きく，その底部から器壁が上方に向って直線的に開く逆梯形の土器（第６図２）である。

第２種土器――器形は第１種土器と同様逆梯形の盤形土器で，主文が太沈線の平行ｘ状文もしくは平行工字文を上下２段構成とした土器（第７図１，３）である。主たる文様帯とその文様帯の下縁を画する平行沈線との間に，幅の広い無文帯を設け，施文部分を中胴部以下にまで拡大した点に特色がある。

（第２類土器）本類は三角工字文系文様（平行工字文の平行沈線が，結節部を中心として左右両側へ放射状に広がり，三角形空間部を作出する工字文で，三角工字文と三角ｘ状文の２種類がある）を主文とする土器である。

第１種土器――２本の横線による基本的な三角工字文は，どういうものか全く発見できなかったが，３本の複線沈線で描く三角工字文（三角王字文）は最も多く（第７図４，５，６),４本以上の横線を用いる三角工字文（第７図７，８）も相当ある。文様構成も普通の１段構成のものと，同種または異種の工字文系文様を連結して，上下２～３段構成にしたもの（第７図５，６，７，８）などもある。

第２種土器――普通三角王字文が，上下に何段か連結する場合には，上段の王字文（下向き）から斜めに下降する沈線は，下段の平行沈線と結びついて，そこに転倒した三角工字文（上向き）を形成

することになるが，本種文様においては，上段の三角工字文から斜めに下降する沈線がまだ下段の平行沈線に達しない間に，その斜線の中間で，新しく同方向（下向き）の三角工字文を描出するもの（第7図9，10）である。この文様は結果的には三角工字文が網状に絡み合って，非常に柔らかくかつ錯雑した曲線的工字文を描き出すことになる。

第3種土器――三角x状文は平行x状文の平行横線が，接触部を中心として左右両側へ放射状に広がるものであるが，この種文様においても横線が2本の基本的な三角x状文（第8図1，2）は非常に少く，一番多いのは矢張り3本の複線沈線を用いるもの（第8図3，4，6，7）で，4本以上の複線沈線を用いる複雑なもの（第8図5，8）も多い。文様構成も普通の1段構成のもの以外に，同種または異種の工字文系文様を上下連結して2～3段構成とするもの（第8図2，4，6，7，8）もある。

（第3類土器）本類は浮彫的手法を用いて素面部を隆線化した三角工字文系文様（三角工字文と三角x状文）を主文とする土器である。

第1種土器――三角工字文系文様もまた隆線化されるが，普通の隆線化された三角工字文の他沈線が特に太く，かつ縦位沈線の両側に2個1組の大きな瘤状突起を付した，非常に豪壮な三角工字文のもの（第7図14，15，16，17）が目立っている。この種土器の口縁部には鋭く盛り上った山形突起があり，その頂上が深く二分している。4本以上の三角工字文で隆線化されたものもかなり多い（第7図11，12，13）。

第2種土器――三角x状もまた隆線化されること勿論である。隆線化の可能なものは最低横線が3本のもので，4本以上の三角x状文（第8図9，10，11）は工字文系文様の中では最も優雅なものとなるようである。

（第4類土器）本類は口縁の山形突起部に，特殊な意匠や文様を付したものである。

第1種土器――口縁山形突起の辺縁に沿って1本の沈線がめぐり，これと山形突起の基底部を横走する沈線（口縁部文様帯の上縁線）との間に，三角形文を作出する土器で，これが表裏両面に描かれるもの（第8図12，13，14，15），表面にはこれが見られるが，裏面無文のもの（第8図16），反対に表面が無文で裏面にのみこれを持つもの（第8図18，19）など様々であるが，中に1例だけ表面が無文で裏面に2本平行の三角形沈線文をもつもの（第8図19）が発見された。

この種の三角形沈線文を伴う土器の文様構成は，普通2～3段構成で上段または下段に三角工字の見えるものがあるので，恐らく三角工字文系統の文様が主文となる土器であろうと思われる。同種土器の内には三角形沈線文の内部を，微細な爪形文で充填しているもの（第8図15），表面にのみ三角形沈線文が見られるが，工字文系文様が全く見えず，頸部以下が斜行縄文のみになっているもの（第8図17）などの変化形もある。

第2種土器――山形突起の頂上部が深く二分して開き，その各々の頂上部が更にまた小さく二分している，いわば複式の突起をもつもので，この種の意匠をもつ波状口縁土器にも，表裏両面に三角形沈線文をもつもの（第9図1，2），何れの面にも全然これを持たない無文のもの（第9図3）などがある。

第3種土器――波状を描く小山形突起の1個だけが特に大きく発達して，頂上部が台状を呈する土

器（第９図４，５，６，７，８，９）である。この種の台形突起をもつものの内には，その頂上部辺縁に沈線を１～２本めぐらせるもの(第９図７，８)，および全然これのないもの（第９図４，５，６，９）とがある。この台形大突起の表面には普通三角形沈線文がなく，裏面にのみこれが見られるが，台形大突起以外のすべての小山形突起には，表裏両面に三角形沈線文が付されているのが普通のようである。またその他に台形突起の変化形と思われるもの（第９図10，11）もある。

（第５類土器）本類は工字文系以外の文様をもつ土器である。

第１種土器――点文もしくは刺突文をもつ土器である。点文ある土器としてはその１，口縁部に沈線の三角ｘ状文と平行ｘ状文を併用し，胴部以下を細かい点文の充填文とした土器（第９図15）がある。器形は恐らく浅鉢か鉢形土器であろうと考えている。その２は，口縁部欠落して器形は不明だが，中胴部と下胴部に二組の平行ｘ状文らしき沈線が横走し，その上部と中間部に２本の点文の帯状充填文がめぐる土器（第９図13）である。

その３は，単線もしくは複線の三角ｘ状文の内部もしくは外部の三角形空間を，点文で充填した土器（第９図12，14，16）である。刺突文をもつ土器では，口縁部最上端に帯状縄文が１本，その下に太い平行沈線が３本程めぐり，その中間の無文部に各々一列の刺突列点文をめぐらせた土器（第９図17）がある。器形は全く不明。

第２種土器――工字文を全く伴わず，沈線の大形鋸歯文を口縁部もしくは胸部にめぐらせる土器で，その内の一個は極小手捏ねの壺形土器で，その胴部に沈線の大形鋸歯状文だけがめぐらされている(第10図21)。その２は，普通の大きさの土器の胴部破片で，上下を挟む沈線の間に鋸歯状文を横走させるもの（第10図16）と，口縁部破片で，口唇下に一本の浅い沈線をめぐらせ，その下に，波頂部の内側に大きな刺突文を付した，平行沈線の波状文をめぐらせるもの（第10図15）である。後者は縦線の位置に大きな刺突文を付した，三角工字文の変形であって，鋸歯状文なるものもようするに三角工字文を端的に簡素化したものに過ぎないことを説明する，絶好の資料である。

第３種土器――無文土器もしくはそれに類する土器で，高さ５cmに満たない無文手捏ねの極小土器（第10図22，23）は意外に多く，前記第２種の鋸歯状文をもつ極小土器（第10図21）や，口唇部に１～２本の平行沈線をめぐらせる小土器（第10図24）などはこれに類するものである。器形には深鉢形・鉢形・壺形・台付浅鉢・盤形・皿形などの各種が見られ，後代の祭祀用模造品よりは多少大きく，中には内面器壁に乾燥した内容物が薄皮状に貼り付いているものもあるので，何か極く小量で事足りる液体を入れた実用品ではないかと思われる。

第４種土器――本種は帯状縄文を特色とする土器である。その１は，口縁部無文で口唇部は低い波状を呈し，波頂部には極く浅い刻目が付されている。頸部以下は横走縄文の地文で，その上に太沈線の三角工字文が描かれている（第10図５）。器形は頸部縮約し，上胴部の内曲度が強いので，広口の壺形土器らしいが，ほぼ同形土器で頸部の平行沈線の下の縄文地文上に，工字文系文様の沈線らしいものが見える土器（第10図４）もある。その２は，口唇下に平行沈線で画された幅の広い縄文帯が一本めぐっているが，その縄文帯の上下縁を画する沈線そのものが，上下結合して平行工字文もしくは平行ｘ状文を描いているらしい，変った文様の土器（第10図１）である。胴部は研磨された無文で，浅鉢もしくは台付浅鉢ではないかと考えている。その３は，口唇上に浅い刻目が付され，口縁部には平

行沈線と三角工字文が見え，その下に幅の広い縄文帯をめぐらせる土器（第10図２）である。器形は不明だが浅鉢の感が強い。その４は，口唇下に幅広い縄文帯を１本めぐらせ，その下部に太沈線の平行王字文を描き，その中央の横走沈線の溝底に細かい刺突文を加えたもの（第10図３）である。

第５種土器――第１群第３類第４種の口唇上に親指状大突起を１個だけ付した，粗製深鉢形土器と非常によく似た土器であるが，本種土器はその垂直に立ち上る親指状突起の根元に，もう一つの親指状突起を水平に付している（第10図７，８）。複式の親指状突起をもつ土器と言えるかも知れない。

以上第２群土器の器形の特色を挙げると，深鉢形土器では胴部が幾らか短くなり，底部が反対に大きくなって，丁度下胴部の切り取られた土器，と言った感じになる。鉢形土器・盆形土器・浅鉢・皿などはみな，大き目の平底の上に直線的な器壁が上方に開き，平たい逆椀形の土器となる。台付土器の台部は太目の筒形に近いものとなり，台部器面の全体を掩う文様は当然三角工字文系文様となるが，この種の台部は比較的少なく，大部分は１～３本の平行沈線を最下端部にめぐらせるだけの，強く簡素化されたものとなるようである。この他この時期に新しく出現する器形として，４脚の高脚付浅鉢・長頸壺に近い狭長な土器・極小の手捏ね土器などがある。

以上要するに第２群土器の器形の特色は，土器の最大幅に対する高さの比率が前代のそれより遙かに小さくなり，安定的器形になることは確かだが，見た目には著しくずんぐりして，むしろ不格好になるのが一般的傾向のようである。

文様について言うと，第２類および第３類土器の三角工字文系文様は，本群精製土器の主文となるものであるが，これは宮城県の大洞Ａ式土器，青森県の砂沢式土器などの特色的文様であるから，通説に従えば鐙田Ａ地点第２群土器の型式編年は一応それらに相当すべきものと言えるであろう。前記器形の諸特徴も大体それに一致するものである。

ところが厳密にいうと第４類第１～２種の，口縁山形突起部の三角形沈線文および二分された山形突起の頂上部が更にまた二分される意匠はともに，青森県の砂沢式および五所式土器には見られるものであるが，宮城県の大洞Ａ式土器中には全く発見できないものである。また同類第３種土器の如く，波状をなす小山形突起の一つが特別に大きく発達して台形を呈するものは，青森県にもその他の東北地方太平洋岸諸県にも全く見ることのできない器形であるから，鐙田にのみ独特な器形であると言えるかも知れない。

第５類の工字文系以外の文様をもつ土器中の第１種土器（点文の充塡文をもつ土器），および第４種土器（帯状縄文をもつ土器）は，同一個体内に三角工字文形文様を伴っているので，第２群土器の仲間であることは疑いの余地がない。同類第２種土器の大形刺突文を伴う平行沈線の鋸歯状文と，手捏ね極小土器その他に現われた，単線沈線の鋸歯状文などは，三角工字文系文様の極端に簡略化されたものであることは既に述べたが，そうした文様を伴う極小土器の類であるから，三角工字文文化即ち大洞Ａ式土器文化に所属する特殊土器であることは，明らかである。

鐙田遺跡Ｂ地点の遺物の総出土量

Ｂ地点遺物の大部分は排水溝掘削時に，ブルドーザーが掘り上げた排土中から採集したもので，出土グリット・層位などが一切不明であるから，残念ながら只単に総数だけを挙げるに止めたい。出土土器片総数 3,421片．内完型土器は壺形土器１個，香炉形土器１個。

鐙田遺跡B地点土器の器形と文様

B地点土器もA地点土器と同様に，縄文晩期末の工字系土器である点変りがないので，A地点のそれに準じて文様分類を行なうこととする。

〔第1群土器〕A地点土器中の古い時期に属する土器と同じ土器の一群である。

（第1類土器）平行工字文系文様を主文とする土器。

第1種土器の，2本の平行沈線を縦位短沈線で切る基本的な工字文土器片は，1片も出土しなかった。3本の平行沈線を縦位短沈線で切った平行工字文のもの（第19図2），縦位沈線が刺突文によって代位されるもの（第19図3，4，5），縦線の幅が極端に広く，その為に一見短い隆起線を2本縦位に付したかの如く見えるもの（第19図1）などがあり，3本以上の平行沈線を用いたもの（第19図13，14）もかなり多い。文様構成も1段のみのものは勿論，2～3段構成のもの（第19図6，7，8，9，10，11，13，14）も多い。その他台付土器の台部器面の全体に平行工字系文様を密施したもの（第20図21，22，23），細頸壺の口唇部に結節ある2本平行の隆起線をめぐらせたもの（第20図15，16，17）なども見られた。

第2種土器の平行x状文を主文とする土器では，平行横線が2本の基本的なものは全然見当らない。3本以上の複線のもの（第19図15）があり，文様構成も2～3段構成のもの（第19図17，18，19）が多く，2～3段構成のものでは平行工字文と平行x状とを併用するのが普通（第19図17，18，19）のようである。

（第2類土器）隆線化された平行工字文系文様の土器。

第1種土器の，縦位短沈線が刺突文となるもの（第19図8，9，10），縦位沈線の幅が特に広く，為に隆起線を2本縦位に付したかの如く見えるもの（第19図6，9）などがあり，平行沈線が3本のもの（第19図11，12）と4本以上のもの（第19図14）がある。文様構成も2～3段のもの（第19図11，19）があり，平行工字文と平行x状文を併用したものが多い。

第2種の隆線化された平行x状文の土器では，3本の平行沈線のx状文を隆線化したもの（第19図18，19，21）と4本以上の平行沈線のx状文を隆線化したもの（第19図16，17，20）とがあり，平行工字文を併用する2～3段構成のもの（第19図19）もある。

（第3類土器）工字文以外の文様をもつ土器。

第1種の，真正の隆起線をもつ土器は非常に多く，細頸壺の口唇部に結節ある平行の隆起線をめぐらせるもの（第20図16，17），これを鉢形もしくは浅鉢の口唇部に付したもの（第20図15），みみず脹れ状の隆起線の大柄な区画文を，上胴部にめぐらせる壺形土器（第20図20），透し文ある香炉形土器の胴部全体を，刻目を付した隆起線の網状文で掩ったもの（第20図19），急須形注口土器の器面全体を，入組文風な隆起線文で掩い，底部に4個の乳頭状小突起を付した軽微な4足土器（第20図18）などがあり，実に多種多様である。

第3種の，口頸部に沈線だけをめぐらせる土器は，沈線を1本だけめぐらせるものから，数本をめぐらせるもの（第19図24，25，26，27，28，29，30）までが，全部ある。

第5種の，胴部が斜行縄文のみの粗製深鉢形土器で，口唇部に指頭圧痕を加え小波状縁としたもの（第19図23）も出土している。

以上の他B地点からは，A地点では殆ど見かけなかった下記の如き土器片が出土している。

1．非常に太い弧状沈線で画した磨消縄文土器片（第20図1，2）と，口縁部にみみず脹れ状の隆起線をもつ破片（第20図3）などで，これらはいずれも工字文系土器よりは遙かに厚手の土器である。

2．斜行縄文地文上に平行沈線で，胴部一面に縦位文様を描く破片（第20図4），および中位の曲線沈線で画した磨消縄文をもつ土器片（第20図8，9，10，11，12，13，14），口唇部に連続爪形文や刺突文をもつ土器片（第20図5，6，7）などであるが，これら土器片の胎土には多量の細砂が含まれ，焼成も軟弱で，工字文土器のそれとは著しく趣がちがっていた。

以上がB地点から出土した土器の，器形と文様のすべてであるが，工字文系文様の土器はA地点の第1群に属するものばかりで，第2群に属する土器片は全く1片も出土しなかった。言うまでもなくこのことは，B地点が平行工字文系文様の土器即ち大洞A式土器のみを出土する単純遺跡であることを物語るものである。そして恐らくそのせいであろう，前代（大洞C_2式）の遺風をのこす文様，即ち口唇部や肩部は勿論のこと，胴部にまで真正の隆起線文をもつ土器の種類と数量が，著しく多い点にA地点とは異る特色が伺えるのである。

工字文系以外の文様をもつ土器片の，1，は大木10式，2，は堀之内1式および2式土器で，周辺遺跡（塞の神遺跡）の土器片が混入したものと思われる。

鐙田遺跡A地点の土製品

土偶――完型品に近い大形土偶が1個，頭と胴だけのものが2個（内1個が大形），頭部のみの小形土偶が3個，胸部と足部のみの小形品が2個，胴部のみのものが2個（内1個が大形），手足のみの破片が10個程出土している。

大形完型品（第14図1）は高さ21.8cm，肩幅18.5cmの中空土偶で，頭部は頭髪を中央から二分し，その両端を両耳の上で束ねた髪型である。顔面は少々顎を突き出し，目と口は刻目で円形に描かれているが，写実性の強い柔和な風ぼうである。肩部は幅広く横に張り，腰部が反対に細いので，逆三角形に見える。手は両肩の先端部に小さく垂れ下がっている。胴部文様は，両手の付け根から乳房まで，上面に溝のある隆起線文を弧状に貼り付けているが，その隆起線は肩の部分の上下だけが，平行沈線で縁取られている。首から臍の上まで1本の沈線が垂れ下がり，その両側には3組の平行沈線が肋骨状に付されている。然しこの平行沈線はすべて中間でx状を呈しているので，平行x状文と見るべきであろう。腰部には沈線に画された点文の充塡文が一見パンツ状に描かれているが，子細に見るとこの沈線は点文の充塡文を伴なう三角x状文で，単なるパンツ文様の辺縁部を画する沈線ではないようである。点文は施文具の刺突方向が小部分毎に異なっていて，パンツ状文様帯の内部は前面で6帯，背面で8帯に分割されているようである。両脚は逆U字形を呈してむしろ短かく，板状を呈する足先には刻目で五指が描かれている。背面は両耳の上で撞木状に束ねた頭髪と，後頭部の間に幅約6cm，高さ約1cm，横位の透し文があり，その中には赤色の塗料が埋められていることが発掘の際認められたが，洗浄作業中消失してしまった。肩部の背面には断続する平行沈線が横走し，背中の直中を1本の沈線が垂れ下がっている。上胴部の背面には3本の平行沈線の大きな菱形文が描かれている。パンツ状腰被いの背面にも，点文の充塡文があることは言うまでもない。

頭部と胸部のみをもつ大形土偶（第14図2）は，肩幅20.5cm，現高16cmで，前記完型土偶と同類の

もののように思われるので，異っている点のみを挙げることにする。口辺に沈線で画した点文の充塡文があるが，文身の習俗を示すものであろう。逆三角形の胸部には乳房があったらしい円形の剝離痕が認められる。乳房の両外側部には沈線に上下を挟まれた横位の平行x状文があり，その下には2段構成の平行x状文が，肋骨状に描かれている。肩部背面には円形竹管文の並列文に上下を挟まれた1本の沈線が横走し，胸部背面には首から垂れ下がる渦巻文を中心にして，平行沈線による大きな菱形文が描かれている。頭部と胸部のみの小土偶（第14図4）は，肩幅10cm，現高 7.5cmで，眉毛・目・口が刻目ある楕円形の隆起線で描かれている。頭髪は真中から二分し両耳の上で束ねているが，その束ねた髪の突端部には点文の充塡文が付されている。この土偶の肩部も幅が広いが，撫肩である点多少趣が異なっている。胸部には前方に突き出した細長い乳房が付せられ，胸部文様は乳房の両外側に3本の平行沈線が横位に描かれているだけである。背面は後頭部と結髪との間に横位の透し文があり，肩部の背面文様は2本平行して横走する円形竹管文の連続文である。上胴部背面には横位の楕円形文らしいものが見えるが詳細は不明である。

頭部のみの土偶3個の内1個（第14図3）は頭幅8cm，頭高5cmで，この土偶にも両耳の上の束ね髪の突端部に点文の充塡文が見られる。眉毛・目・口は刻目のない環状隆起線で描かれ，後頭部には浅い横位の溝が見えている。他の1個（第14図6）は，頭幅が 4.6cm，頭高が 5.6cmで，眉毛・目・口などの環状隆起線には刻目が付されている。頭髪は前記各種土偶とは著しく趣を異にし，中央で二分した頭髪の形が両耳の上と後頭部で円形竹管文によって表現されているので，現在の熱帯地方原住民に見られるようなカールした髪型ではないかと思われる。頭髪を描く沈線や竹管文にはすべて朱色の塗料が埋め込まれている。最後の1個（第14図5）は，頭幅 4.5cm，頭高 4.2cmで，焼成は硬いが胎土は非常に粗く，可成り粗雑なつくりである。頭髪は矢張り中央で分け，両耳の上で束ねているらしいが，前記各種土偶のように束髪部が高まっていないで，押しつけたように低い。そして額の中央部から後頭部にかけて1個の貫通する小孔が穿たれ，その孔中には赤色塗料が埋められている。

胴部と脚部のみの土偶2個のうち1個（第14図7）は胴部の両脇を指頭で強く摘まみ，全体の形をX形にした象徴的土偶の破片で，完型にして幅4cm，高さ約5cm程度の極小土偶である。破片には前後に扁平な胴部と，開いた両脚だけしか残っていないが，両脚の先端部には瘤状の小突起が付せられて，足であることが示されている。

土版――完型品が2個，半分程度の破片が1個，$\frac{1}{3}$未満の破片は10個近くも出土している。

完型品の内の1個（第15図2）は，長径8cm，短径 6.1cmの楕円形土版で，文様は中央の1本の縦位沈線の両側に，角張った複線の平行x状文を3段程密施したものである。縦位沈線の上部両側には小貫通孔が2個穿たれて，眼球状を呈している。人面付土版の一種であろう。

完型品の他の1個（第15図3）は，直径 3.5cmの円形の小土版で，文様は中央に1本の縦位沈線が走り，その両側に2本の平行沈線による矩形文が1個ずつ描かれている。この土版は側面上部に縦位に小貫通孔が1個穿たれているもので，ペンダント式土版とでも呼ぶべきものであろう。

半分程度の破片1個（第15図1）は，長径12cm，短径推定9cmの大形土版で，文様は短軸に沿った二本の沈線の両側に，複線沈線で角形の平行x状文を描くものである点，前記完型土版とほぼ同じモチーフのようであるが，本土版の場合は中心線が短軸に沿っているので，横形の土版ということにな

る。そして眼球状の貫通孔もないので，普通の土版であろうと思われる。その他の土版破片はすべてこの種のもので，その中の１個の側面には，一列の刺突列点文をめぐらしたものがある。

滑車形耳飾――出土総数は約10個で，内８個が完型品，その内のまた７個が耳栓状耳飾で，１個が臼形耳飾である。

耳栓状のもの７個（第15図６）は全部貫通孔があり，大きさは傘幅が10～20mm，高さが10～15mmで大小の差がある。臼形の１個（第15図７）は，傘幅15mm，高さ10mmである。両種共に全面に赤色塗料を塗っていたようである。

その他の装身具――土製の小玉が30数個（第15図９）出土しているが，その内約30個は完型品である。大きさは直径５～８mmで，大小の差がある。形は大体瓢形で，頭部に糸を通す孔があり，すべて赤色塗料で染め上げてある。

鐙田遺跡Ａ地点の木製品

櫛――朱漆塗り木製櫛が２個出土。内１個（第15図11下）は頭部の横幅が 7.5cm，縦幅が 2.5cm，厚さ 1.0cm。頂上部に３個の山形突起が付けられた飾り櫛である。歯部は全部欠落して，その長さなどは不明だが，脱落痕から見ると，非常に細かい歯が多数うめ込まれていたようで，歯部の材質だけは恐らく竹であったものと思われる。他の１個（第15図11上）は頭部が上反りの板状で横幅 7.2cm，縦幅 2.5cm，厚さ 0.7cm。頂上部には３個の小突起があり，その各々の小突起の間にも低い突起が１個ずつ付されているので，合計５個の波頂をもつ上反りの，かなり華麗な飾櫛ということになる。歯部は欠落しているが，恐らく前記のものと同様であろう。

鐙田遺跡Ｂ地点の土製品

Ｂ地点からは土製品は土版が１個出土（第21図１）。形は楕円形で長径 9.7cm，短径 7.2cm。文様は中心部に縦に１本の沈線が通り，その両側に複線沈線の平行ｘ状文が，３段構成に描かれたものである。但しこのｘ状文はＡ地点のそれのように角形を呈するものではなく，文字通りのｘ状文で，その内部は数本の平行沈線で埋められている。中央線の上部両側に眼球状貫通小孔が２個あり，かつ下腹部には貫通しない小孔が１個ある。下腹部のそれは臍を意味するものではあるまいか。

以上が鐙田遺跡土製品の全部であるが，この時期の土製品の型式細分は，まだ充分明確になっていないので，出土層位を確認しない限り大洞Ａ式のそれとＡ式のそれとを区別することは困難である。然し耳栓や小玉など以外の，意匠文様を有する土製品では土器文様との比較考察によって，或る程度の推察が可能かと思われる。

大洞C_2式およびＡ式の土偶では，牛角状の髪型・刻目ある降起線の胸飾・最大幅をもつ腰部・腰部の磨消縄文，などが特色だが，鐙田Ａ地点土偶にはこれらが殆ど見られないで，撞木状もしくは耳かくし状の髪型・最大幅をもつ逆三角形の胸部・申し訳程度の小さい手・腰部の点文の充填文・胸部の肋骨状平行工字文と背中の菱形文（三角工字文の変形），などの新らしい特色が生れる。これらの新しい特色の内，逆三角の胸部の形，腰部の点文の充填文，背中の菱形文などは明らかに大洞Ａ式の特徴である。また大洞Ａ式や砂沢式の台付土器の台部には，密施した三角工字文の内部を透し文にしたものが報告されているが，これは三角工字文の縦位沈線に代位する刺突文が，強化されて貫通孔となり拡大されたもので，鐙田Ａ地点土偶頭部の結髪と後頭部との間の透し文や，前額部から後頭部へ

抜ける貫通孔などは，みな相共通する透し文的モチーフと見ることができるであろう。かくの如く見てくるとA地点土偶の殆ど全部は，大洞A式土器に伴出する土偶で，A式土器に伴なう土偶は1個もないことになるが，大洞A式の単純遺跡と見ることのできるB地点から，大洞A式に属する土偶が一片も出土していないということは，このことを裏付けるものではなかろうか。然しそれにも関らず尚若干の問題点は残るようで，胴部全体に点文の充填文を施文した砂沢式土偶の一種類が，鐙田から全然出土しないのは何故であろうか。地方差として簡単に片付けられないことで，尚再考を要する問題点であるかも知れない。

土版についていうと，角形の平行x状文を施文した完型土版および10片近い破片は全部A地点から出土したもので，B地点からはこの種の文様のものは一片の破片も出土していない。従ってこの種の文様をもつ土版は前記土偶の場合と同様，B地点にはない時期即ち大洞A期の土版と見るべきではなかろうか。

鐙田遺跡A地点の石器

石鏃――50数個出土。その内で無柄石鏃かと思われるものが数個（第16図40，41，42，43，44,45）あるが，それらは皆石鏃か否かが疑わしい程粗雑なものばかりである。従って明確な石鏃は悉く有柄であると言った方が妥当である。

長さ3～5cmの棒状石鏃が約15個(第16図1～12)，その内の3個（第16図1，2，3）は中央部の片側または基部の一側に，瘤状小突起が付せられている。結縛の為の突起であろう。長さ2.5cmで幅の狭い長三角形を呈し，柄部の比較的長い石鏃が15個程(第16図13～25)。長さ2～4cmで肩にやや脹らみがあり，闊葉形を呈する石鏃が10個（第16図26～34）程。長さ2～4.0cmで，菱形に近い柳葉形石鏃が7個程（第16図35～39）である。

尖頭器――長さ5～10cmで，大形の無柄石鏃もしくは小形の打製石斧状を呈するものが10数個（第16図46～51）出土している。その内の3個（第16図46，47，48）は先端が鋭く尖り，基部が丸く，精細な剥離が加えられていて，一見完全な尖頭器である。その他のもの（第16図49，50，51）は，いかにも粗雑な剥離である上，基部が刃物状に薄くなっているので，むしろこの基部の方が刃部として使用されたのではないかと思われるような石器である。

石錐――7個出土。長さ4cm～6cmの小形品ばかりで，摘み部の形は縦横がほぼ同長で，小円形を呈するものが3個(第17図7，8，9)，摘み部が比較的大きな縦位の楕円形を呈するものが4個（第17図5，6）である。いずれも錐部が余り長くないのが特色である。

石匙――6個出土。内4個は長さが5cm前後だが，縦横の長さが殆ど変らない不整円形（第16図53～60）で，三角形に近いものが1個（第16図61）と三日月形の縦形石匙が1個（第16図52）ある。摘みは一般に大きく，格好の良くないものが多い。

石箆――9個出土。長さは5～9cmで，すべて片面加工，刃部はみな直線である（第16図62，63，65）内3個（第16図64，65，67）は打製石斧ではないかと思われる程剥離が粗雑である。

磨製石斧――7個出土。長さは4～15cmで大小がある。その内1個は長さ4cmの極端な小形磨製石斧（第17図11)，器形は縄文後期に多い定角式に似ている。他の5個（第17図17）は全部破損品であるが，完型品なら長さ約15cm以上の大形で厚手蛤刃の磨製石斧である。最後の1個（第17図16）は長さ

9㎝の局部磨製石斧で，石斧形の礫を選びその刃部と胴部に研磨を加えたものである。刃部以外には自然面が多く残されている。

環状石斧――1個出土。ドーナッツ型の環状磨製石斧（第17図18）で，直径8㎝，内孔の直径2㎝。外縁部が刃部をなして薄く，内孔に接した部分が表面だけ厚くなっていて，裏面は平面であるから片刃ということになる。

打製石斧――6個出土（遺物実測図6）。長さは10㎝前後で，弧状を呈する刃部には表裏両面から粗い剝離が加えられている。6個とも器形は大体同じである。

礫器――5個出土。その内の1個（第17図14）は，表裏が平滑な短冊形の大形礫石を中央で半折し，その折れ目に表裏両面から簡単な剝離を加えて，刃部とした礫器である。他の2個（第17図13，15）は，板状の礫石の周辺に剝離を加えて撥形に調整し，その扇状に開いた部分に粗い剝離を加えて，鋭い刃部を作出した礫器（幅12㎝，長さ11㎝）である。最後の2個は刃部の欠失した磨製石斧（第17図12）の折れ目に，表裏両面から簡単な剝離を加えて打製石斧としたものと，折れた磨製石斧の長辺の一側に剝離を加えて，祖型石庖丁の如き横形の，土掻き用要具としたもの（遺物実測図7）で，廃品更生の礫器である。

石錘――1個出土（第17図10）。長さ8㎝の，扁平で長目な礫石の両側辺に，打ち欠きを作った石錘で，紡錘車の代用品であろう。

凹石――10個出土（第18図1，2，3）。砂岩製で，その多くは10㎝以上の長楕円形礫石の中央部に，凹部を穿ったものである。

石剣――頭部と刀身部の中間部が各々1個ずつ出土（第18図6，7）。スレート製の扁平な石剣で文様は全く無く，ほぼ梯形を呈する頭部は最大幅が4㎝，くびれた頸部の幅は2㎝，刀身部は中央部が最も幅広いようで，その最も幅広い所が4㎝。厚さは頭部が1㎝，刀身部が1.5㎝である。先端は欠失していて，全体の形は不明である。

石棒――破片が2個出土。内1個（第18図4）は頭部と頸部をもつ破片である。頭部の横断面は丸いが，縦断面は梯形（最大幅3.5㎝）で頸部がくびれている。その文様は3本の平行沈線の間に，鋸歯状文が2段に描かれている。他の1個は胴部のみの破片（第18図5）で，上部に2本の浮彫された隆起線がめぐっている。胴部断面は丸く，直径は2.5㎝である。石質はいずれもスレートである。

鐙田遺跡A地点の石製品

岩版――2個出土。軟質凝灰岩を扁平な楕円形に整え，その表裏に沈線で文様を描いたものであるが，その1個（第15図13）は½程度の破片で，完型では大体長径10㎝，短径7㎝，厚さ2㎝の不整楕円形である。文様は短軸に沿って中央に縦位の一線を引き，その左右両側に複線かつ角形の平行x状文を2段に描いたものである。他の1個（第15図14）も½程度の破片であるが，この方はやや小形で完型にして長径6㎝，短径3.5㎝，厚さ1.8㎝ぐらいの卵形に近い正楕円形厚手の岩版である。文様は長軸に沿って中央に一線を引き，その両側に背中合わせの重弧文を描き，かつ現存部最下端の縦位沈線に接して腹合わせの三角形沈文を2個彫り込んでいる。思うにこの部分は完型品では丁度岩版の中央部に当るので，全体の文様は縦位沈線を中心とした背中合わせの重弧文を2段に描き，その中心部の小空間に腹合わせの沈文を彫り込んだものと思われる。裏面文様は殆ど消滅してしまっているが，

大体同じ文様かと思われる。

刻線石――1個出土（第15図12）。長径11.5cm，短径8cm，厚さ2cmの楕円形凝灰岩に原始的な線刻画を描いたもので，表面文様は上半部辺縁に沿って，刻目文状の短条痕がめぐらされているが，これは頭髪を現わしたものではないかと思われる。その下には中央部に1本の縦位沈線が下垂し，その沈線の上部では2本の弧状沈線が，左右両側に，眉状に派生している。これは鼻・眉・顔の輪郭などを表わす線でないかと思っている。下端部に横に一線が引かれ，それを底部として上向きの三角形らしいものが描かれているが，これは何を意味するか不明である。裏面にも中央に沈線が1本下垂している他，方向のまちまちな弧状沈線が何本も見えるが意味は全くわからない。

石製装身具――緑泥片岩製の臼玉が8個程（第15図8）出土。大きさは直径4mm～10mmで大小の差があり，いずれも中心部に糸を通す孔が穿たれている。他に同じ石質で，同じ太さ（直径8mm）の磨製の円棒が一本出土しているが，これは輪切りにして小孔を穿てば，直ちに管玉の完成が幾つもとれる二次的原材料で，臼玉の製造過程を示す好資料と言えるであろう。

鐙田遺跡B地点の石器

石鏃――2個出土。その1個（第21図2）は長さ3.5cmで，鏃身が二等辺三角形を呈する柄部の長い石鏃で，整形は比較的精巧である。他の1個（第21図3）は長さ4.5cmで，柄部の殆ど認められない長三角形石鏃であるが，形態・剝離ともに至って不整・粗雑である。

石錐――1個出土（第21図4）。全長3.5cmで摘み部は小さく，不整な円形。錐部も非常に短い。

尖頭器――3個出土。内1個（第21図9）は長さ7cm，両端が尖って菱形を呈し，全周辺に細かい整形打が加えられている。他の1個（第21図7）は長さが6cm，基部が丸く先端の尖ったもので，無柄石鏃を大きくしたような形である。整形打は細かい。最後の1個（第21個8）はかなり大形品らしいが，破損していて現長7cm，刃部の最大幅4cm，剝離は矢張り精細である。

石箆――2個出土。内1個（第21図11）は長さ7cm，他の1個（第21図10）は11cm。いずれも反面加工で，表面には縦に不整な稜が通っており，刃部は長軸に対し直角で，薄く鋭い。両者とも剝離は実に粗大である。

磨製石斧――破片が2個出土。内1個（第22図16）は現長10cm，刃部は一直線で定角式磨製石斧に近く，薄手の角張った形態である。他の1個（第22図15）は現長12cm，刃部の形は丸く厚手で，蛤刃磨製石斧である。

両頭石斧――1個出土（第22図17）。所謂独鈷石で長さは17.5cm，中央部に2本の隆起帯がめぐり，その内側に明確に接着剤のアスファルトが付着している。特色は両端が鶴嘴状に尖らずに，長軸に対して直角の石斧状の刃部を持っている点である。

多頭石斧――1個出土（第22図18）。直径11cmのドーナッツ形環状磨製石斧の外周に4個の切り込みを付したものであるが，外周の刃部は両刃で表裏両面から研磨している。

礫器――2個出土。内1個（第21図12）は長さ10cm，板状の礫を飯しゃもじ形に調整し，刃部とその周辺に粗い整形打を加えたもので，撥形の一種と見るべきものであろう。背部と腹部には滑らかな自然面が多く残されている。他の1個（第22図17）は，板状に剝離した短冊形の粘板岩の一端に，表裏両面から簡単な剝離を加えた礫器で，特色は最初から板状の石を用いる所に特色が見られる。

石棒――胴部のみの破片１個（第22図19)。スレート製で断面は丸く径 1.6cm。その他は一切不明。

以上鐙田のＡおよびＢ地点の石器と石製品で，目立った点だけを挙げると，最も注目されるものはＡ地点で棒状石鏃が非常に多量に出土していることである。ところがＢ地点にはこの種の石鏃が１個も出ていない。従ってＡ地点のこの種石鏃の大部分は，Ｂ地点にはない新しい時期の遺物即ち大洞Ａ式土器に伴う石族と考えることができるのである。

石匙ではＢ地点のものは全部臥牛形の典型的な横型石匙であったが，Ａ地点のものは刃部が弧状をなす三角形石匙をふくむ，ずんぐりした不整円形のものが大部分のようである。そしてＢ地点にはこの種のものは１個も出土していない。従って前記石鑑の場合と同様，臥牛形の横型石匙は大洞Ａ式に多く，不整円形のものは大洞Ａ式に多い，と考えて良いのではあるまいか。

Ａ地点の背中合わせの重弧文と腹合わせの三角形沈文を有する岩版は，青森県平遺跡の土版，同県是川中居遺跡，秋田県半谷地遺跡の岩版などに出土例があり，大洞C_2式ないしＡ式に属するものであることは既に知られている。然し同地点の複線角形の平行工字文を描く岩版は，既述の同じ文様の土版と同様，大洞Ａ式に属するものである。

Ａ地点出土の石棒の頭部には，３本の平行沈線の間に２段の鋸歯状文が横走しているが，既にＡ地点第２群土器に就いて述べたように，鋸歯状文が三角工字文の極端に簡略化されたものであるとすると，この石棒の鋸歯状文も同様で，編年的には大洞Ａ式土器に比定すべきものとしなければならないであろう。

Ａ地点の石剣の頭部形態は梯形で，前記石棒の頭部の縦断面形態と同じである。扁平な石剣の頸部外形と，丸い石棒の頭部をわざわざ縦割りして，その形態の類似性を比較することには，多少の無理が感じられるが，大洞Ａ式土器の最も特色的な器形は梯形であるのみならず，この傾向は土器の全般に伺えるものであるから，石棒の頭部に鋸歯状文が用いられていることをも併せ考えると，その縦断面と石剣の頭部の形態とが同じであることは，必ずしも偶然の一致とは言えないものがあるのではあるまいか。

打製石斧は非常に少なくて，むしろ磨製石斧よりも少ない程である。これは縄文時代の一般的傾向から見れば，奇異の感に打たれる現象で，逆説的に言うと磨製石斧の方が多くなってくる傾向さえが伺えるのである。即ち両頭石斧・粗型石庖丁・環状石斧・多頭石斧などの磨製石斧系石器の種類が俄かに増加してくることなどがそれである。

周　辺　遺　跡　の　遺　物

塞　の　神　遺　跡　の　遺　物

塞の神遺跡の遺物総出土量　　（括弧内は石器）

東西区 / 南北区	A	B	C	1A区外部	計
1	869 (33)	564 (9)	275 (14)	616 (43)	2,324 (99)
2		61 (10)	68		129 (10)
3	93 (14)	95 (10)	8		196 (24)
計	962 (47)	720 (29)	351 (14)	616 (43)	2,649 (223)

上掲統計表でわかるように，どうやら発掘調査を行なったと言えるのは１Ａ区，１Ｂ区，１Ｃ区の３区だけである。従って資料不足の誇りは免れ得ないが，土器の器形文様について，以下極く大まかな分類を行なって見ることにする。

塞の神遺跡の土器・器形と文様

〔第１群土器〕本群は塞の神遺物中で，最も古い時期に属するものである。

（第１類土器）沈線に画された横位楕円形，もしくはそれが更に横に流れた磨消縄文をもつ土器である。

第１種土器――口縁部および頸胴部の無文部を滑沢に研磨し，みみず脹れ状の隆起線文をもって口縁部を飾り，頸部および上胴部にはみみず脹れ状の隆起線，または太形沈線で画した磨消縄文を施文した，厚手深鉢形土器（第23図１，２，３，４，５，６，７，８）である。

第２種土器――第１類土器と殆ど同じであるが，口縁部に大きな把手の付された土器（第23図10）である。また口縁部や中胴部に，大形の刺突列点文で縁取った隆起線の区画文をもつもの（第23図9）もあるが，この種土器も横位の楕円形磨消縄文を伴なうものである。

〔第２群土器〕本群は塞の神遺物中の，中頃の古さの土器群である。

（第１類土器）口縁部や肩部に渦巻文もしくは，それに代位する文様を付していて，縦走する平行沈線文が胴部の殆ど全面を掩う土器である。

第１種土器――口唇部は無文で外反，口唇下もしくは肩部の数個所の縄文地文上に，沈線の渦巻文または重弧文を描き，その文様を起点として縦位の平行沈線文が胴部一面に展開する土器（第23図11，12，13）である。他に口唇部が大きな波状を呈し，その波頂部に，短い重弧文に擁せられた大きな円孔を穿ち，頸部に１本の突帯文をめぐらせた深鉢形土器（第23図16）で，上胴部に数条の平行沈線を異方向に斜行させ，交差させているものがある。また同様に重弧文で囲んだ渦巻文の代用文を波状口縁の波頂部に持ち，頸部をめぐる１本の沈線の下に平行沈線の弧状文をもつもの（第23図15）も，恐らく胴部以下には縦位の平行沈線文が展開しているものと思われる。それ以外にも平縁の口唇部に渦巻文に代る刺突文をもち，その肩部以下に短冊形の沈線文を縦位に付したもの（第23図14）などがある。

第２種土器――胴部破片のみで，口縁部文様は不明であるが，胴部は横走条痕文を地文とし，その上に縦位の平行沈線文を全面に描いた土器（第23図17，18）である。

（第２類土器）磨消文系の土器である。

第１種土器――口縁部は無文外反し，頸部以下が平行沈線の唐草文風な曲線文となって，胴部の全面を掩う土器（第24図１）であるが，平行沈線の内部だけが縄文で，その外部の縄文がすべて不完全ながら磨消されている。

第２種土器――口縁のない胴部のみの破片であるが，地文が細かい縦位の条痕文で，その上に比較的幅の広い平行沈線を縦走させ，その内部の条痕文だけを磨り消したもの（第23図19）である。

〔第３群土器〕塞の神遺物中の，最も新らしい時期に属する土器群である。

（第１類第１種土器）口縁部に１～２本の突帯文をめぐらせる土器で，一種類だけしかない（第24図12，13，14）。文様は上胴部に沈線の幾何学的文様がめぐらされ，中胴部以下を無文とした土器であ

る。

（第２類第１種土器）本類も一種類だけで，口縁部に刺突文や竹管文をめぐらせる土器（第24図15，16，17，18）である。上胴部文様は第１類土器と同様な，幾何学的文様である。

（第３類土器）主文に帯状縄文を用いる土器である。

第１種土器――太い沈線に画された直線的な帯状縄文を，口唇下に２～３本平行的にめぐらせる土器（第24図６，７，９）である。

第２種土器――口唇下に２～３本平行的な帯状縄文をめぐらせると同時に，頸部と上胴部に帯状縄文で，矩形文や区画文を描き中胴部以下を無文とした土器（第24図４，５）である。

第３種土器――２～３本平行する帯状縄文で，上胴部に曲線文を描き，胴部以下を無文とする土器（第24図２，３，８）である。

（第４類土器）条痕文・縦位撚糸文・網目文などを主文とする土器を一括したものである。

第１種土器――口縁部と口唇部を除く土器の全面に，縦位の条痕文を施文した土器であるが，この種土器片の中には破片の上端に横位弧状の平行沈線をもつものがある（第25図７，８）。

第２種土器――口縁部の上端だけが無文で，以下の器面全部が縦位撚糸文の土器である。本種土器の内には縦位撚糸文の上端が，ループ文状を呈しているものがある（第25図１，２，３）。その他に撚糸の側面圧痕文を頸部に１本だけめぐらし，それ以下を斜行縄文にした土器（第25図９）もある。

第３種土器――口唇部上端だけが無文で，以下の器面が全部撚糸の網目文となっている土器（第25図４，５，６）である。この種土器には上端に平行沈線文をめぐらしたものが，本県大湯遺跡では出土している。

以上が発掘で得た塞の神土器の，器形と文様の全部である。

第１群第１類の第１～２種土器はすべて，みみず腫れ状の特色ある隆起線，もしくは太沈線で画した横楕円形の磨消縄文が描かれている点で，広義の大木10式土器に比定されるものである。一般に太平洋岸の大木10式土器の楕円形磨消文は，縦位の撚糸文のみの如く解され勝ちであるが，斜行縄文のものも伴出していて，必ずしも撚糸文のみとは限っていないようである。のみならず塞の神遺跡から南方へ11km離れた雄勝町下馬場遺跡では，地文が斜行縄文の横楕円形磨消文土器ばかりを出土していて，そこからは縦位撚糸文の磨消文土器片が一片も出土していないのである。吾々はこの種文様の土器は恐らく縦位撚糸磨消文土器発生の母胎をなすもので，この種土器だけの文化期も，少くとも当地方に関する限り実在したことがあるのではないかと考えている。

第２群土器の器形は口縁部がくの字形に反転し，胴部下端がつぼまる形で，文様は，直線的な平行沈線の縦位文様が下胴部まで伸展するもの，平行沈線の唐草文風な曲線文が下胴部まで広がるもの，などがあるが，いずれにしても文様が，胴部全体に描かれる点が特色である。またこの時期の磨消縄文は，縄文部と磨消部の境界が明確でなく，半磨消の状態が多いことも，特色の一つと言えるかも知れない。

以上の諸特徴は関東では堀之内１式に見られるものである。平行沈線によって唐草文状の曲線文を土器の全面に描くものは，本県大湯式土器中の一部や，青森県十越内遺跡土器に見るところであるが，これらが堀之内２式に比定し得るか否かは問題だが，北方的特色を持つ文化であることは確かである。

第３群土器の器形は口縁部がラッパ状に開き，円筒形に近い下胴部もまたその最下端部で開き気味になっている。意匠文様は刻目や刺突文を加えた隆起線文を１～２本口縁部にめくらせ，頸部と上胴部には沈線や帯縄文で幾何学的文様を描いたものが多い。但しその幾何学的文様帯を頸胴部以上に限定し，その下限を２～３本の平行沈線で画し，以下を無文にしている所に特色が見られる。また第３群土器の磨消縄文は非常に明確で，沈線から縄文がはみ出すようなことは，絶対ないと言って良い。

以上の諸特徴によって見ると第３群土器は，関東堀之内２式に比定すべきもので，大湯式土器の最も特徴的なものがこれに比定される。然しこの時期の塞の神遺物中には，同じ県内の遺物でありながら特徴的大湯式土器片が一片も出土しないのは不思議である。

石器は出土量が少なく，堀之内式特有の極小で定角式の磨製石斧が２個（第18図10，11）あるだけで，その他には目ぼしいものが殆どないので，詳細の記述は省略する。

鐙田遺跡をめぐる周辺遺跡と遺物

縄文時代遺物――鐙田遺跡の南方 150ｍの，外堀部落と新城部落の間の旧村道（現市道）の中間部道路脇から，縄文地文上に粘土紐の平行沈線文・波状文・曲線文などを貼り付けている厚手の胴部破片が，20片程（第25図10，11，12，13）出土しているが，これは縄文中期大木8_a式土器である。出土地点は標高95ｍで，鐙田遺跡周辺では最も比高の高い所である。塞の神遺跡はこれより１ｍ低く，鐙田遺跡は塞の神より更にまた２ｍ低くなっている。

奈良・平安時代遺物――須恵器と土師器の破片が各々１個ずつ，鐙田Ａ地点と未調査のＣ地点から表面採集されている。Ａ地点のそれ（第25図14，15）は，土師器が色調茶褐色を呈する糸切底で，器形は下胴部器壁が外傾しているから，浅い坏か盤の類であろう。須恵器は表面が克明な横位条痕の叩き文で，裏面が同様の浅くて乱方向の文様である。口縁部が強く外折している大形甕の破片である。Ｃ地点から出土したもの（第25図16，17）も，土師器は糸切底で，器壁にはロクロ使用痕が見える。須恵器は横位条痕文の克明な厚手大形土器である。

松岡経塚――鐙田遺跡から 600ｍ西方の山腹（出羽丘陵の支丘）にある松岡経塚は，金銅経筒・須恵器や土師器の完型品などを各々数個ずつ出土した大形経塚であるが，年代は金銅経筒に寿永三年・建久七年などの銘があるので平安末期のものであろう。

鍬柄遺物包含地――鐙田遺跡から約 1.0㎞東方の湯沢市山田鍬柄地区では，昭和47年度の県営圃場整備工事で完全に破壊し尽された遺物の出土地点が数個所と，籾の貯蔵用竪穴が一カ所発見され，多数の土師器破片が採集されたが，底部はみな糸切底であり，混在した少量の須恵器破片には叩き文の条痕があった。

以上が鐙田遺跡をめぐる極く近い周辺の，土師器および須恵器の出土地点であるが，それらが距離的に最も近い松岡経塚に関係するものか，或はまた多少距離があるが当地方の政治的拠点であった雄勝城擬定地（羽後町足田）に関係するものであるか，は今のところ明確ではない。（山下孫継）

第５章　ま　と　め

立　地　条　件

鐙田A地点の周辺は文字通りの低湿地帯で，綱の目のように蛇行し交錯する細流は遺跡の一部をも侵しているが，これは勿論現在の地形で，これがそのまま埋没遺跡の時代にまで遡って適用できるか否かは問題である。少なくとも大洞A式土器を包含する，上層部遺物包含層（第3層）そのものは低湿地遺跡とは言えない。そしてその層中には夥しい遺物が包含されており，その発掘調査も普通の平地遺跡のそれと何ら異なるところがない。

ところが遺跡中央部の2D・2Eの2グリットでは，第3層の中間部に上下の黒褐色土層とは全く対照的な色合の，黄白色のローム層状薄層（厚さ3～5cm）が，1本だけ介在しているのが発見され，遺跡北端部の6D・6Eグリットに於てはこれが2～3層重層をなしているのが発見されている。これは乾燥すれば灰白色に見えるので，初めは灰層ではないかと疑ったが，矢張り軟弱な地盤を固めるため，外部から土を運んできて敷きつめた，人為的な貼床ではなかろうかと考えるようになった。貼床が設けられても決して不思議ではない程，第3層下層部の地盤は軟弱であったからである。言うまでもなくその原因は，第4層の青灰色細砂層中にふくまれる多量の地下水で，それが何らかの理由で滲み上ってきて時折第3層の下層部を非常に柔らかくすることがあったのではあるまいか。

もともと第3層の生活面は，何らかの理由で乾燥するようになった，第4層上面の凹地に営まれたものであるから，多雨もしくは無住の場合は，地下水が滲み上ってきたり，雨水が流入してくることは，必ずあった筈である。そんな時床面を固めるのが貼床でありそれ以外にこのような異質のローム状土層がどうしてこんな所に存在するのかは全く説明することができないし，殊に最も水分の多い遺跡北端部に於て2重3重にこれが堆積されていることは一層この感を深くするものである。若しこれが貼床であるとすれと第3層の遺物包含層は典型的な低湿地遺跡とは言えないまでも，間接的には矢張り低湿地と関係の深い遺跡であると言えるのではないかと思うが，如何なものであろう。

上層部生活面の性格――第3層遺跡の平面形は細長くて最初は，弥生期の舟形遺構を想起させるようなものであったが，発掘の進行につれて北半部の幅が急に広くなって，全体の形は巨大なしゃもじ形を呈するに至った。従ってこれを1個の住居址と考えることは到底不可能であるし，さりとて数戸の住居址の集落であるとする論拠も全然発見することができなかった。そして報告し得る断片的なものとしては，僅かに下記のものがあっただけである。

上層部遺物包含層の中央部西縁に当る6Dグリットと，中央部東縁に当る5Gおよび7Gグリットに於て，遺物包含層の辺縁に沿って，底部を上にした半壊土器がビッシリと並べられていた。これは強いて言えば，地面に達した屋根の末端部の隙間をふさぐ目的の，盛り土の一種ではなかろうかと思われる。また6Gグリットとそれに隣接する7Gグリットには，その土器片の盛り土線に沿った内側に，大体深さ11cm，直径15cmの柱穴様小孔が3個発見された。その各々の柱穴の間隔は約1mで孔間からは礫と共に土器片が2～3個ずつ発見された。これも強いて考えれば，屋根の下端部を支える小支柱ではなかろうかと思える。

以上結論的にいうとA地点では，その夥しい遺物や多量の木炭によって，上層部生活面の存在だけは確認できたが，住居址形態などについては，従来の多くの縄文晩期遺跡と同様，ただ巨大な生活遺跡という以外何ら報告することが出来なかったのが残念である。

下層部生活面の性格――青灰色細砂層（第4層）の下層部生活面（泥炭化植物質堆積層）はA地点

遺跡の全面に存在した訳ではなく，新排水溝の周辺即ち上層部生活面の北半部の真下からのみ発見されている。そしてその他の地点にもこのような泥炭化植物質堆積層や下層部生活面が存在するか否かに就ては未調査の現在何とも言えない状態である。のみならず発見された下層部生活面に就ても，その植物質堆積層の内部や下底部をつぶさに調べる時間を殆ど持ち得なかったことは今次調査中の最大の痛恨事であった。

そこで私達は資料不足を覚悟の上で，以下泥炭化植物質堆積層上面の情況について論じるより他ないことになるが，予備調査時の地層点検用トレンチ（Cトレンチ）に於ても，また本調査で露出した泥炭化植物質堆積層上面からも同様に，復原可能な土器片や髪飾・耳飾・胸飾などが多数出土していることは既に述べた通りである。従ってここが生活面であることはほぼ疑のない所であるが，然し泥炭化植物質堆積層そのものの性格に就ては，下記の如き異説もまた有り得ることと思うので一応の検討を加えて見ることとする。

㋑　河川を利用する必要から，浅い部分にいわゆる「杭上住居」を営んだ。

㋺　河川を中心にその周辺で竪穴住居を設置する一方，ここを祭祀的地域もしくは生活のための何らかの作業を行なう特定の場所として使用した。

㋩　河川の氾濫によって崩壊した生活圏の遺物が，上流の樹木と共に流されて来て，この地点に滞留した。

以上の内で最も妥当性のありそうなものは㋺で，㋑の杭上住居址説は排水溝を掘削した際，その側壁に露出した８本の柱列が，横倒しになっていた樹木の切断面であったことが判明した今日では，誤認に基く憶説として斥けるより他ないであろう。㋩の流木説や遺物の流下説は，大きな木材を押し流す程の流速ある川がこの周辺にあったとは地形上倒底考えられないし，また例えそのような思いがけない大洪水があったとしても，その激しい流水に押し流された比重の重い人工遺物が，樹葉・樹枝・樹幹などの合理的な堆積層の上に，壊れもせずにきちんと乗っかっているなどということは倒底考えられないことである。然し例え㋺説をとるとしても，祭祀的地域だけに限定して考える訳にも行くまいと思う。今までに発見された低湿地遺跡で祭祀的遺跡と考えられた前例は全くないし，土偶や土版の類が出土したからと言って，祭祀的遺構を伴なわない祭場を想定することは，無理が過ぎるように思われる。そこで祭場的場所をも含めて極めて広義に解釈し，生活に必要な何らかの目的のための特定の場所，として置く方が当面最も穏当な表現であろうかと思われる。

特定の場所という言葉を具体的に説明すると次のようになる。植物質堆積層の地点が水辺であったということで，流水との関係は次の二つの場合が考えられる。その１は植物質堆積層の北端は現在水浸しの水田であるが，そこは地下水を含む青灰色細砂層（第４，５，６層）が物凄く厚く，ブルドーザーもめり込む程であるから，昔も今と恐らく同様に流水があったものと思われる。その２は植物質堆積層の西方外側の地層は，殆ど青灰色細砂層ばかりで，その厚さは１ｍを越え，粗い砂礫層の地山直上から現在の水田耕土層の直下にまで達している。のみならずその地層の内部には何段もの砂礫層が介在していて（８Ｄグリットの層序に同じ），相当流速の早い時が度々あったことを物語るものである。植物質堆積層の東半部は多少比高が低いので後には水を被るが，もともとは西半部と全く同様な植物質堆積層で，この地点の東方外縁部は表土近くまで盛り上る地山の砂礫層に接続しているから，

ここは丘続きということになる。従って結局植物質堆積層の全体は，北端と西方外側に流水を控え，東側は丘続きになる水辺の足場もしくは台場と言うことになるのである。

前述したように植物質堆積層の堆積状態は非常に合理的で，遇然の結果とは考えられないものがあるように思われる。床面に相当する堆積層の最上層には，約５～15cmの厚さの樹葉が緻密に敷き詰められて，圧縮された馬糞状を呈しているが，その床面を支える中下層材料には樹枝や太い樹幹（第１図14，15）などの嵩張る素材が用いられ，それらすべてを横に寝かせて敷き詰めている。然しこのような堆積情況もまた全面一様ではなく，沼沢状湿地に近い北端部の比高の低い所では表面近くに枝を払い縦割りした太い木材（径20～30cm）が２本，平面を上にして横たえられていた（第１図15，17)。ところが僅かながら比高の高い南半部では，大木の樹根が自生状態のままに残され（第１図16）ていて，そこには大きな樹幹や縦割りした大きな木材は全く見られなかった。つまり比高の低い水分の多い地点では，足場を堅固にするために大きな木材が，意図的に多用されていたことを意味するものではなかろうか。若しそうであったとすると，これは勿論遺構と称すべき程のものではないが，一種の水辺施設と解釈しても良いのではなかろうか。

土器――Ａ地点の最上層部（第３層の上層部）遺物が大洞Ａ式もしくは砂沢式土器であることは，既に述べた。然しこの種土器の包含層が第３層の貼床より上部なのか，それとも貼床より下の第３層下層部にまで及んでいるのか，と言う点については速断し難いものがある。物質堆積層上面から出土した土器はみな，典型的な大洞Ａ式土器（第１図18）であって疑う余地がない程明確であったことは既に述べた。従って土器型式が最も不明確なのは，第３層下層部の土器だけと言うことになる。具体的に言うとこの層位では大洞Ａ式土器とＡ式土器とが雑然と同居しているようにさえ思われるのである。若し第３層中間部の貼床が，両型式土器の境界線になるとすれば問題は至極明快に解決するのだが，残念乍ら第３層上層部遺物中にも大洞Ａ式土器が混入しているので，割り切れない気持にならざるを得ないのである。

この問題の解決は，大洞Ａ式土器と砂沢式土器との編年関係の上にも，影響を及ぼす重大なものである。既述のように波状口縁土器の山形突起部に施文される三角形沈線文は，大洞Ａ式には全然見られないのに，砂沢式には明らかに現われている。同県五所式の複線の三角形沈線文を持つ土器が，三角形沈線文を全く持たない大洞Ａ式土器より新らしい土器だとすると，１本の沈線だけで三角形を描く砂沢式や鐙田Ａ地点土器も，大洞Ａ式土器よりは幾らか新しい土器と言うことになる。果してそうだとすれば鐙田Ａ地点の大洞Ａ式的土器と砂沢式的土器の出土層位も同一ではない筈で，両者の境界線を何処に求めるかが，改めて又問題となって来るのである。然し残念ながらこれは本遺跡では倒底解決できそうもない問題で，層序の細別が明確な新遺跡の発見とその調査結果に，期待をかけるより他ないであろう。鐙田Ａ地点最上層（第３層）土器の内の，波状口縁の波頂部の一つが特別に大きく発達して台状を呈するものは，口縁突起の複雑化を特色とする砂沢式土器時代の一般的流行を示すもので，その中の一つのローカルカラーと見るべきものであろう。

土製品と石製品――土偶・土版・岩版などの内，岩版の一例以外は全部大洞Ａ式土器に伴出するものであった。これは典型的な大洞Ａ式土器包含層である泥炭化植物質堆積層の内部が殆んど調査できなかったことから来る資料不足に原因するものと思われる。

従来の土偶に関する先学の所論は大洞C_2式土偶とA式のそれとを同型式として，その間に殆ど差別を付けていない。そしてその代表的なものとして牛角状結髪や磨消縄文の腰被いをもつ土偶と，背合わせの重弧文や腹合わせの三角形沈文をもつ土版や岩版などを挙げている。鐙田A地点では前記岩版の一例の他，出土地点と層位の不明確な牛角状頭髪の破片1片と磨消縄文の腰被いをもつ土偶の片足の破片1片があるが，これらが大洞A式に該当するものであるかも知れないと考えている。

石器――A地点から夥しく出土した大洞A式の棒状石鏃は注目に価する。かくの如き錐状の石鏃の多出は縄文時代の全期間を通じて前例のないことであるし，刺突用石鏃としては，機能的に最もすぐれたものであるから，伝統的な狩猟技術が最高段階に達した時代と見ることができるであろう。

ところがこの時代は，只単に動物性食料の生産技術が最高段階に達したというだけではなく，植物性食料の生産技術に於ても新らしい躍進の見られる時期で，磨製石斧の盛行がそれである。石器の章において，打製石斧はむしろ減少気味であるにも関らず，両頭石斧・粗型石庖丁・環状石斧・多頭石斧などの，磨製石斧系石器の種類が俄然多くなって来たことを述べたが，大洞A～A期頃になると礫器までがこれに同調して来るのである。

薄い板状の河原石や，粘板岩の板状剥片や，磨製石斧の破損品などの，表裏両面が平滑な石材が特に選ばれて，その一辺または一端に極く簡単な刃を付けるだけの，従来余り見かけなかった礫器が多用されるに至る。極端なものでは長さ20cm，刃部の幅15cm，厚さ2cm程の，鍬形の板状礫石が数個出土している。この礫石の刃部に当る部分は，薄手の自然面であると言うだけで全く加工の痕が見られないので，これを礫器であると断言することは難しいが，全く同形のものが数個出土しているし，手に持って見ると土掻き要具としては実に使いよいものなので，これもまた上記板状礫器に準ずるものと考えることができるのではないかと考えている。

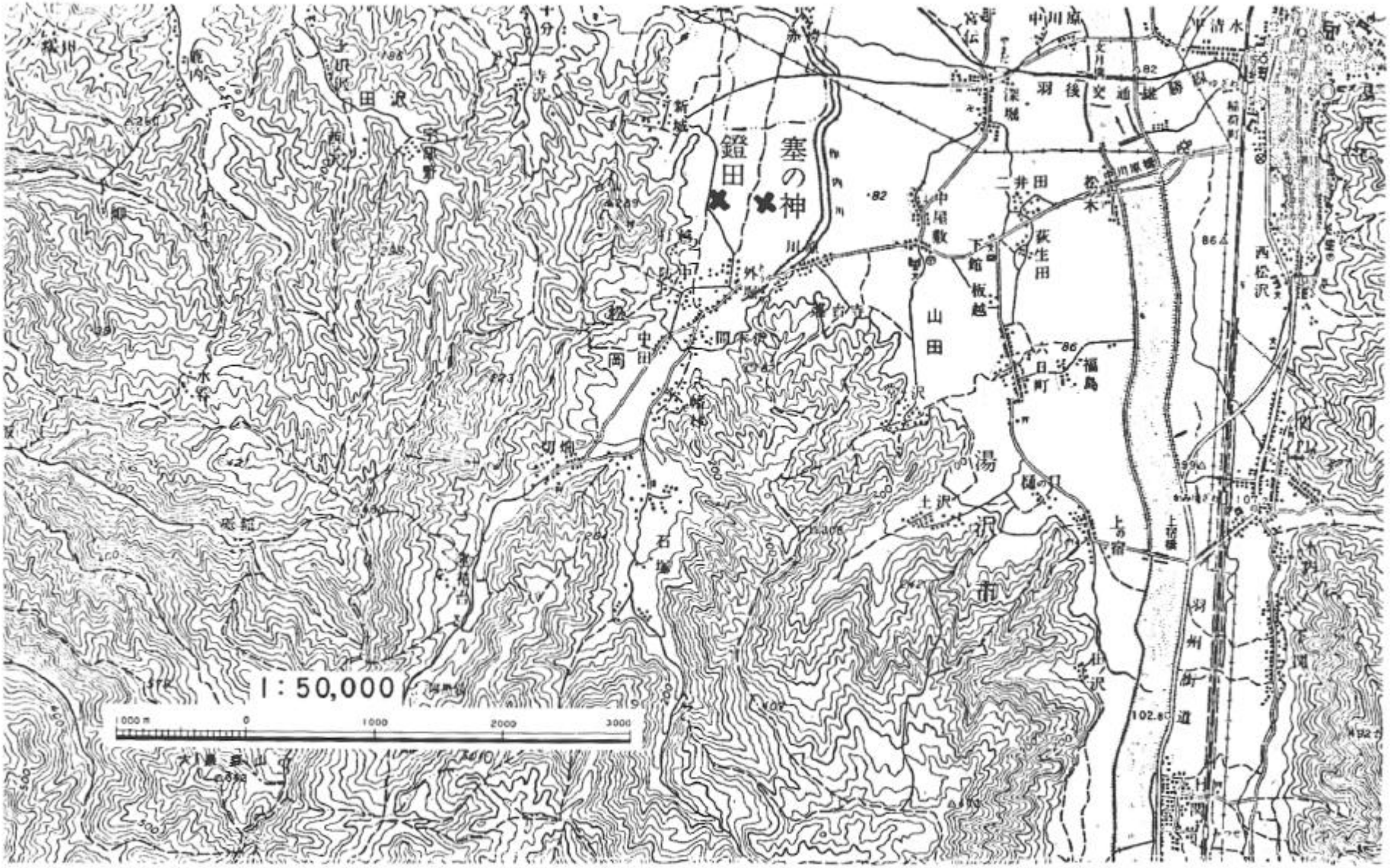
従来礫器は打製石斧の不足を補う粗製品としてのみ理解されてきたが，鐙田における礫器は刃部よりもむしろ，扁平かつ平滑な自然面の方が重視される礫器，即ち磨製石斧の代用品として使用することのできる礫器，としての性格の方が強まってきたことが感じさせられるのである。

磨製石斧の本来の用途は，世界史的にいうと農耕用具であったが，上記の如き礫器の性格の変遷は，むしろこの磨製石斧の本来の用途に近ずいてきたことを示すもので，このことはまた長く邪道にさまよっていた日本の磨製石斧の用途そのものが，原始的栽培の胎頭につれて本来の姿に帰って来たことを，暗示するものではあるまいか。

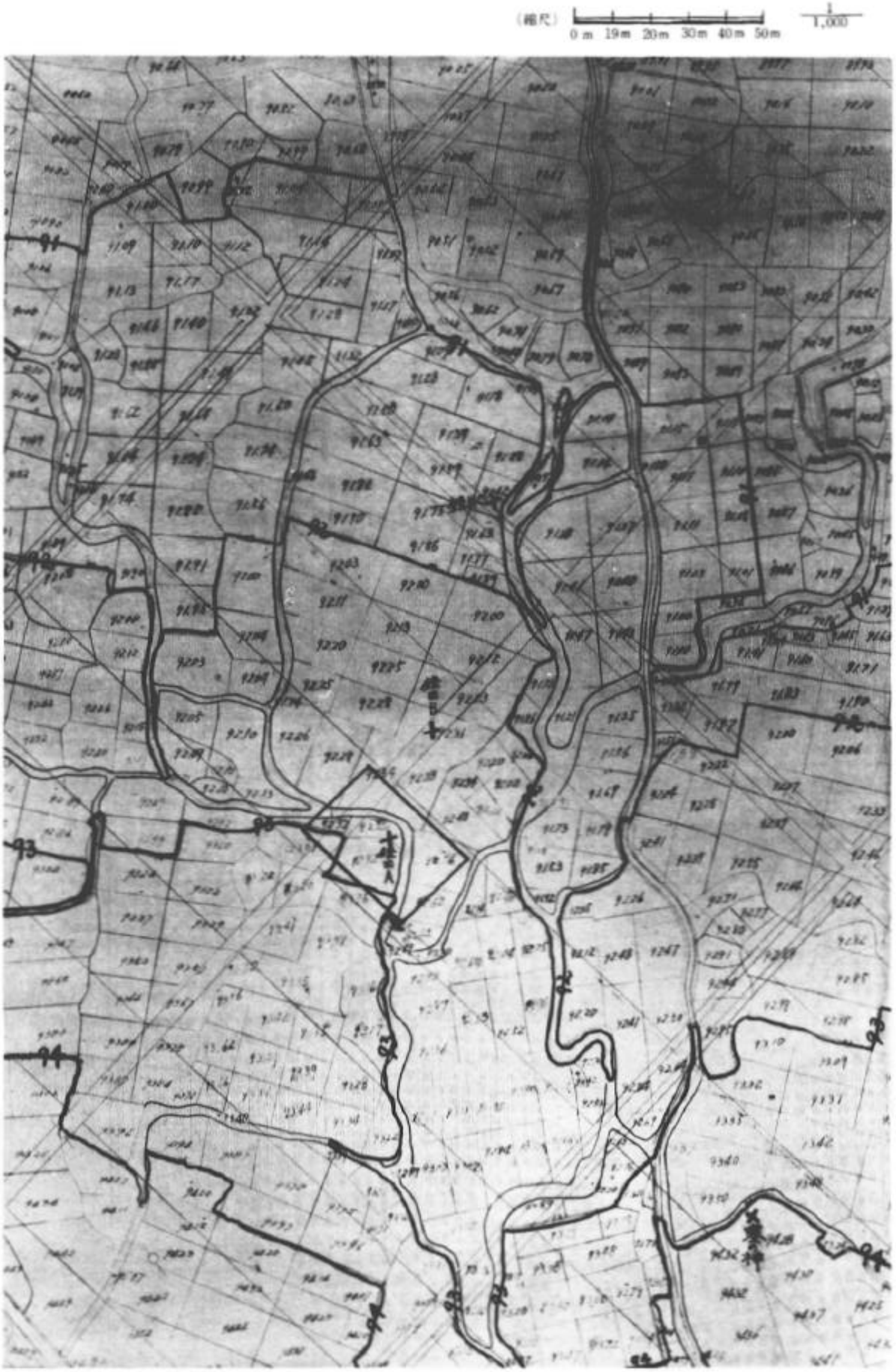
ともあれ鐙田A地点第4層下層部の泥炭化植物質堆積層の上面から出土したクルミは驚ろくべき量で，採集したものだけでも優に200個を越した程である。このような夥しい食料品の自生地点と人間の居住地点とが，遇然に一致するということは到底考えられないことである。殊にクルミが本地方では縄文早期（雄勝町の岩井堂岩陰遺跡）以来，奈良平安時代（湯沢市鍬柄の食料品貯蔵用竪穴遺跡）に至るまで，民衆の主要な植物性食料であったことを思うと，その感を深うせざるを得ないのである。そして同時に私達は縄文末期人達が，健康上からも生活環境上からも決して快適ではない筈の湿地帯中に，好んで居を占めるに至った最大の理由もまた，水辺には飢を凌ぐに足る植物性食料を定期的かつ安定的に供給してくれる樹種が，多数自生繁茂していた点にあったものと思われるのである。

（山下孫継）

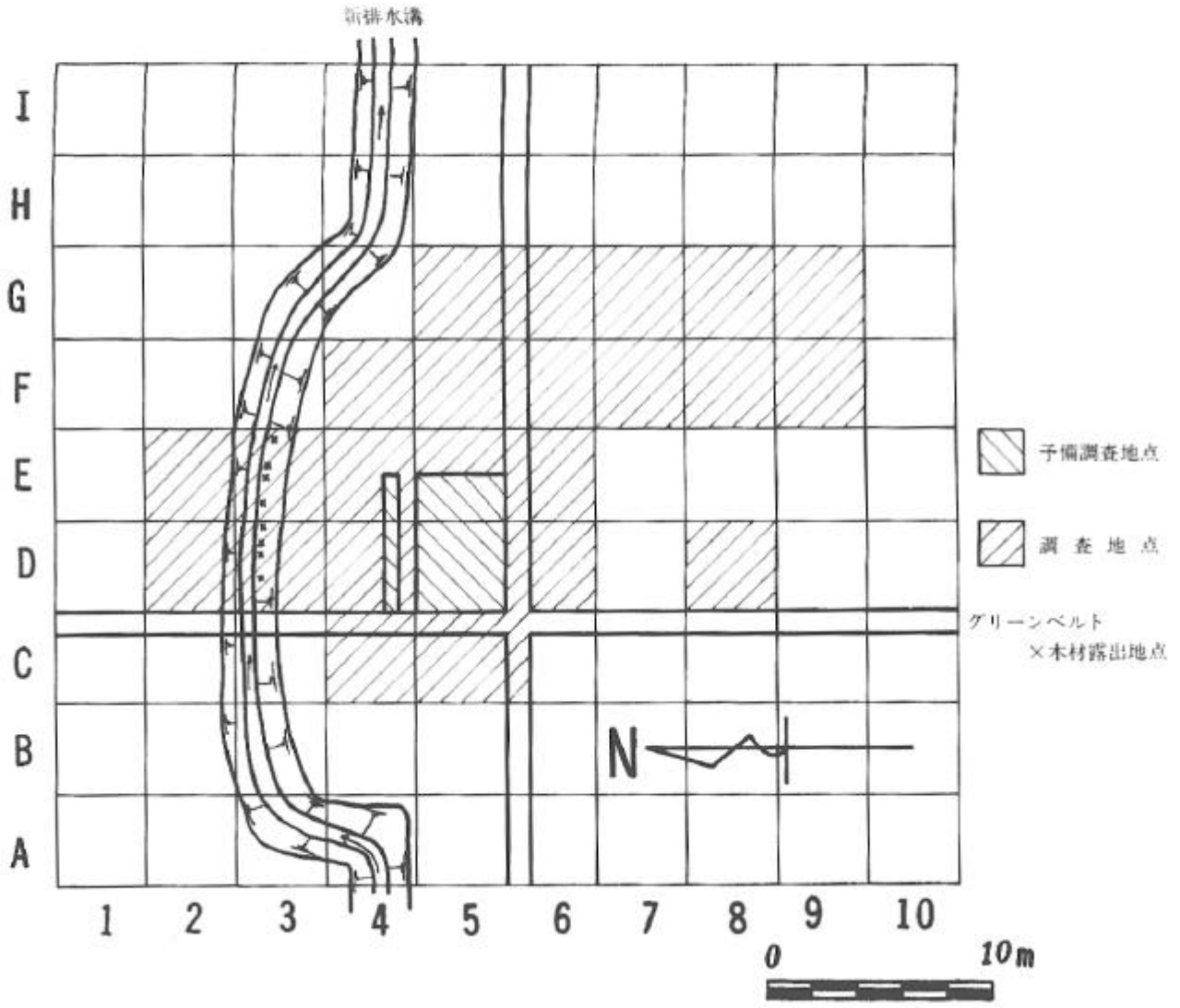
図面1　鐙田遺跡位置図



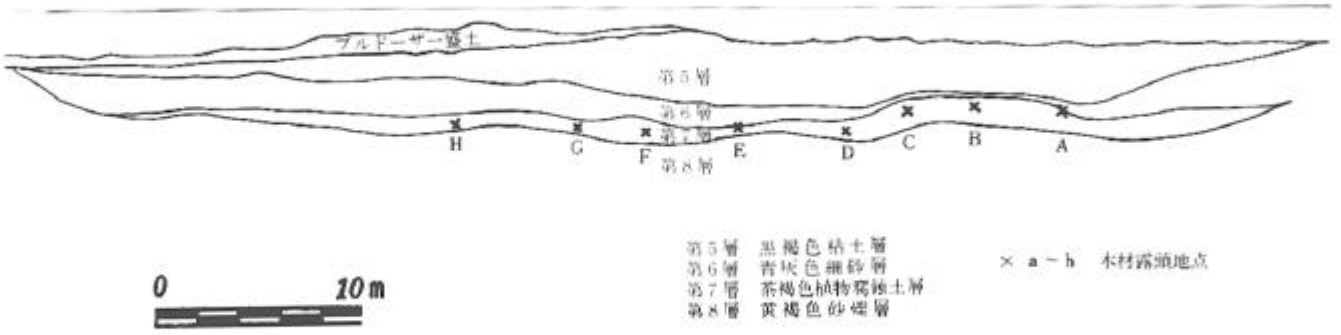
図面２　大規模圃場整備事業現況平面図



図面３　A地点グリット設定図



図面４　新排水溝南壁層序



図面５　鐙田遺跡Ａ地区平面，断面図および土層図

1973.6.14～6.29
鍋倉，杉渕，遠藤

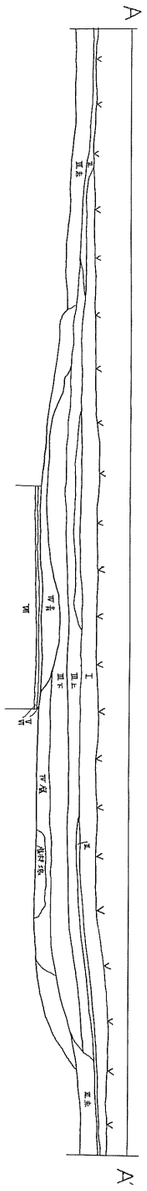
［土　層］

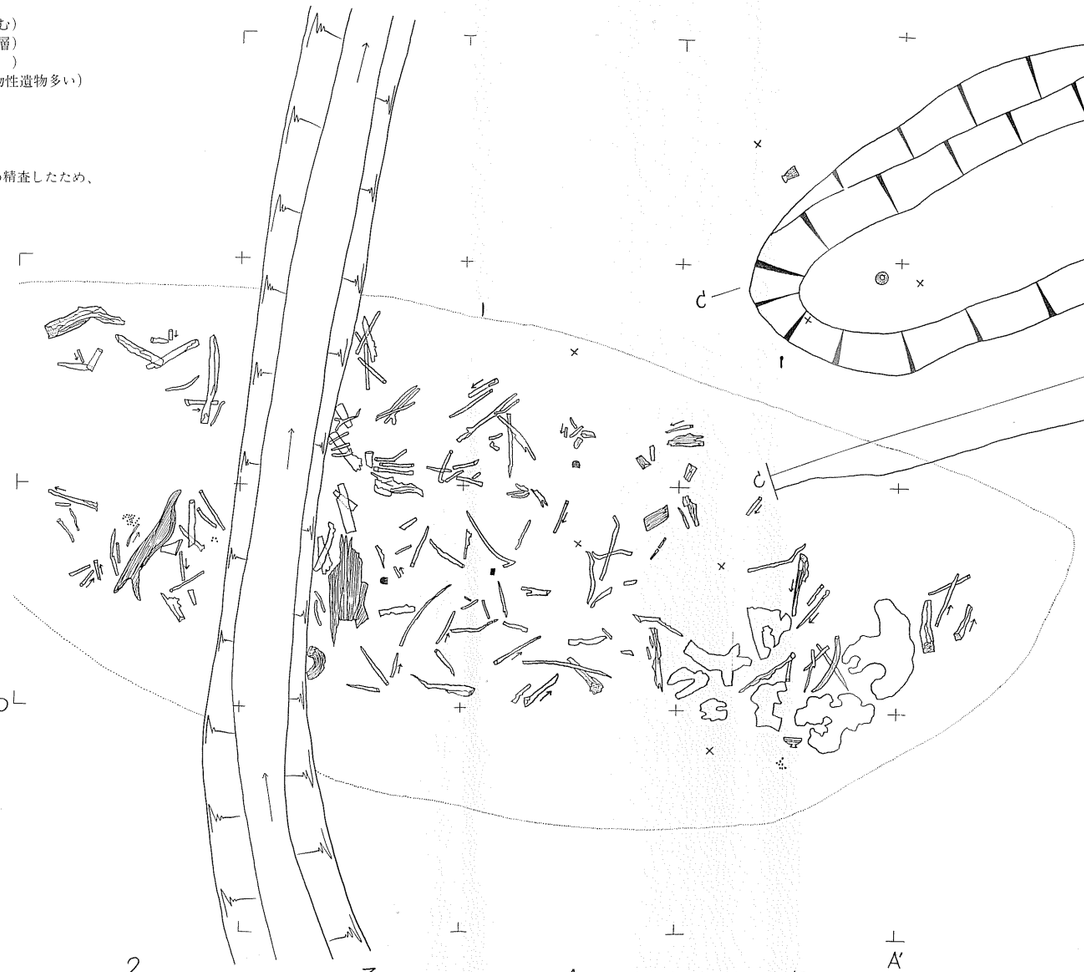
Ⅰ……耕 作 土
Ⅱ……礫　　層
Ⅲ…{ Ⅲ赤…赤褐色土層（少し砂礫含む）
　　Ⅲ上…褐色粘土層（遺 物 包 含 層）
　　Ⅲ下…黒色粘土層（〃　　〃　）
Ⅳ…{ Ⅳ腐…腐 植 土 層（腐植木，植物性遺物多い）
　　Ⅳ青…青色粘土層
Ⅴ……砂 礫 層
Ⅵ……青砂土層
Ⅶ……礫　　層

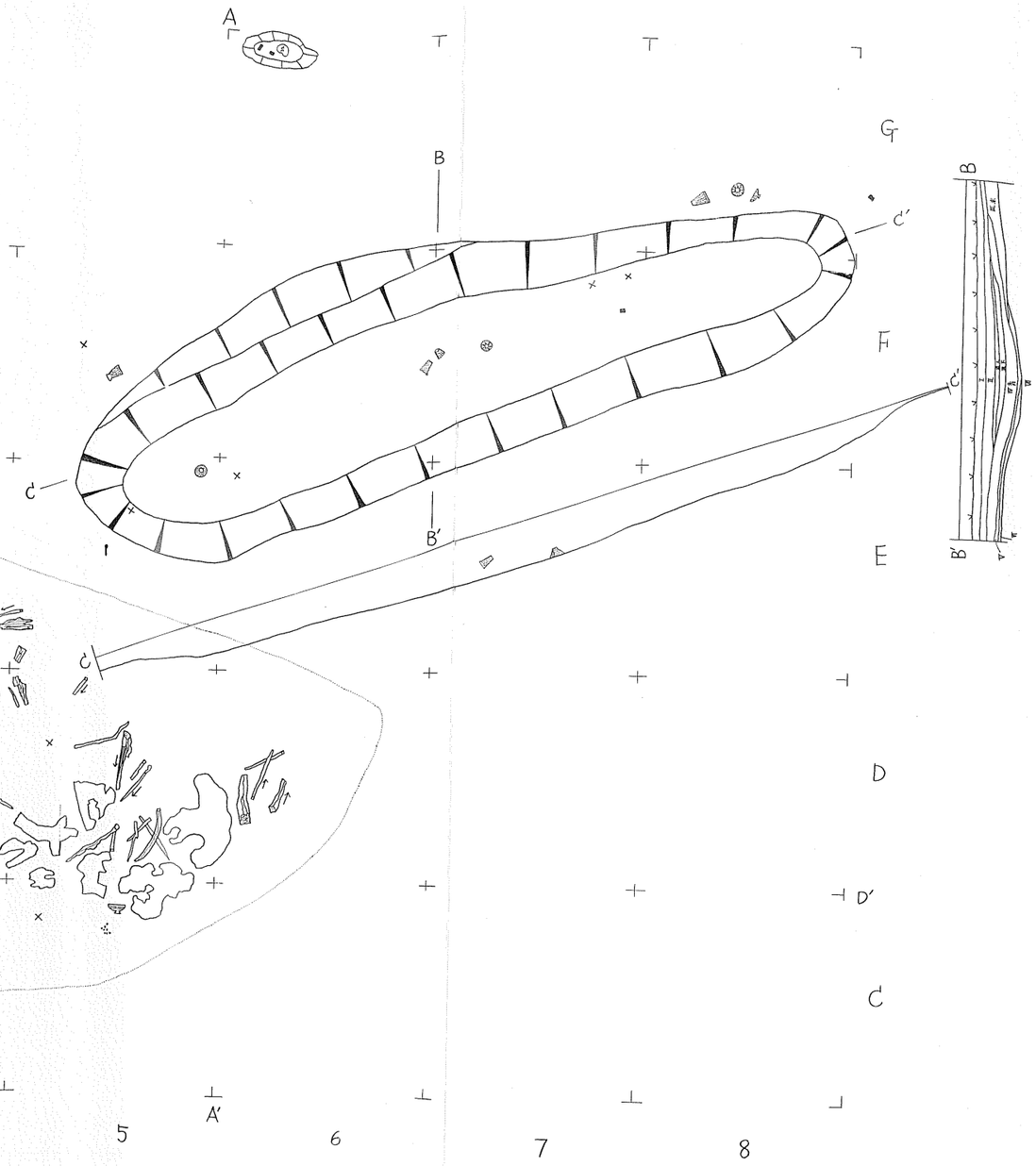
※ 8Dグリットの Section は土層把握のため精査したため、名称は別にする。

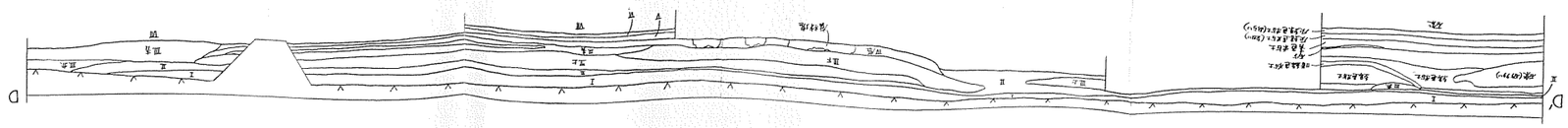
［主要遺物］

×……土　　偶
……赤漆塗櫛
……土　　版
……石　　剣
……石　　棒
……土製 } 丸玉
　　石製 }



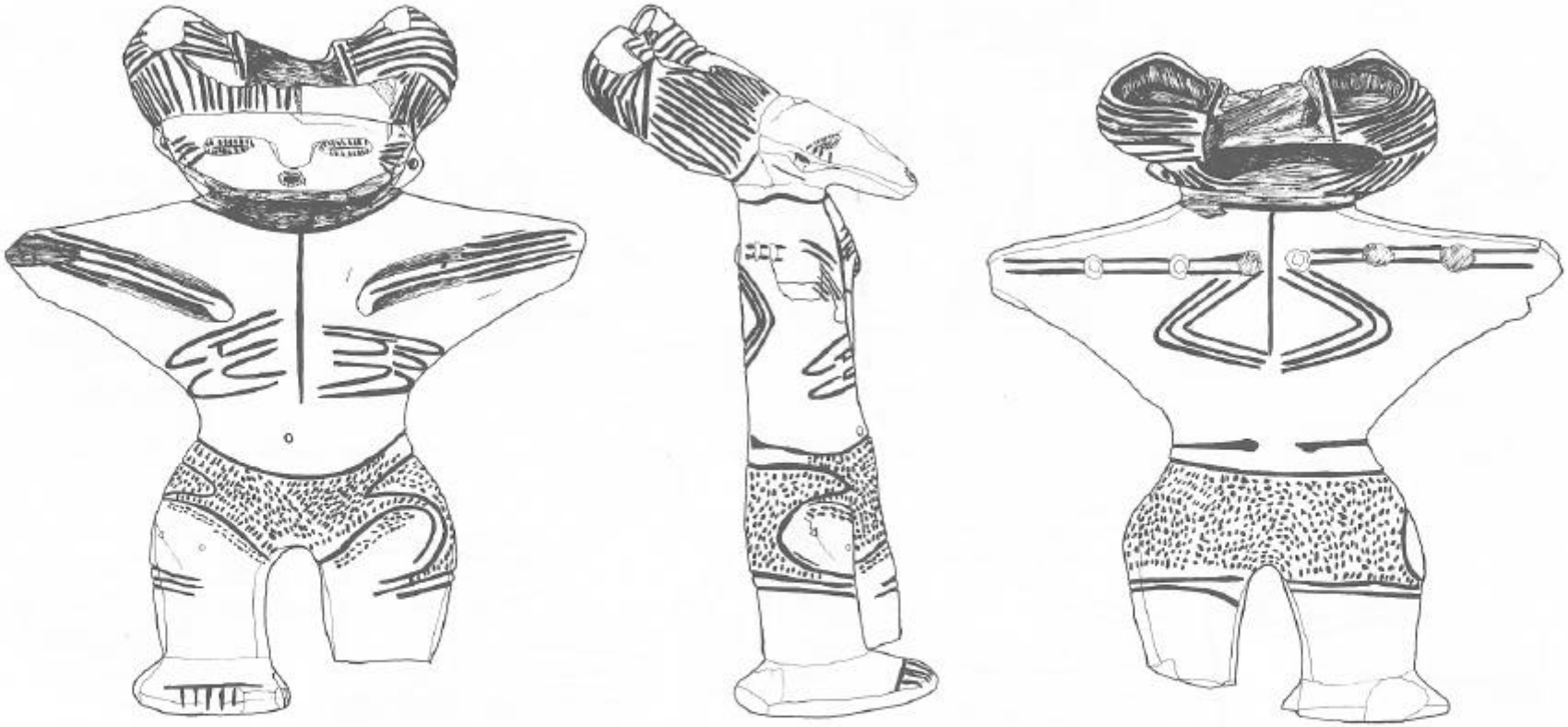




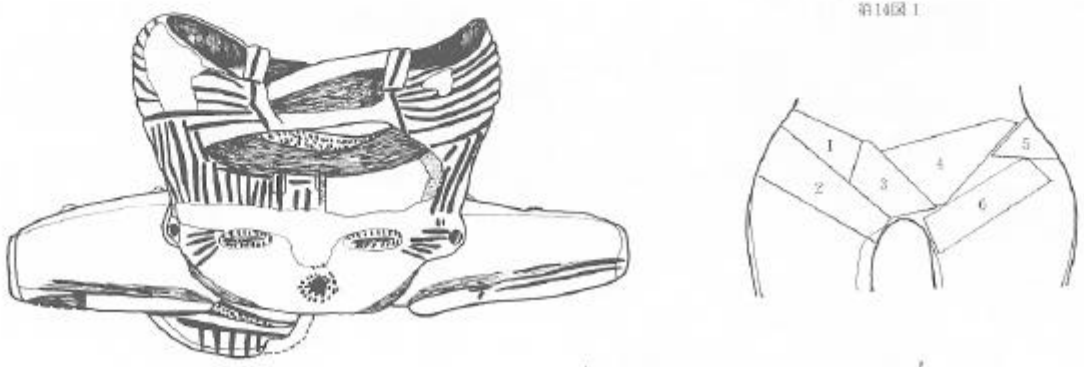


遺 物 実 測 図 1

（図版番号対照）



第14図 1

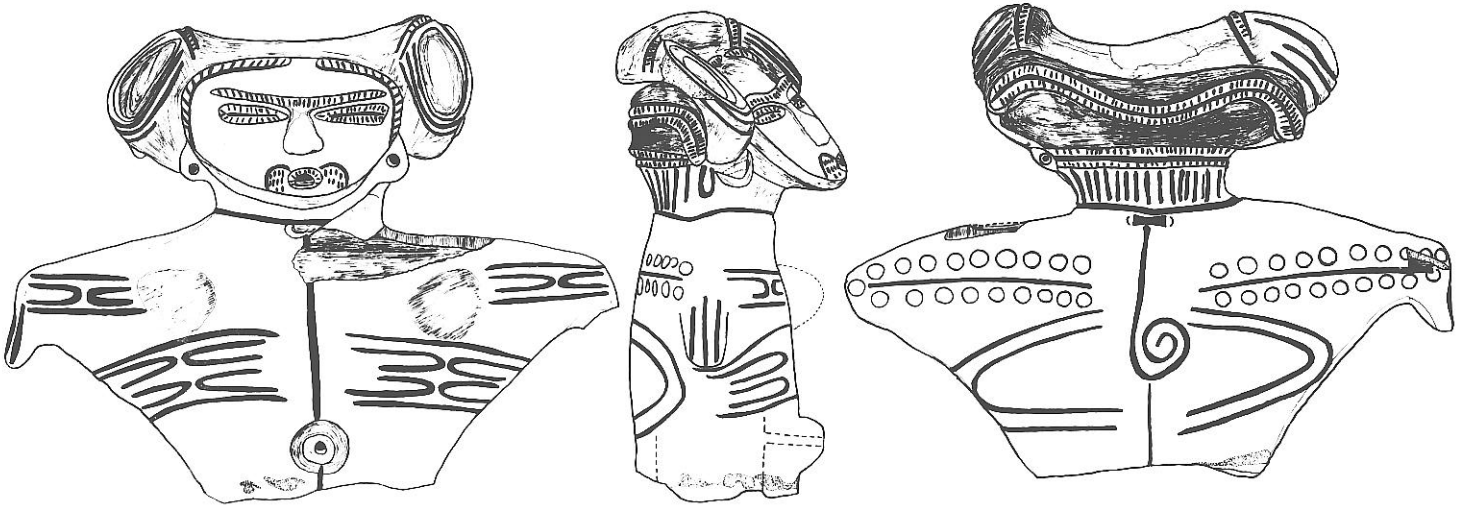


0 cm　5 cm　10cm

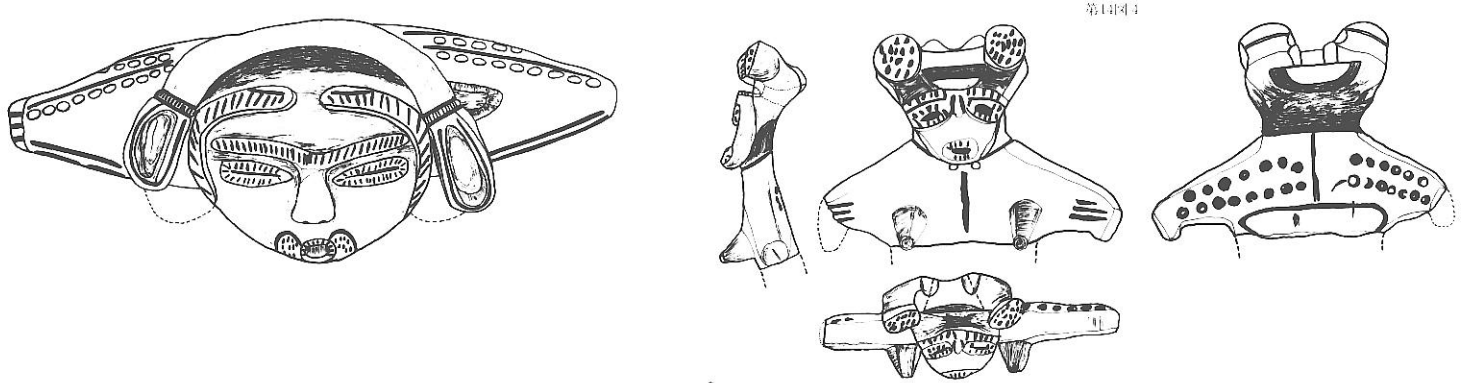
遺 物 実 測 図 2

（図版番号対照）

第14図-2



第14図-1

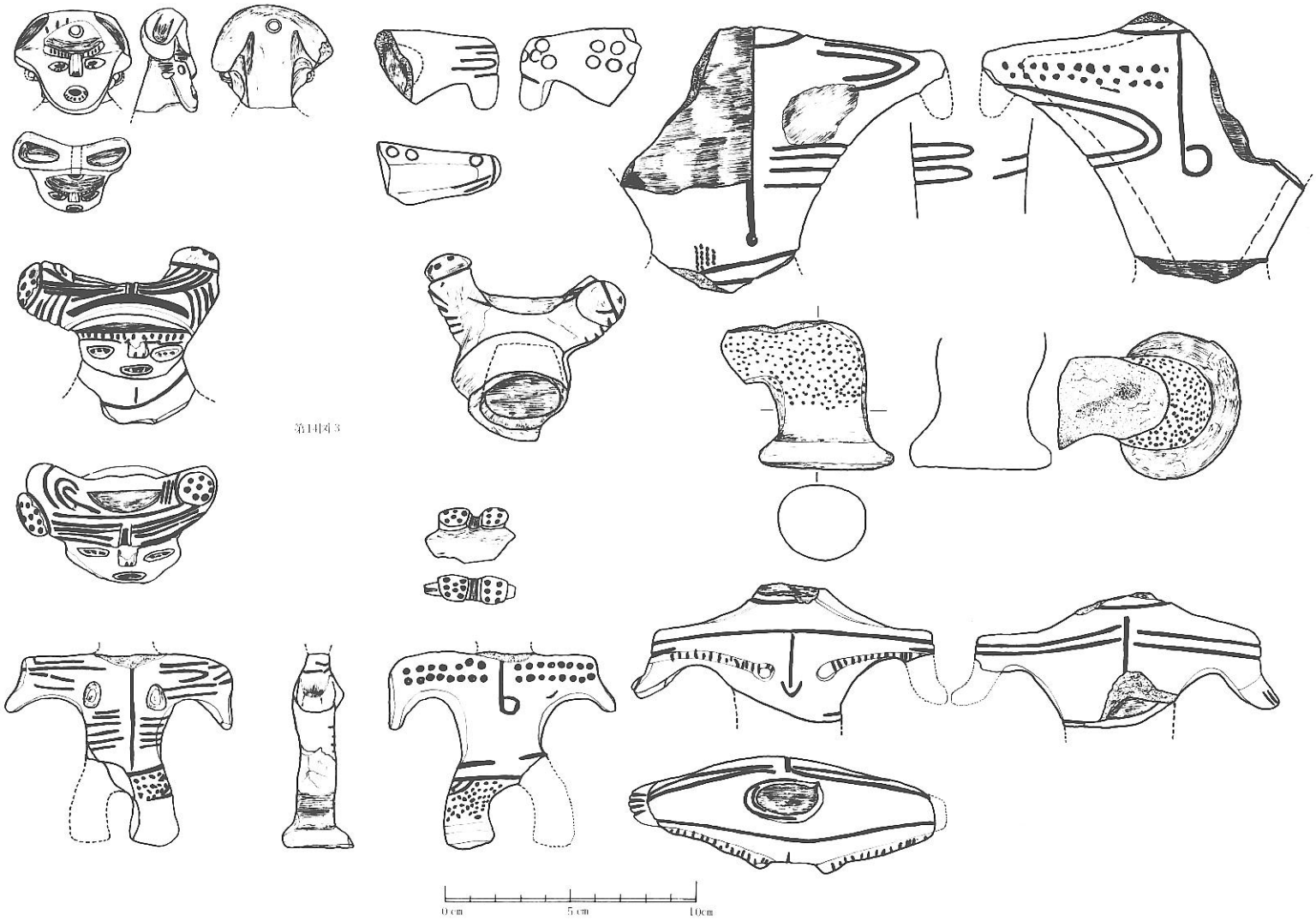


遺物実測図 3

（図版番号対照）

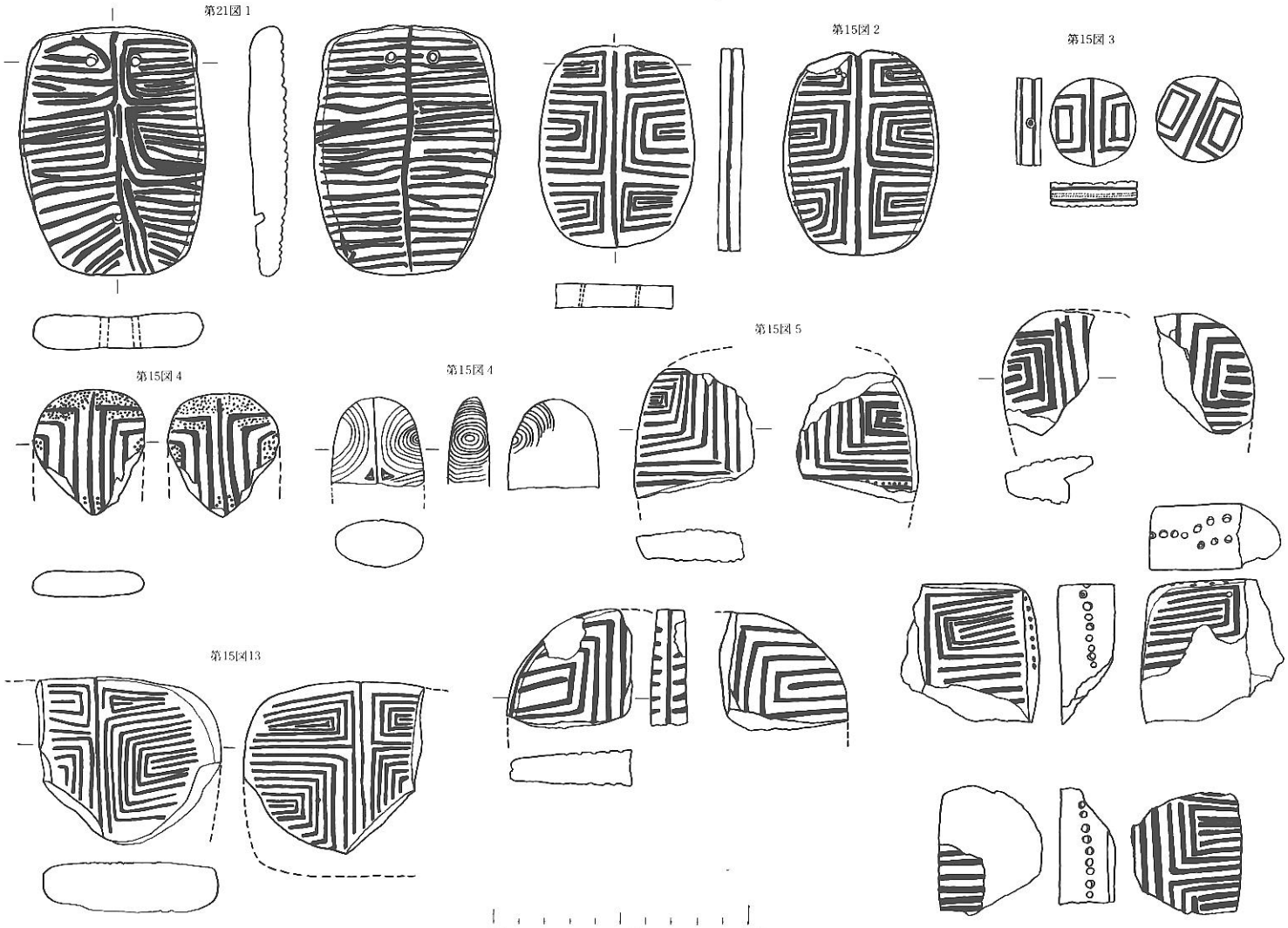
第14図5

第14図3



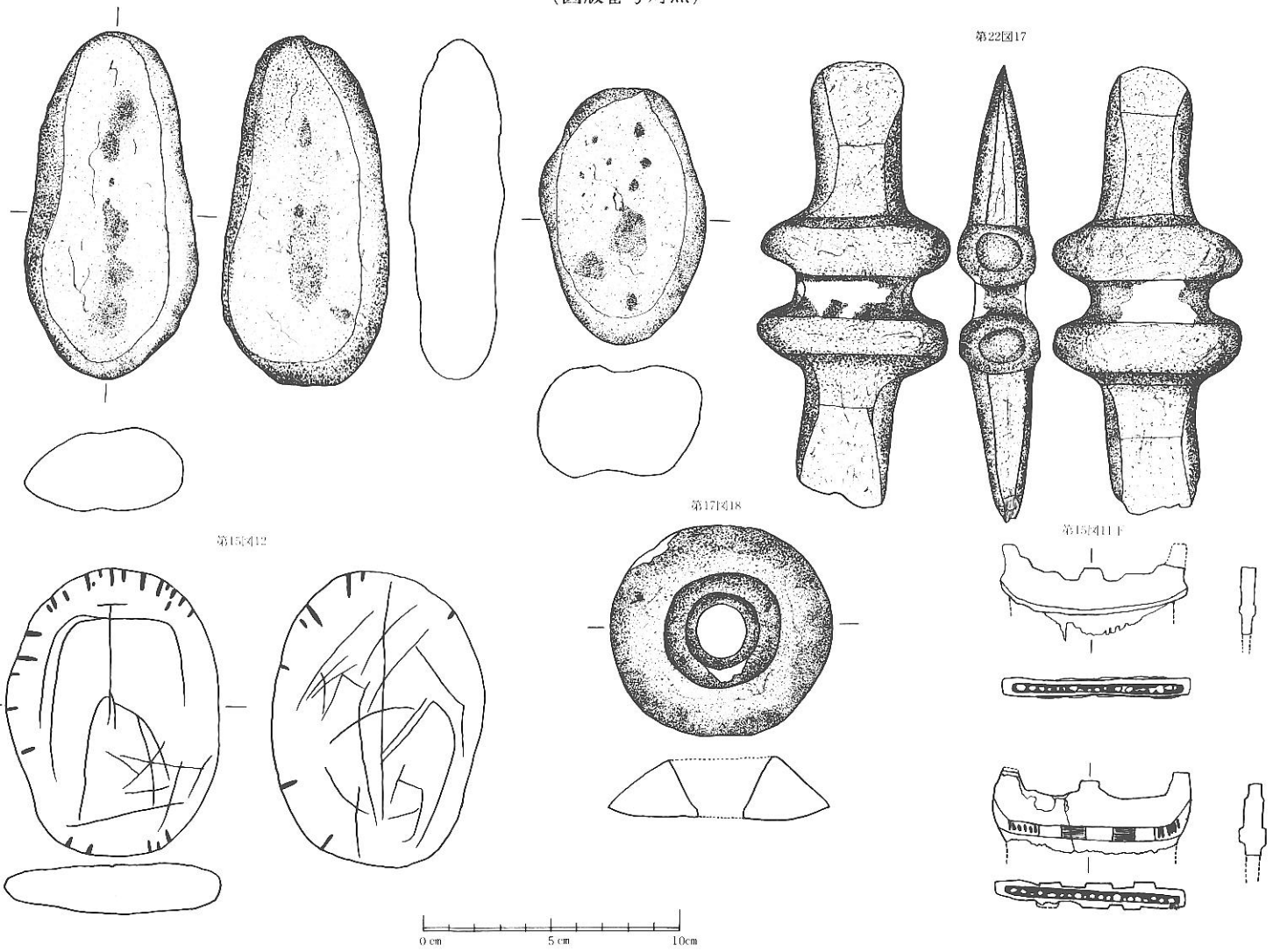
遺 物 実 測 図 4

（図版番号対照）



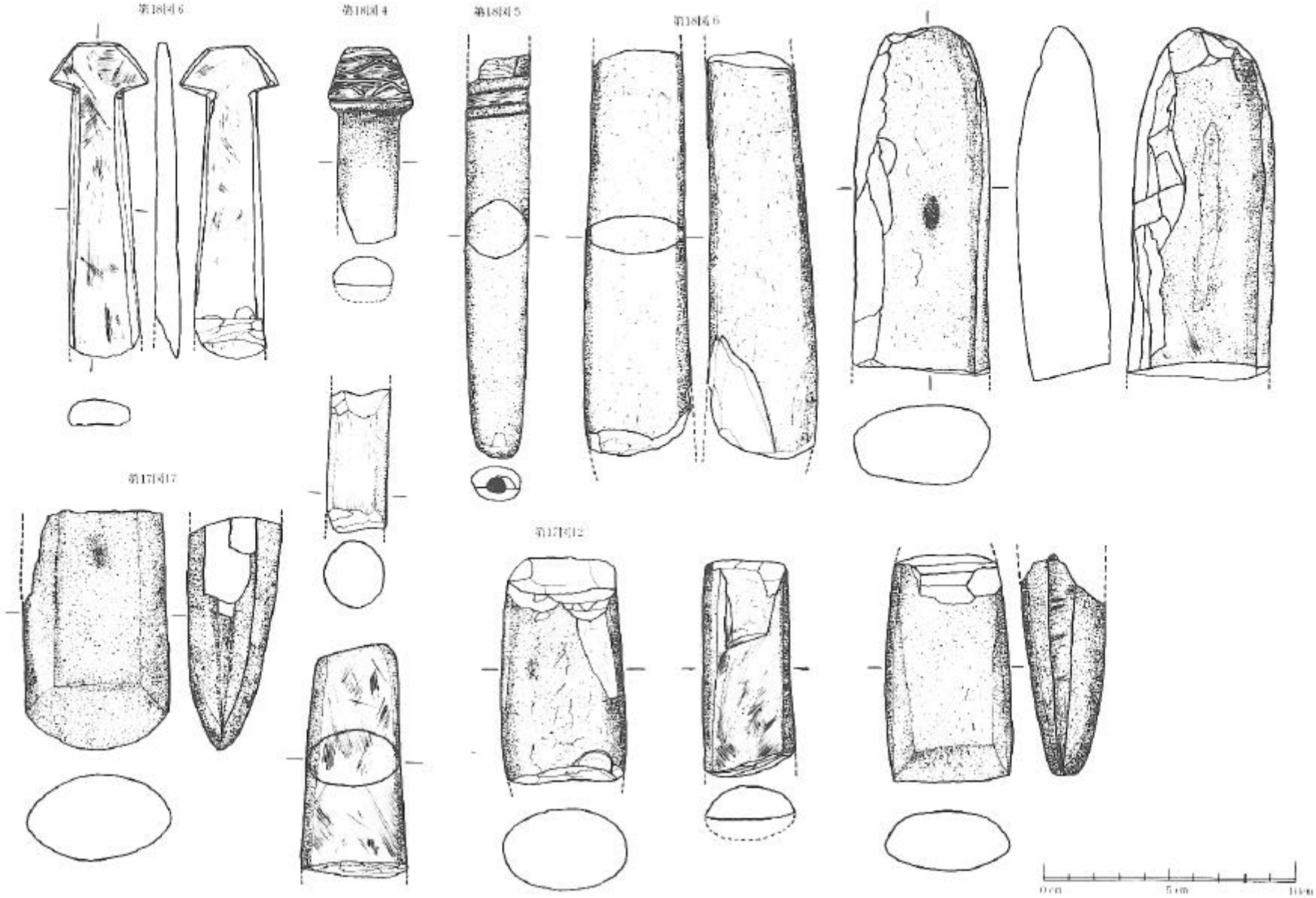
遺 物 実 測 図 5

（図版番号対照）



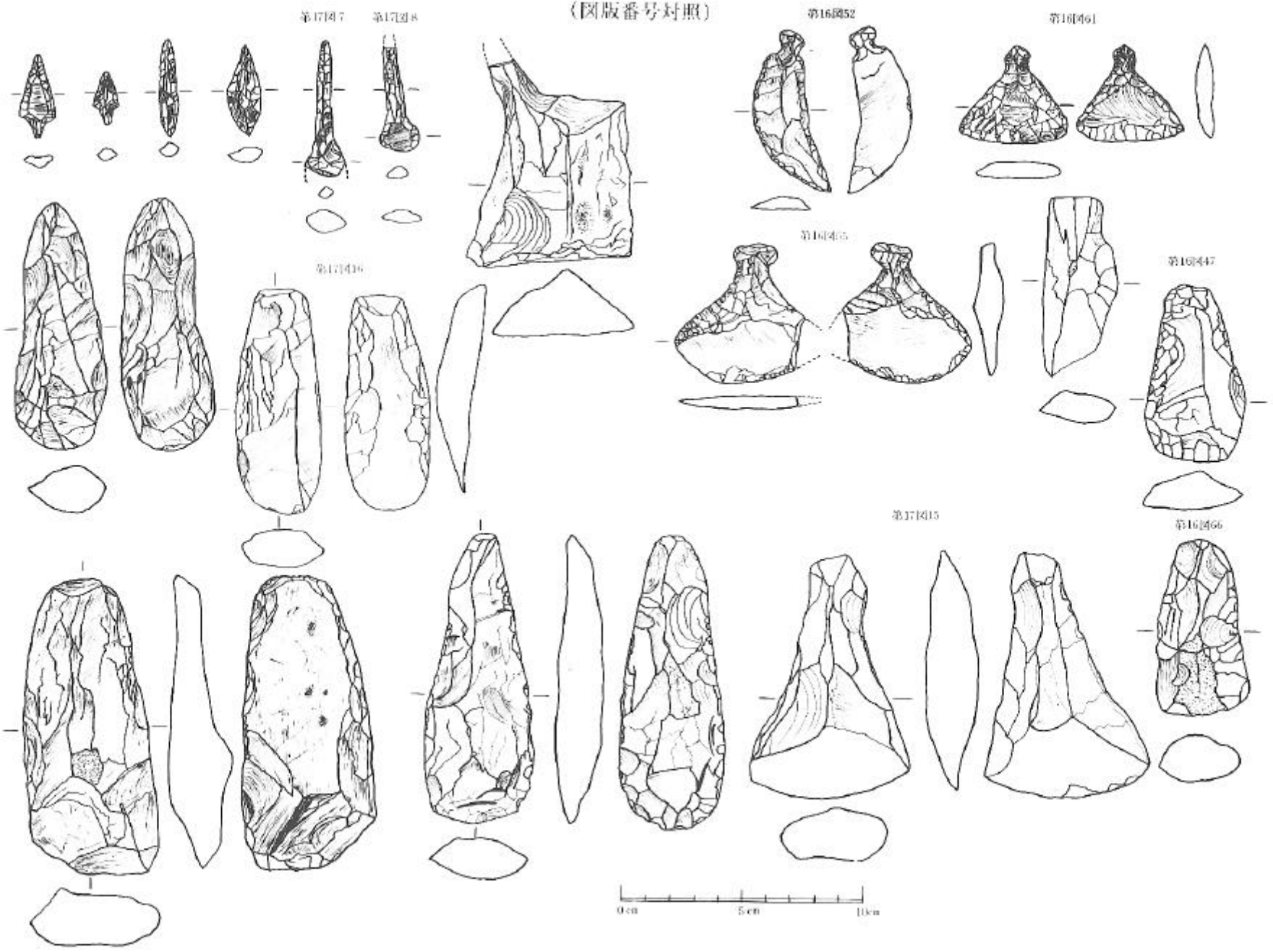
遺 物 実 測 図 6

（図版番号対照）



遺物実測図 7

（図版番号対照）

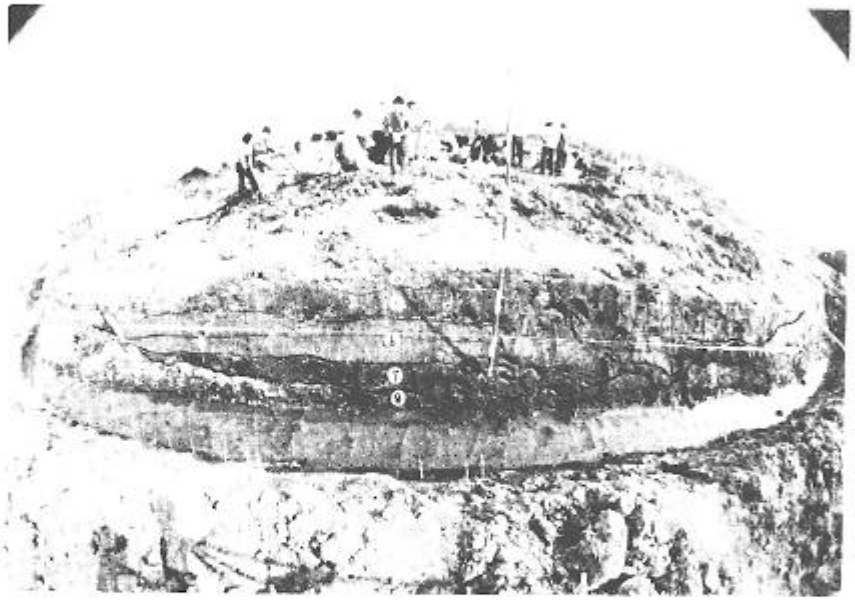


第　1　図　遺跡及び遺物出土状況

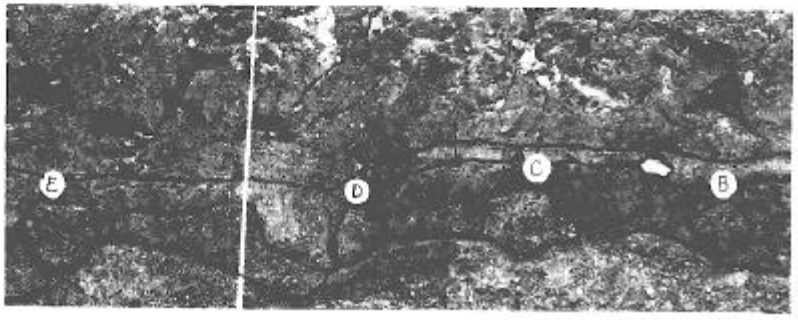
1.（鐙　田　遺　跡　A　地　点）

2.（鐙田遺跡A地点臨時排水溝）

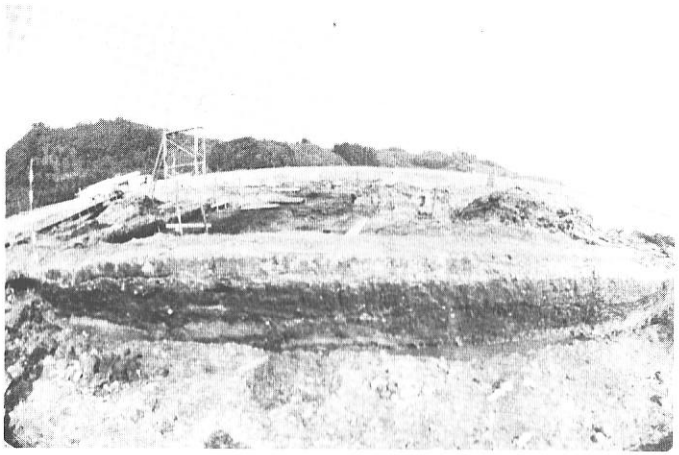
3.（鐙田遺跡A地点排水溝側壁に現われた層序）



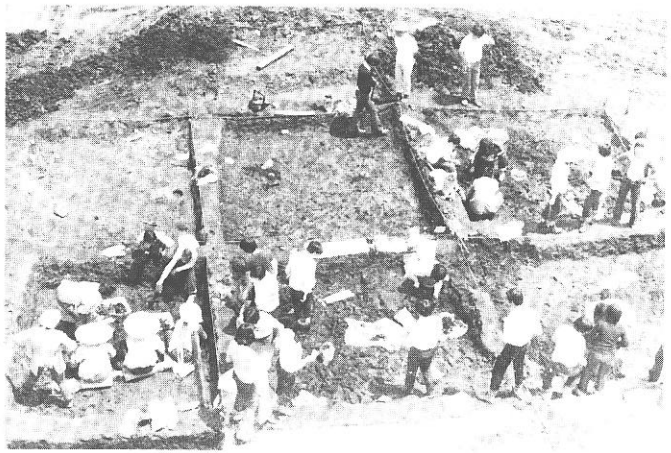
4.（鐙田遺跡A地点で誤認された柱列断面）



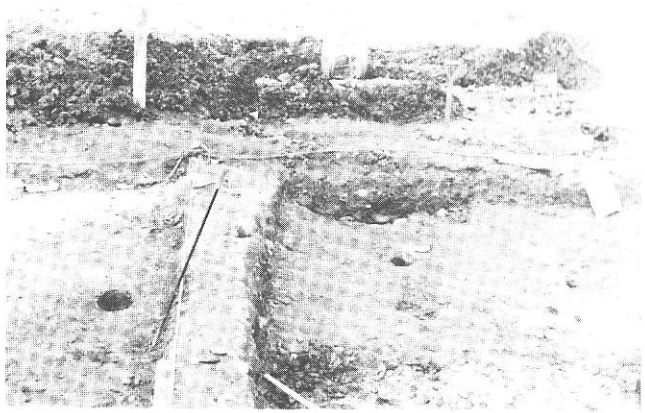
7.（上層部遺物包含層）



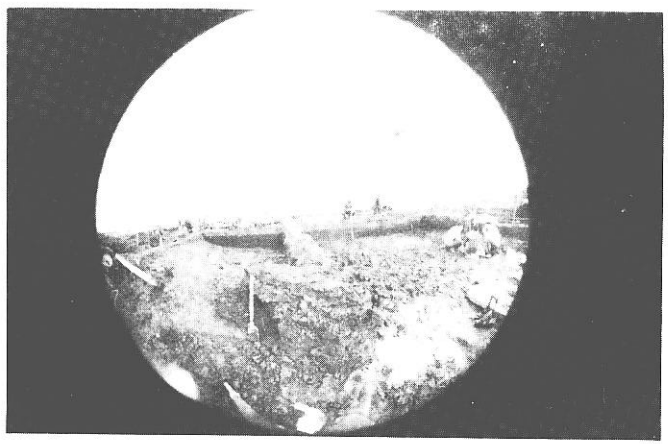
5.（A地点発掘風景）



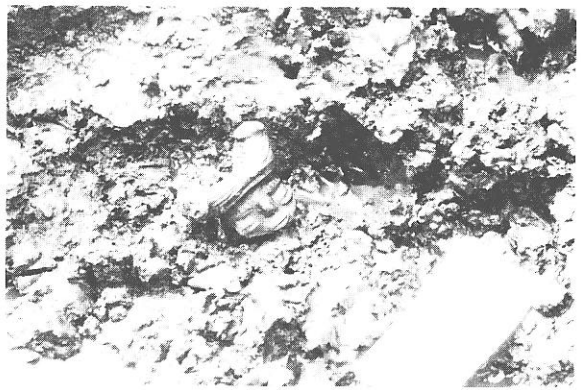
8.（遺跡東縁の柱穴と土坑）



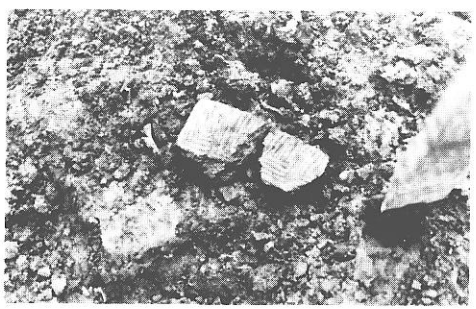
6.（上層部遺物包含層）



12. （上層部土偶出土状態）



13. （上層部土版出土状態）

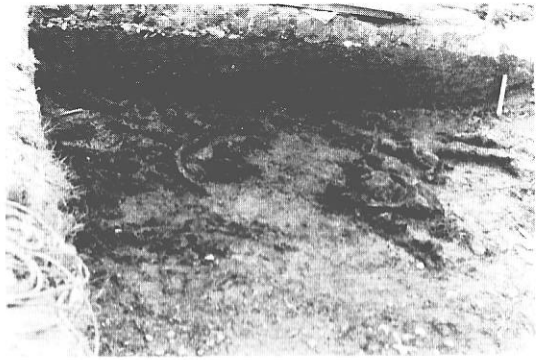


10. （上層部土偶出土状態）

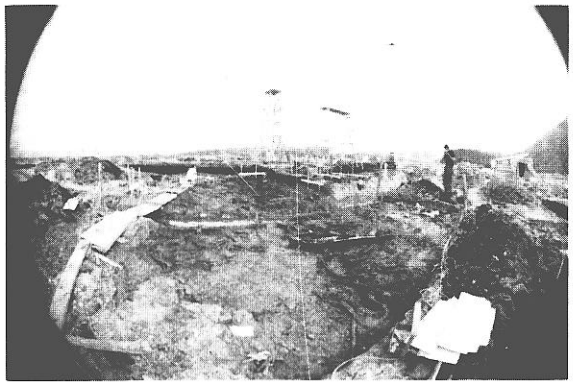
9. （上層部土器出土状態）

11. （上層部土器出土状態）

16. （植物質堆積層中の樹根）

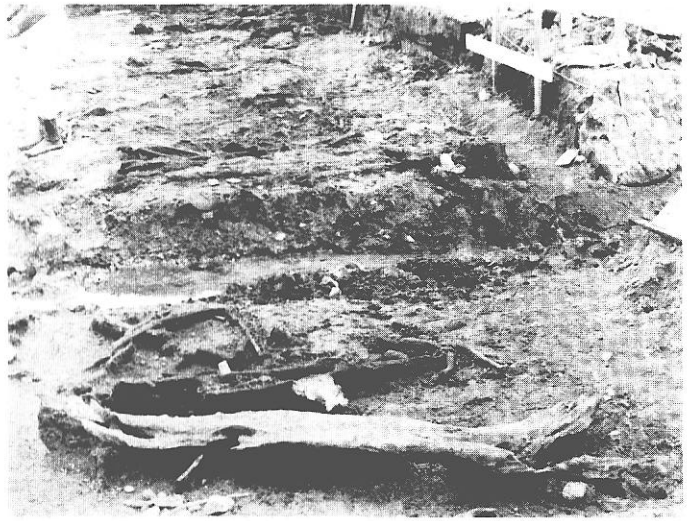


14. （下層部の泥炭化植物質堆積層＝第７層）

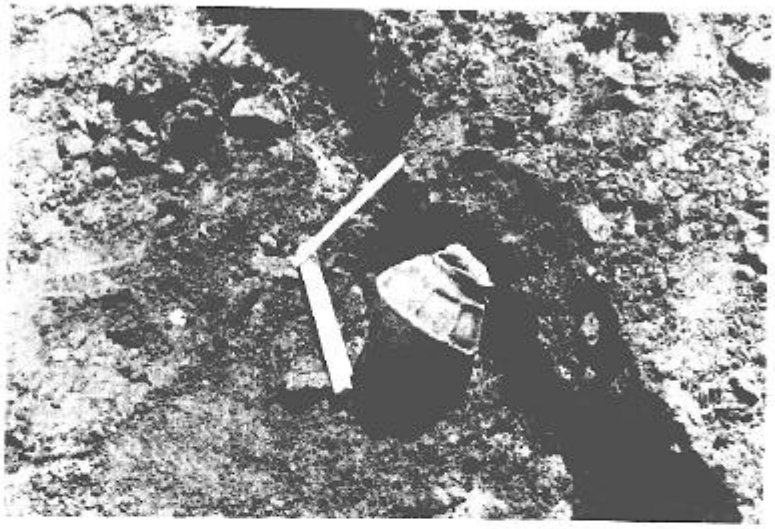


17. （植物質堆積層上面の木材とクルミ類）

15. （泥炭化植物質堆積層上面の木材）

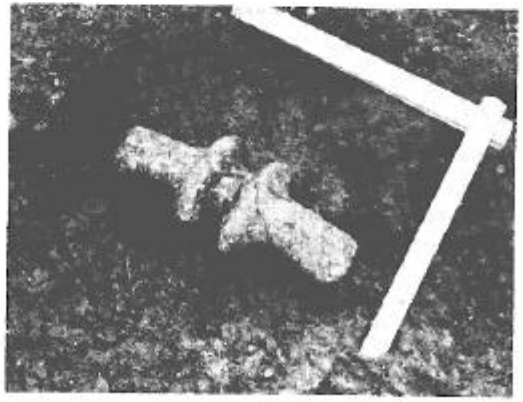


20.（鎧田遺跡B地点の土器出土状況）



18.（植物質堆積層上面の木材と土器）

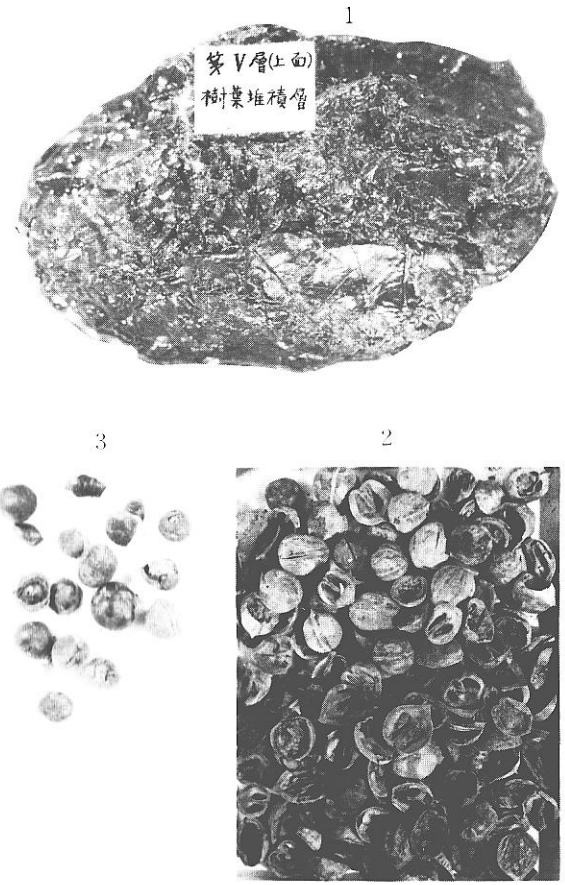
21.（鎧田遺跡B地点の石器出土状況）



19.（塞の神遺跡断面）

第　2　図

（鐙田遺跡A地点出土遺物）

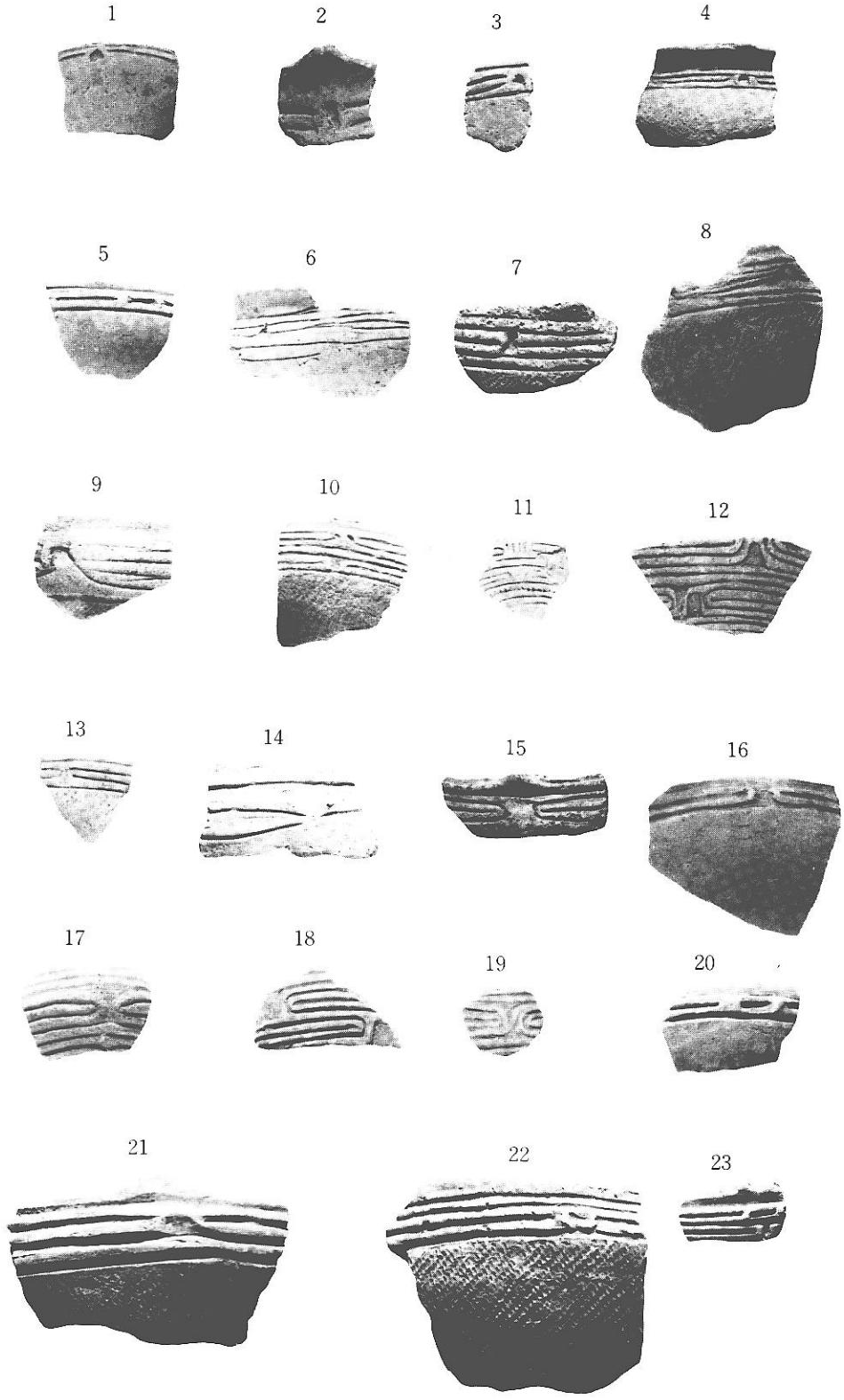


第　3　図

（鐙田遺路A地点出土遺物）

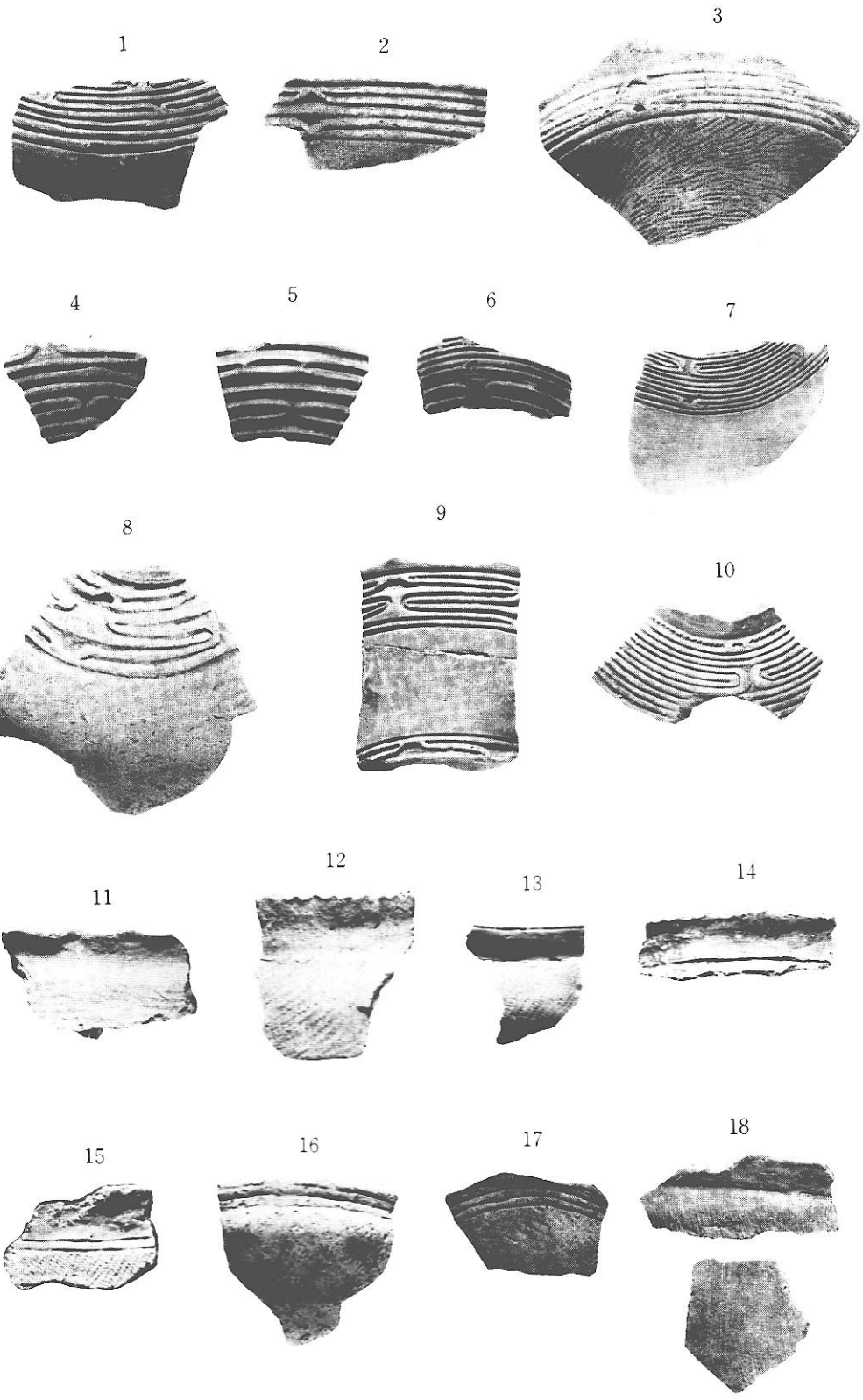
第　4　図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）



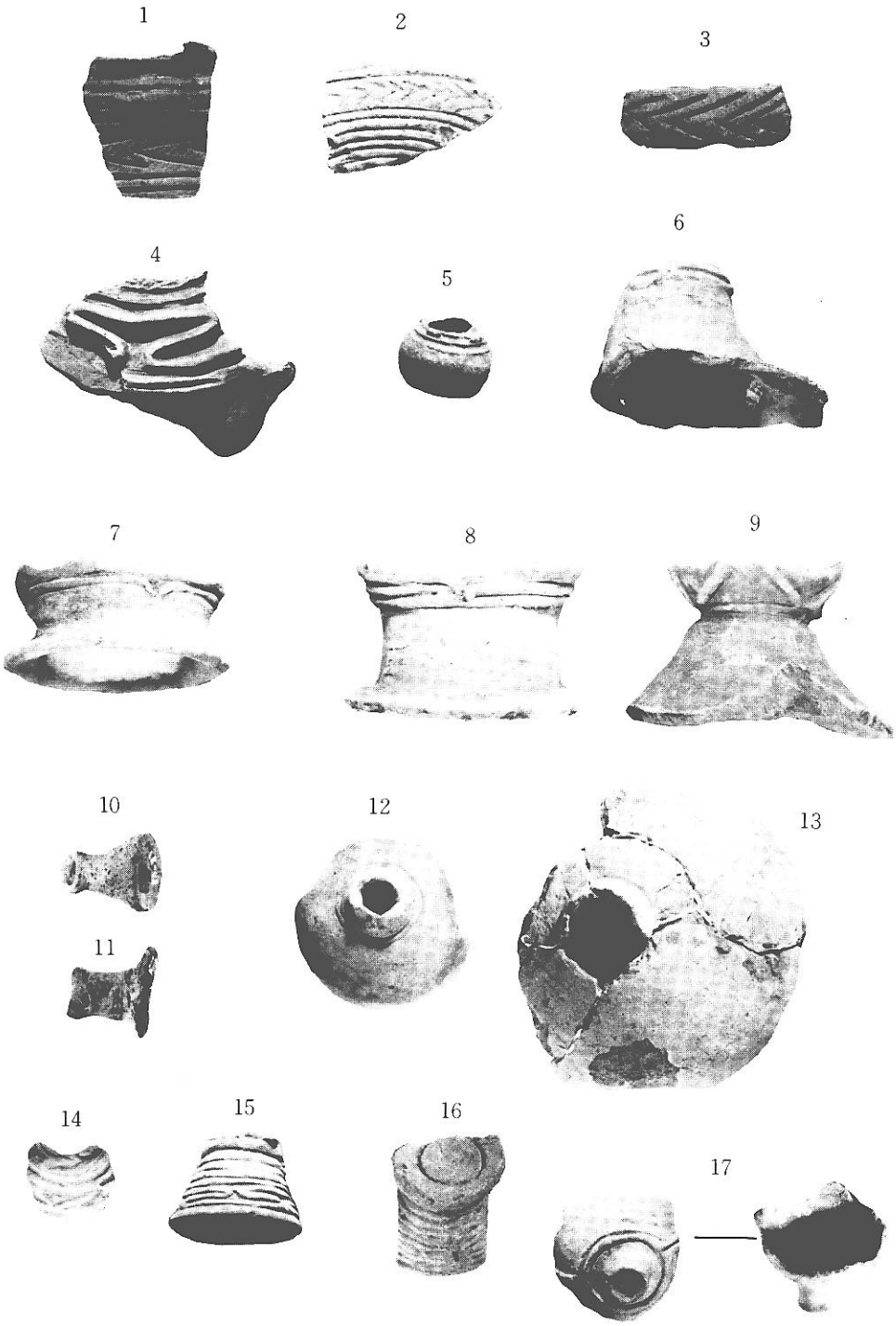
第　5　図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）



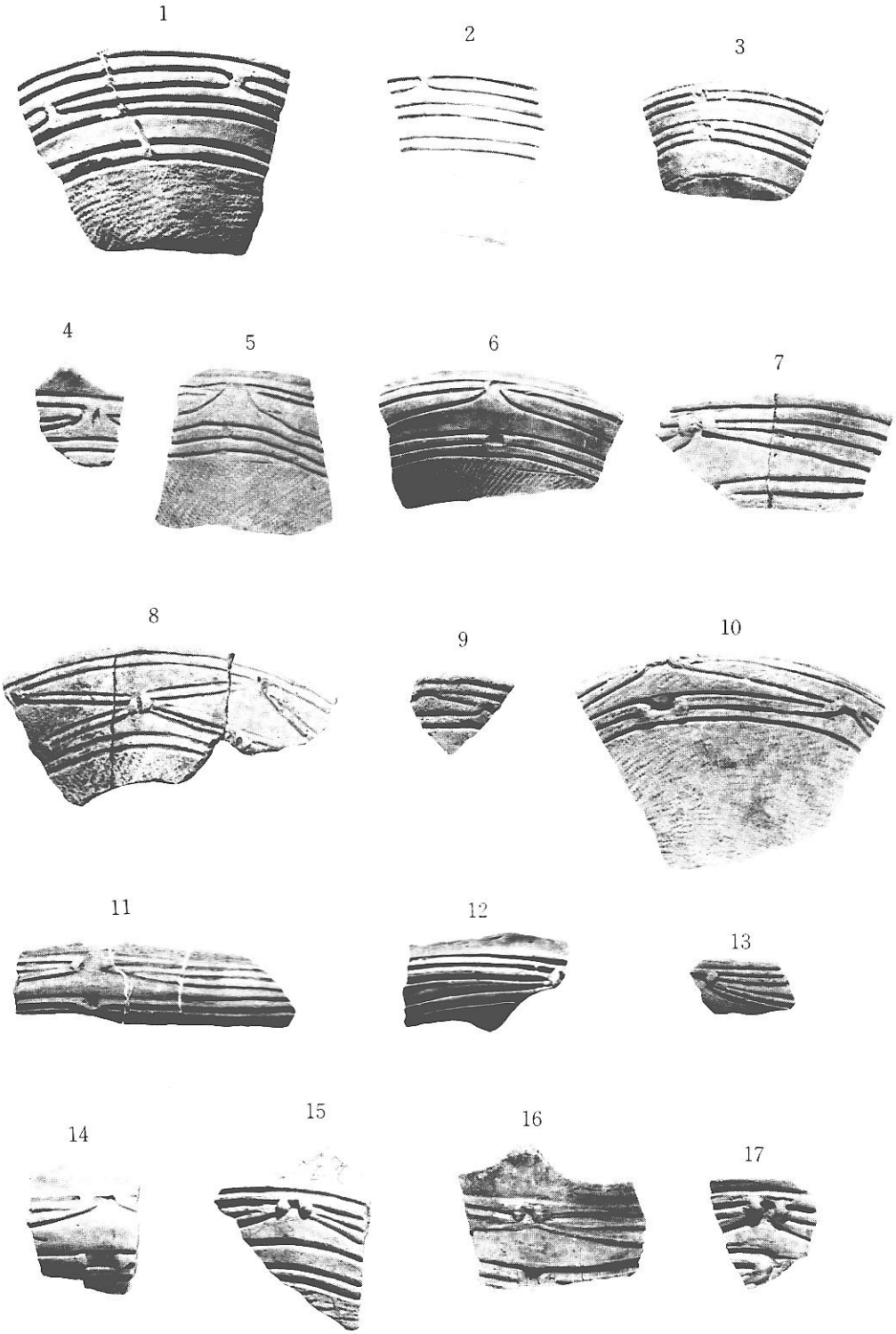
第　6　図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）



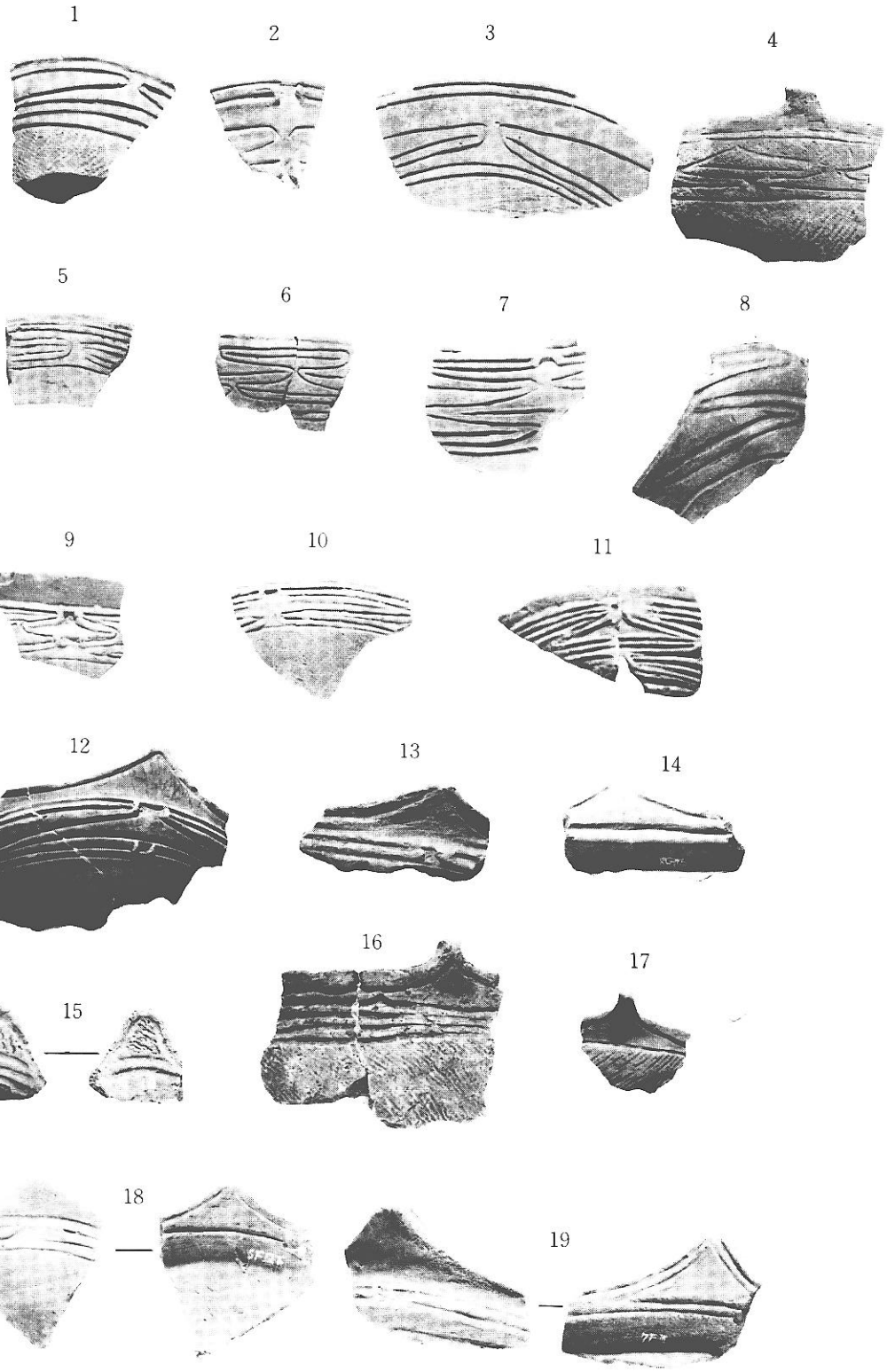
第　7　図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）



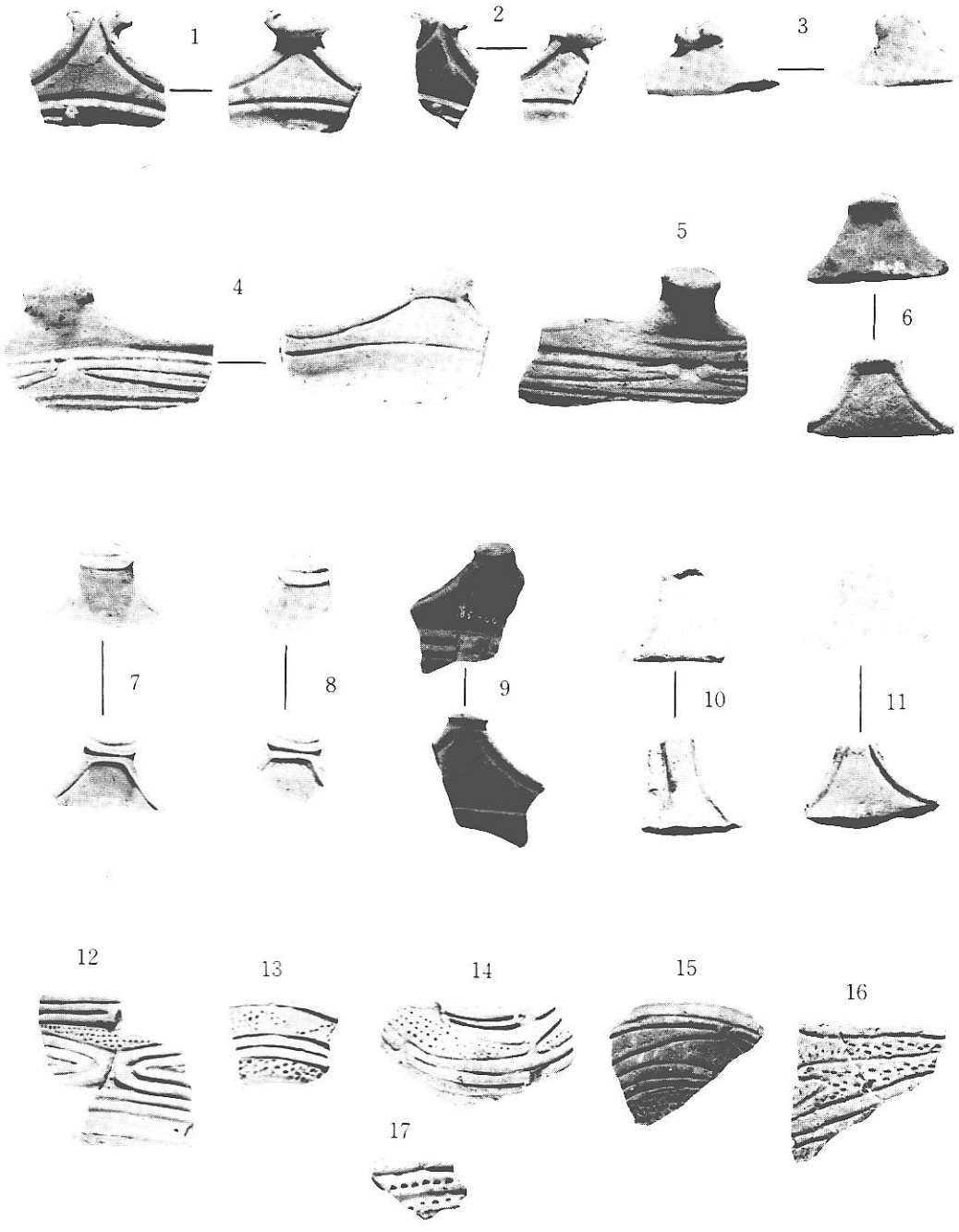
第　8　図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）



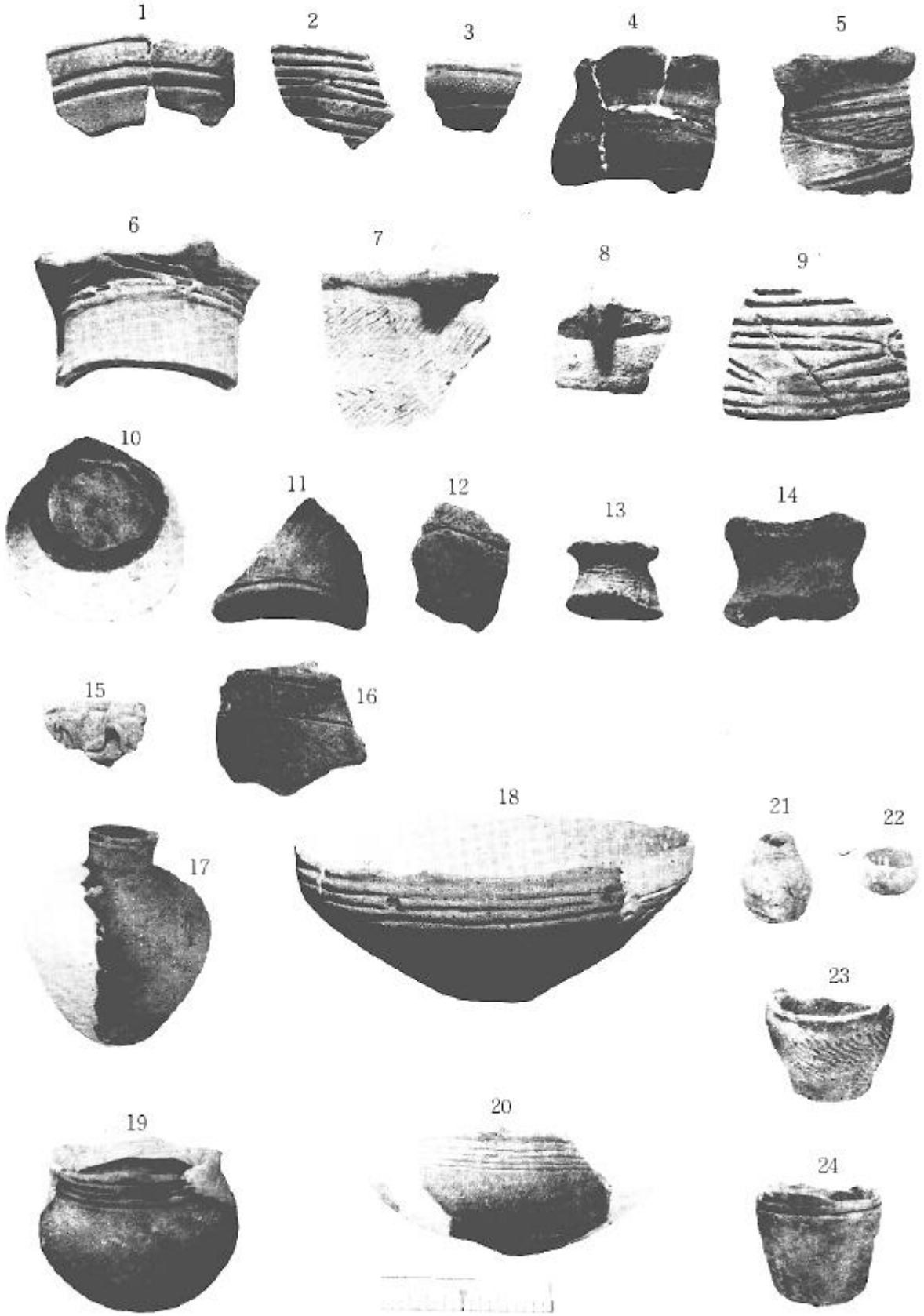
第　9　図

（鐙田遺跡A地点出土遺物）



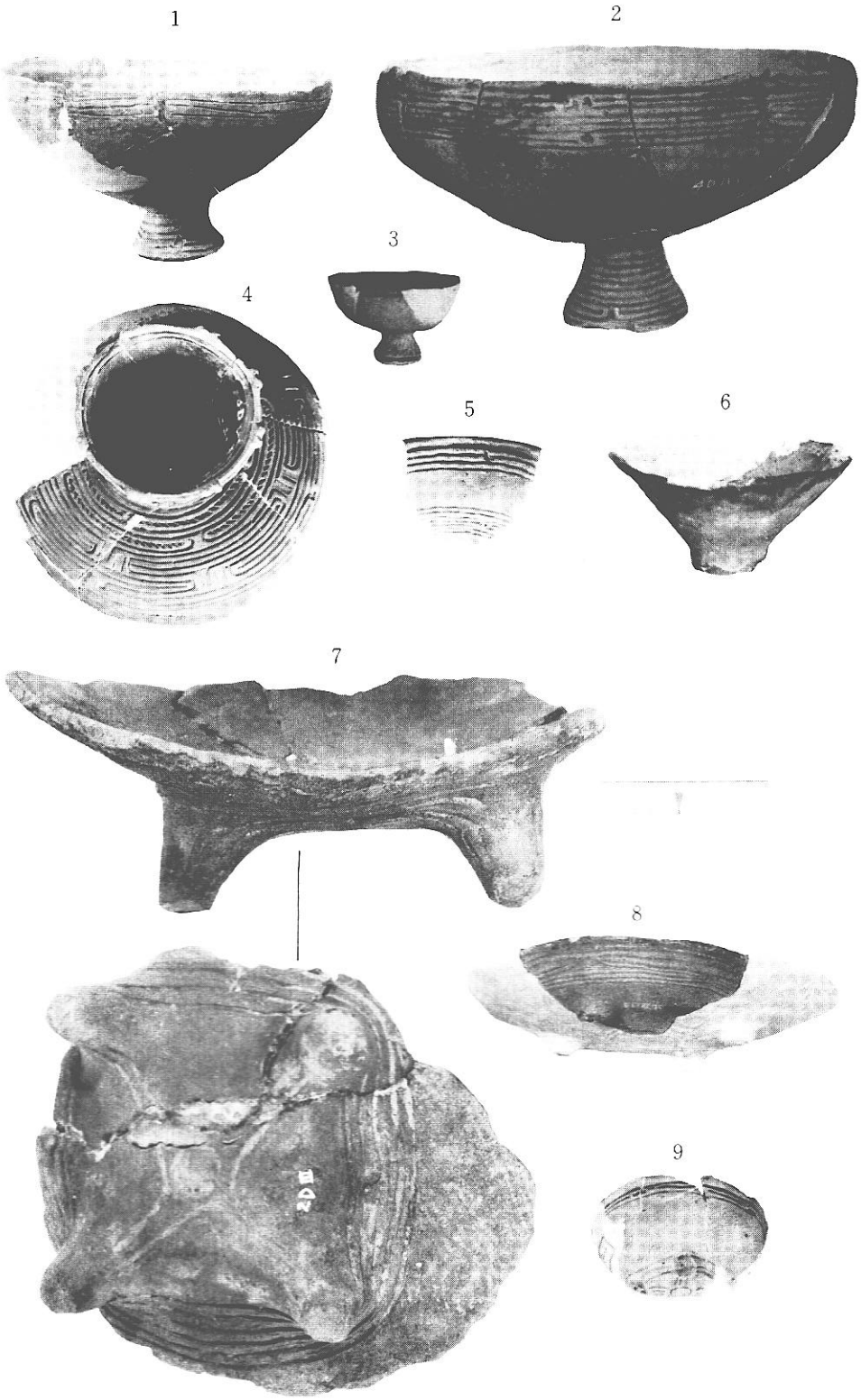
第　10　図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）



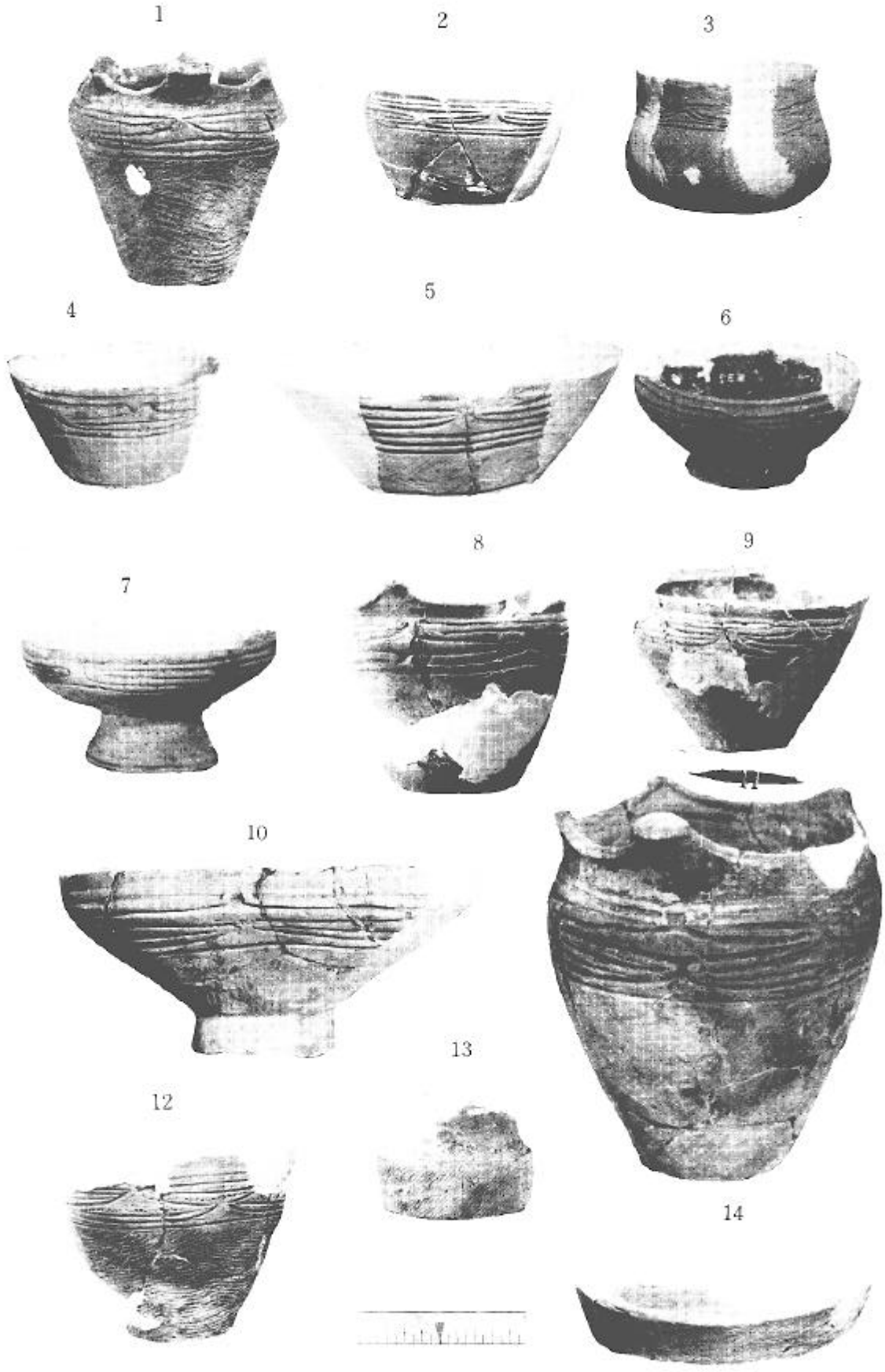
第　11　図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）



第 12 図

（ 鎧田遺跡A地点出土遺物 ）

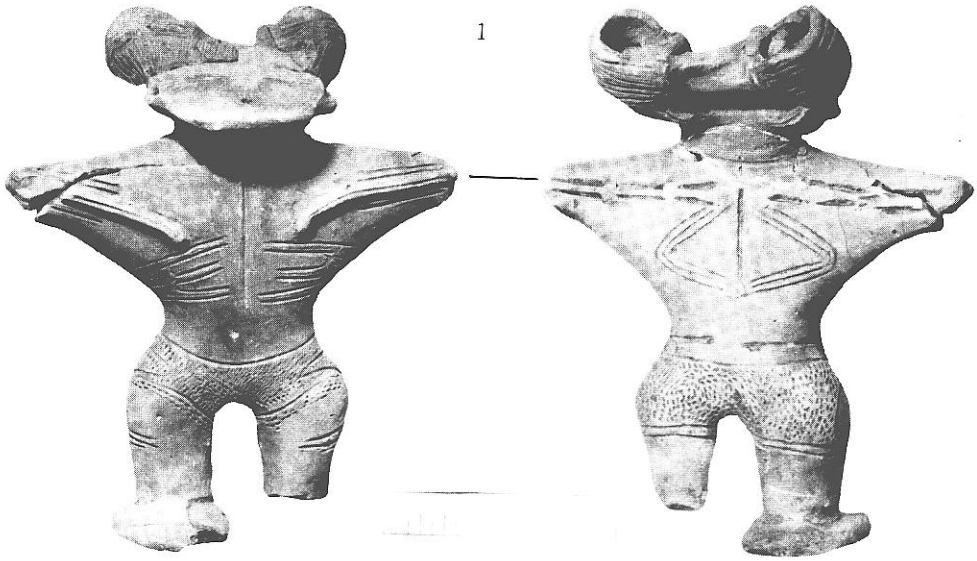


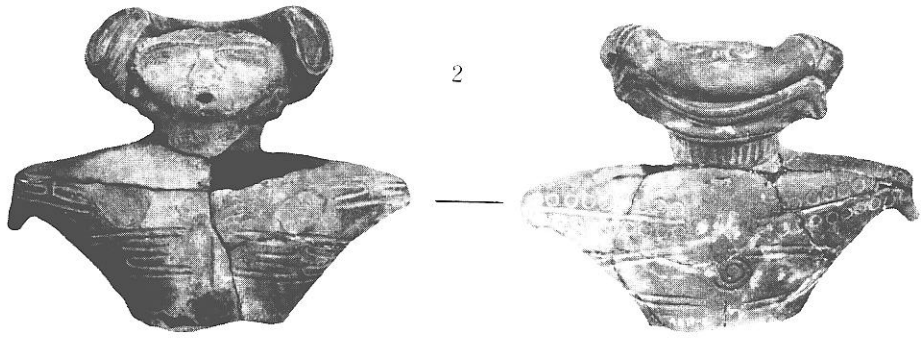
第 13 図

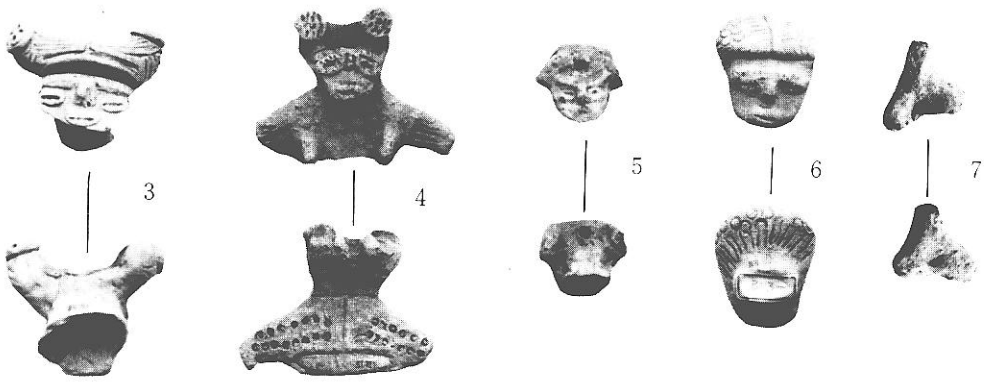
（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）

第　14　図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）

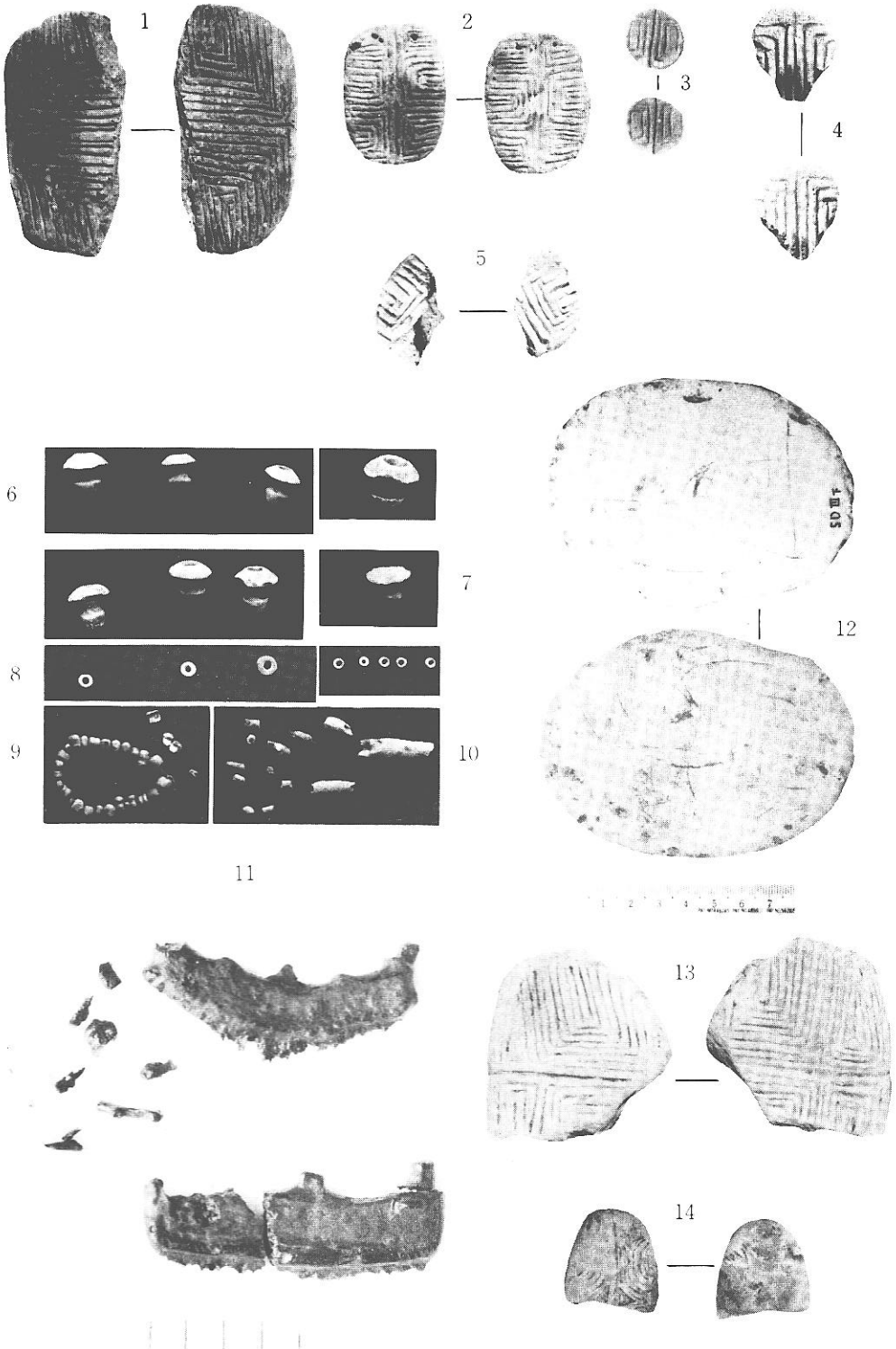






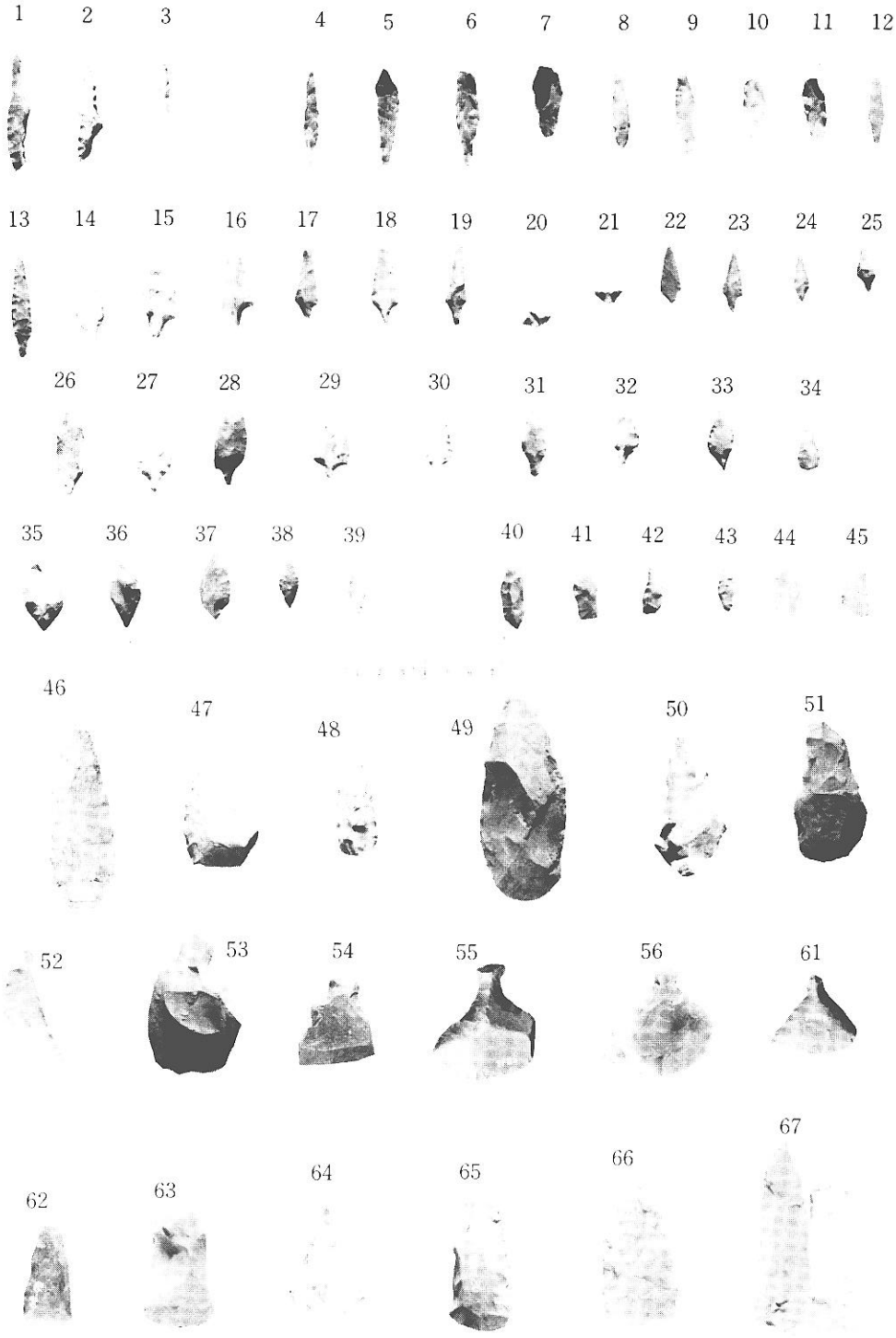
第 15 図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）



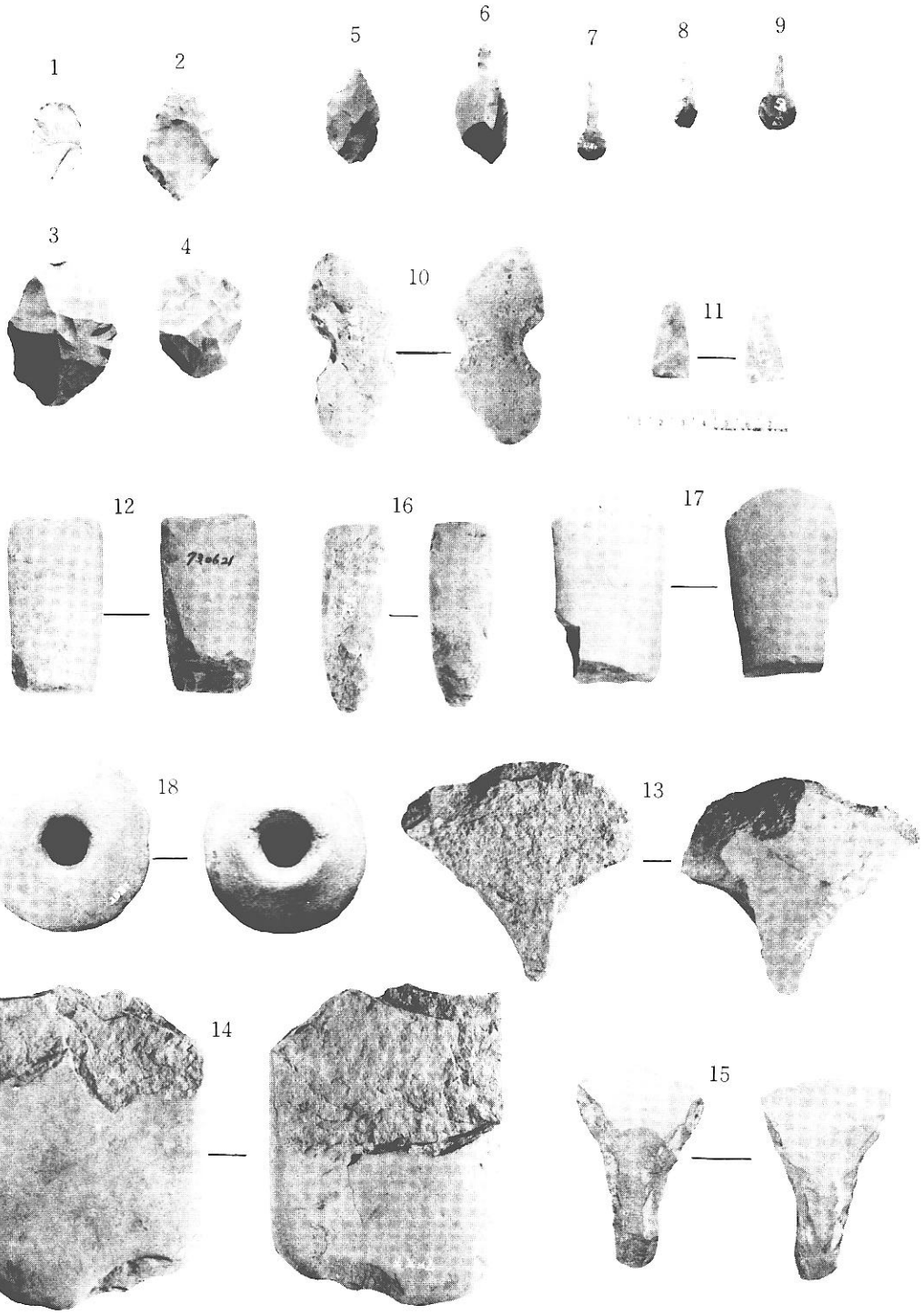
第　16　図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）



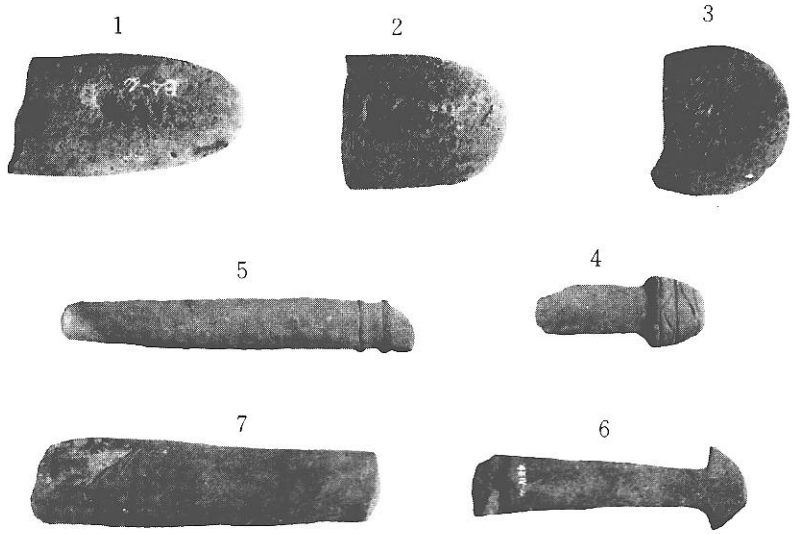
第 17 図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）

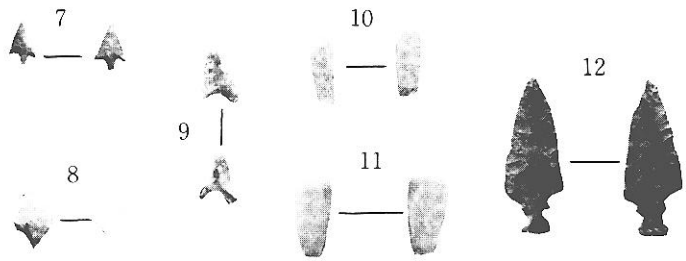


第　18　図

（ 鐙田遺跡A地点出土遺物 ）

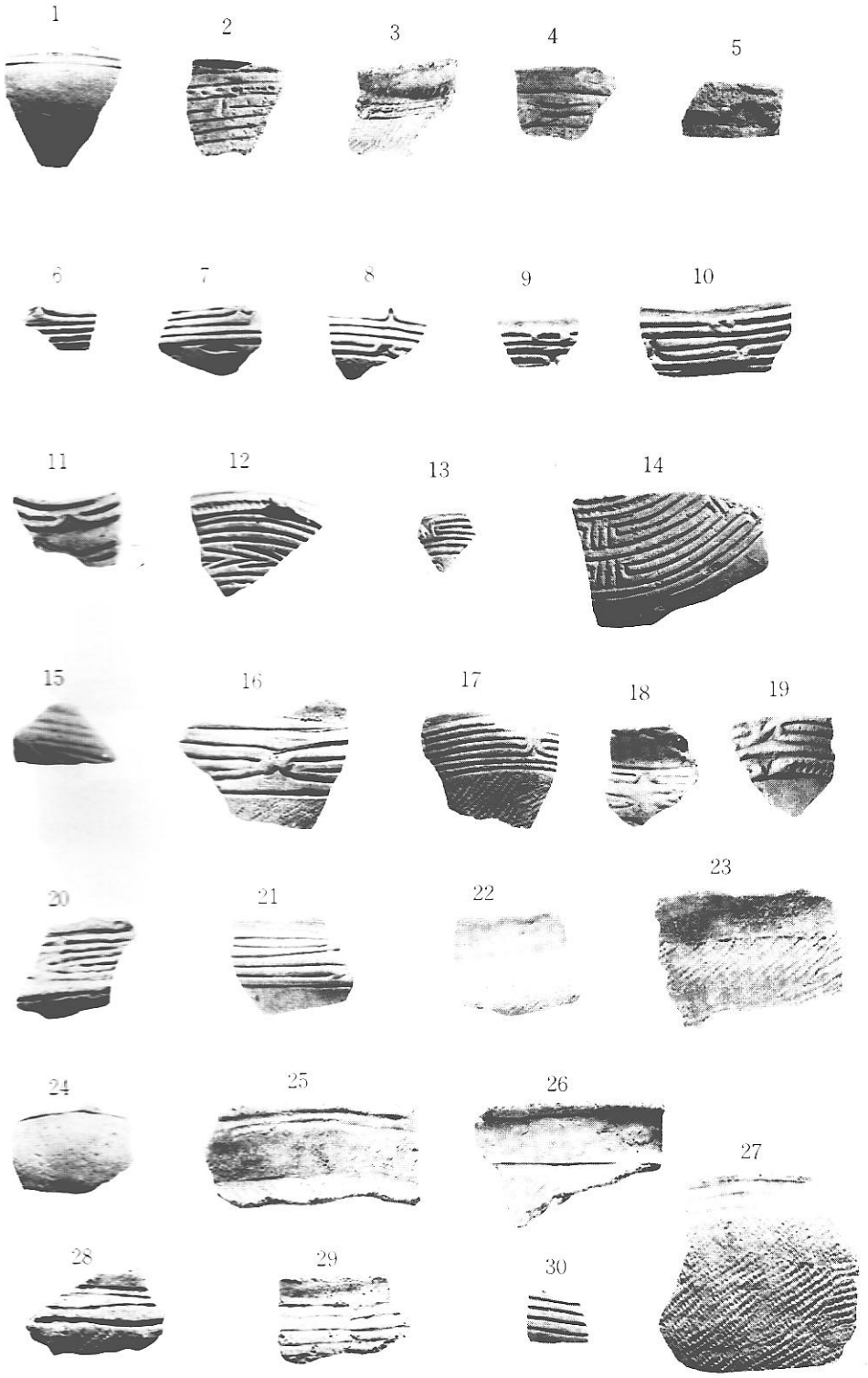


（ 塞の神石器 ）



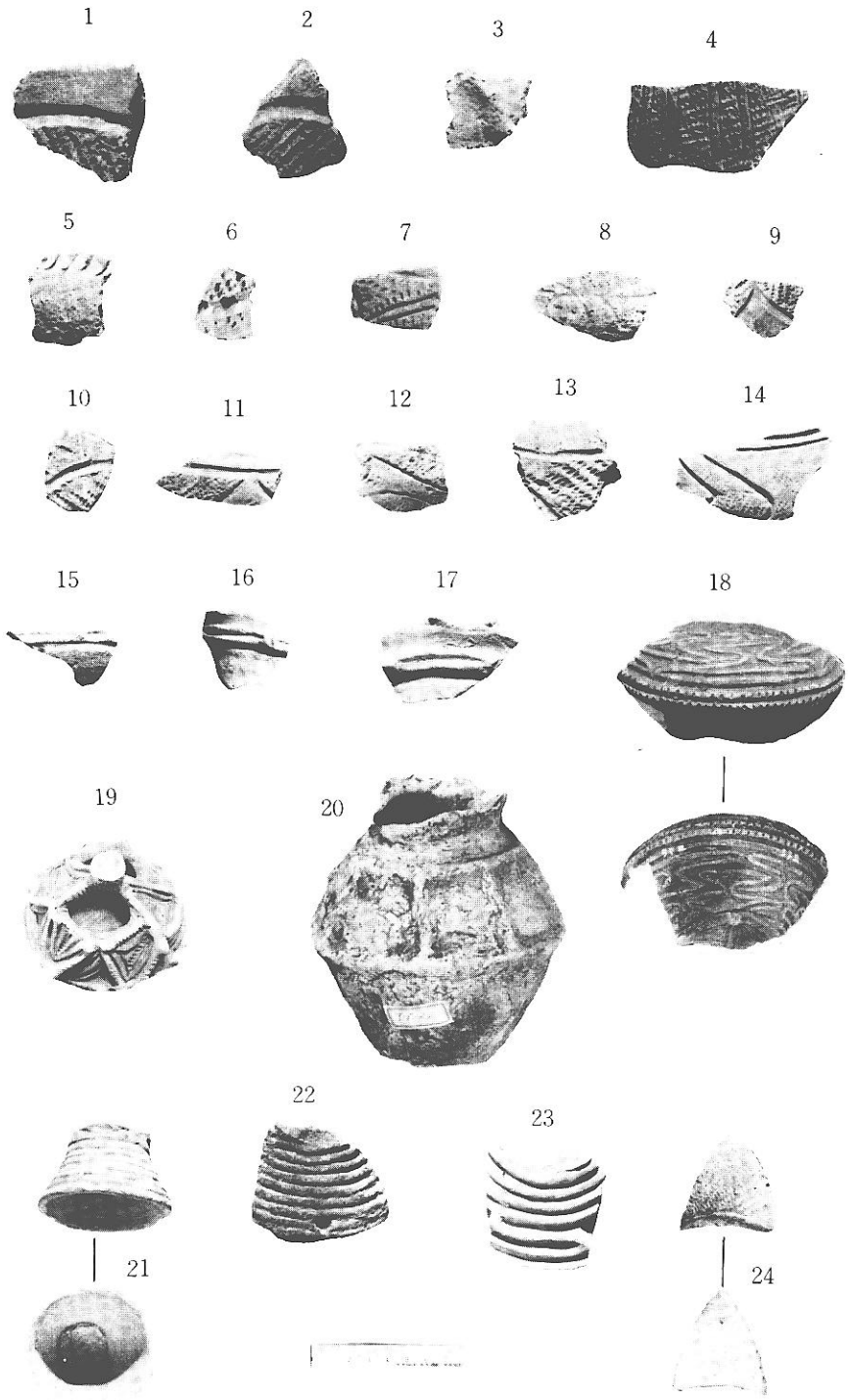
第　19　図

（ 鐙田遺跡B地点出土遺物 ）



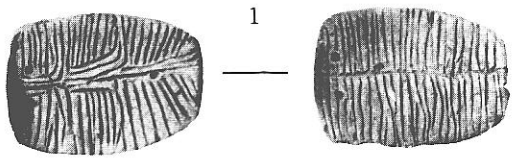
第　20　図

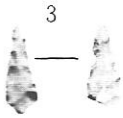
（ 鐙田遺跡B地点出土遺物 ）

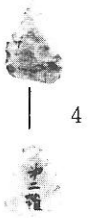


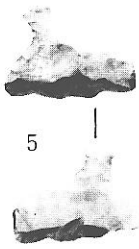
第　21　図

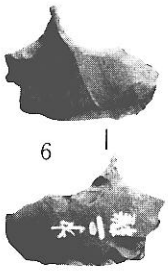
（ 鐙田遺跡B地点出土遺物 ）

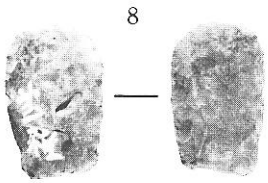


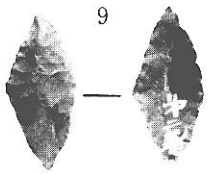


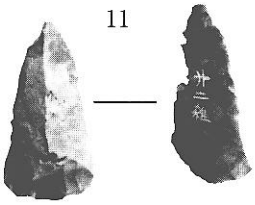


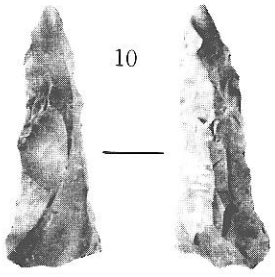






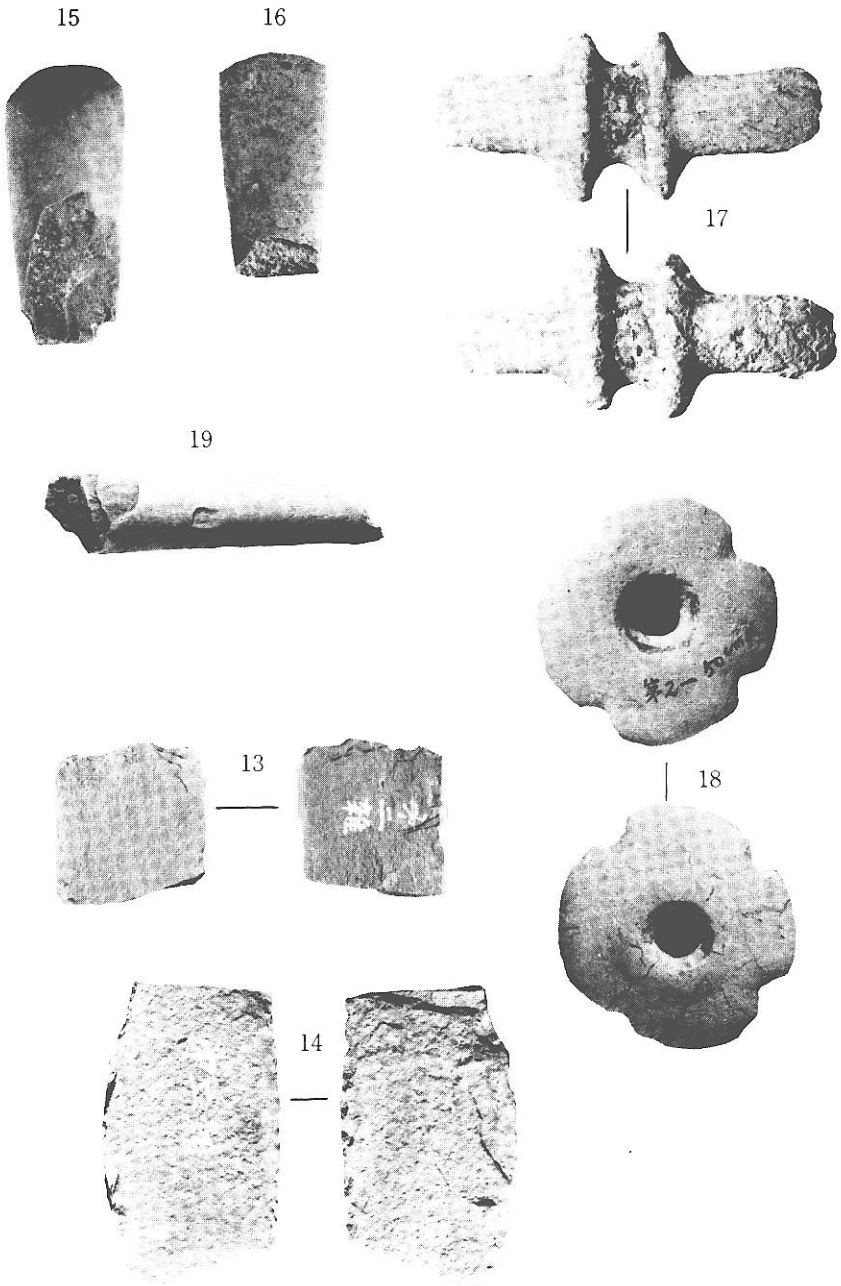






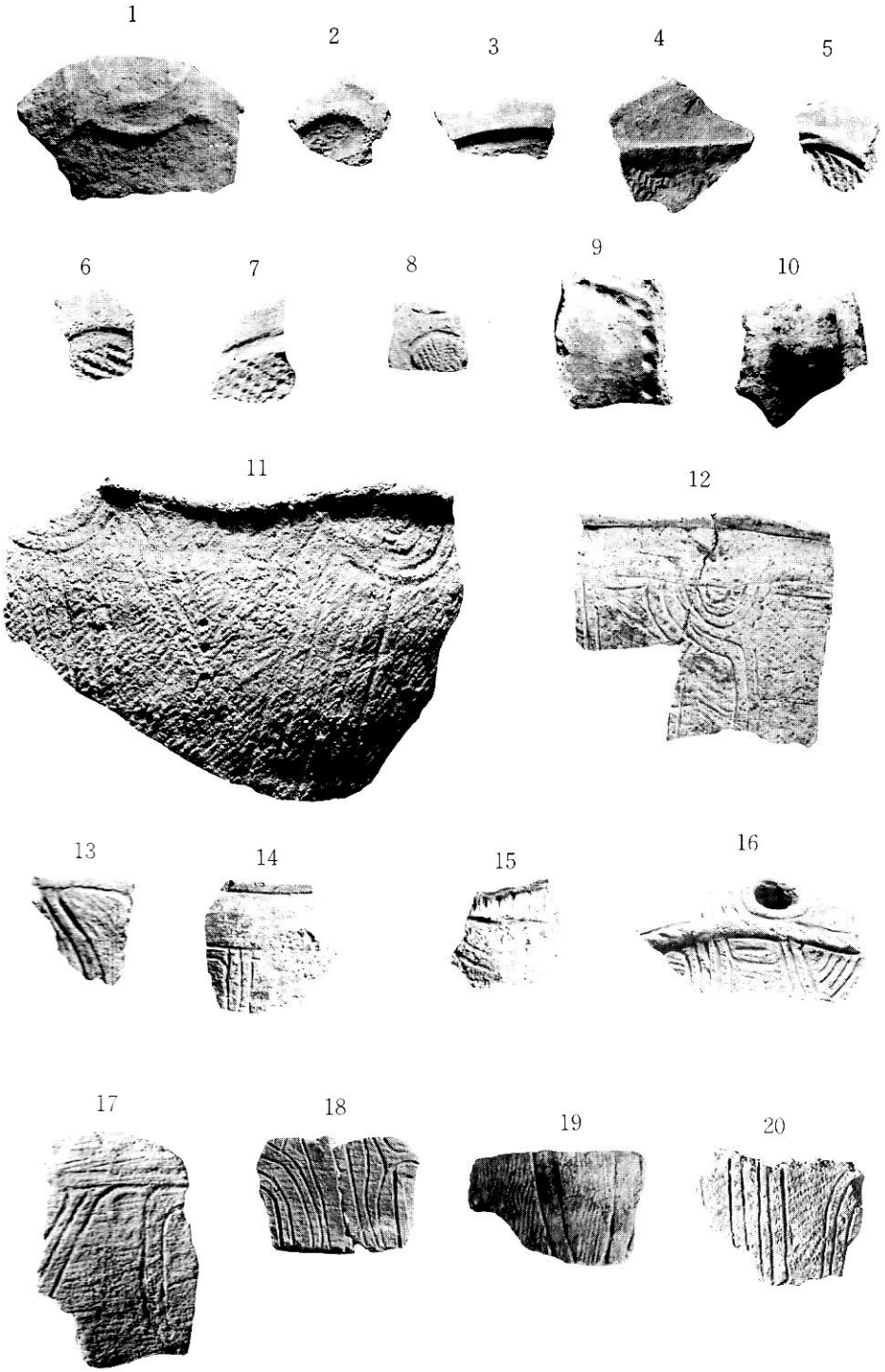
第　22　図

（ 鐙田遺跡B地点出土遺物 ）



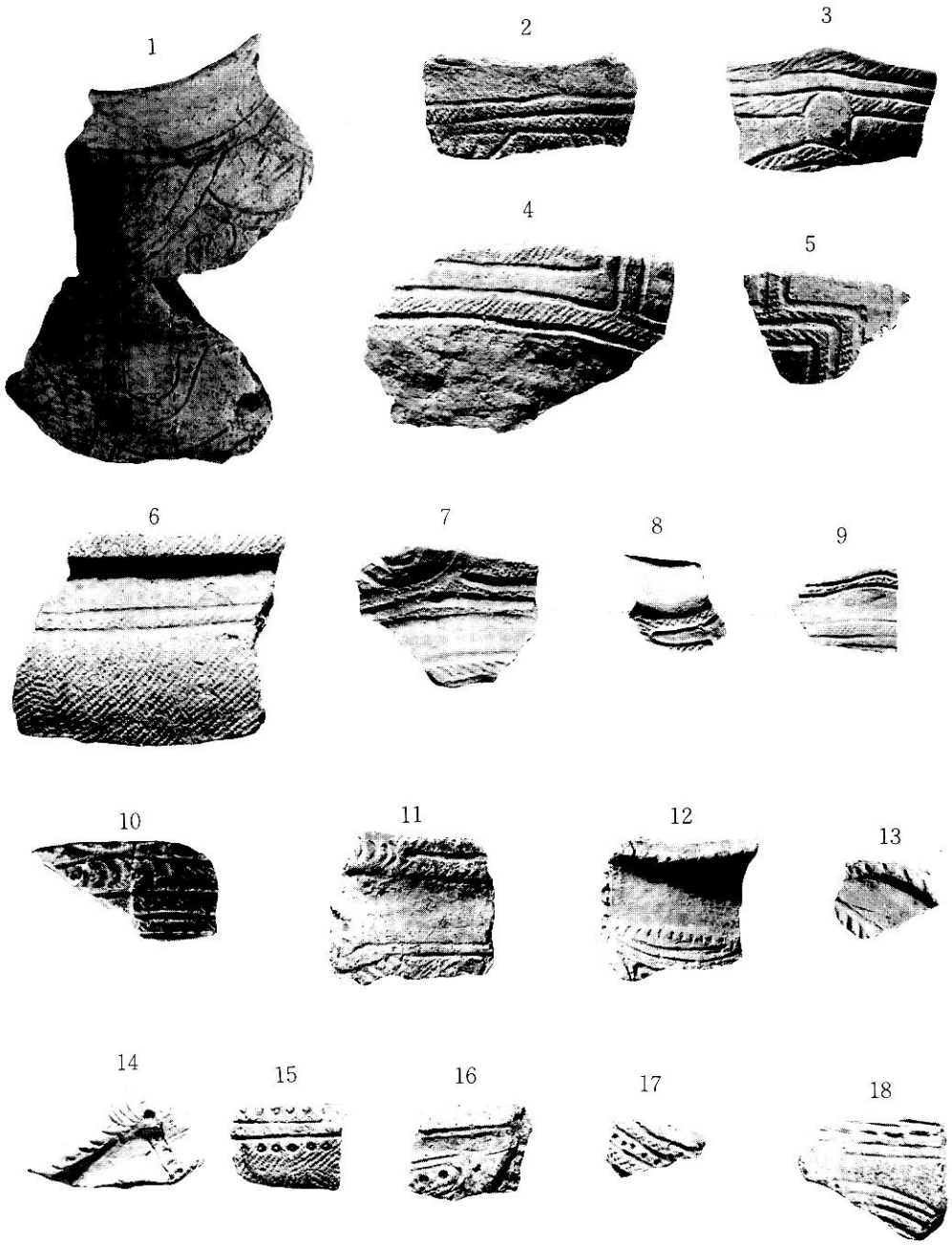
第 23 図

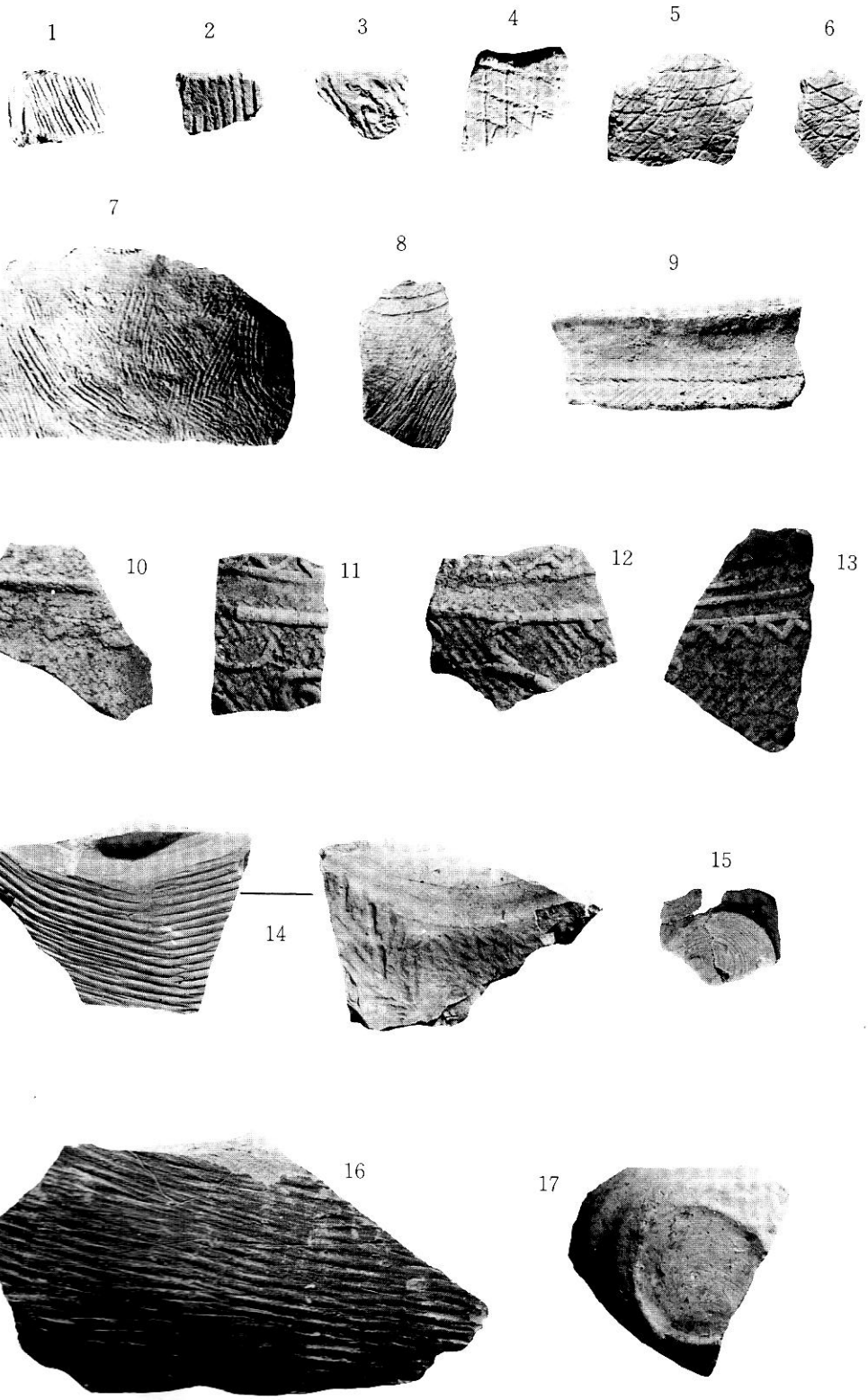
（ 塞の神遺跡出土遺物 ）



第　24　図

（ 塞の神遺跡出土遺物 ）



第 25 図

（ 塞の神遺跡出土遺物 ）